ブルーセダンとの戦い

拡大ー変革者

げんじあきら

目次

喫水は活きているか

○千鶴

○写真

○輪島クレンジング

○使い捨て輪島セッケン

○渋谷のオンナと輪島クレンジング

○ずっと追われているオトコ

○喫水は活きているのか

○また千鶴の写真が送られてきた

○喫水勘定
喫水だけでは会社はダメだ

○新製品の販売計画を出せ

○梅岡玄蕃の言いたいこと

○揚げ物屋のサングラスのオトコ

○５回目の写真が来た

○『売上を目指すと滅びる』

○６回目の写真が送られてきた

○頭が痛いと会社を休んだ

〇販売計画の打ち合わせ

〇改革の武器になるのか

〇商品開発の本質

〇７回目の写真が送られてきた

〇８回目の過激な写真

〇無銭飲食のクセあるのか

〇先里万丈『人と集団を滅ぼすもの』

〇無意識の変革者

〇山上郁夫の目的論

〇20歳になった
拡大すること

〇喫水だけでは足りない

〇金型が傷ついていた

〇千鶴カンノン

〇ブルーのセダン

〇ブルーセダンが揚げ物屋に

〇サンプルを２００つくる

〇拡大は組織の本質なのか

〇美鈴の交通事故

〇美鈴に呼ばれて

〇千鶴のカミングアウト

〇渋谷のファッションビルのバイヤー

〇発表を遅らせる指示

〇輪島クレンジングとセッケンの発表

〇もう負けたのか

〇美鈴が退院する日だった

〇12月１日発売初日

〇渋谷で千鶴が

〇喫水はシステム新製品は人材

〇足元の盗聴器

〇釜の処方を間違えた

〇輪島ＢＢジェルをつくってくれ

〇輪島セッケン新企画

〇輪島ＢＢジェル企画
ブルーセダンとの戦い

〇成形工場でブルーセダンと

〇天井の明り取り

〇宣戦布告

〇逆走して襲ってきた

〇バラとオレンジとミント

〇クリスマスセール

〇とんでもないイヴ

〇25日の勝負

〇針のむしろ

〇あなたは消えない

〇またブルーセダンが逆走した

〇年末輪島化粧品

〇大晦日に襲われた

〇勝負しないといけない

〇郡司元康

〇千鶴が撮った映像

〇千鶴の驚くべき計画

〇ブルーセダンがまた逆走した

〇勝負

喫水は活きているか

〇千鶴
「トラブルってるらしいけど」
「ええ」
「喫水とかカッコ良かったけど」
「もう１カ月過ぎてるけど」
「喫水は活きていないんだ」
「徹夜続きで修復していますけど」
「フツウになるの？」
「ええ」
「三枝さんは？」
「ずっと帰宅してないんじゃないかな〜」
「会社に泊まってるんだ」
「ええ」
「あなたを殺ろうとした人でしょ？」
９月に喫水のシステムがはじまって、もう１カ月になる。まだ落ち着いていない。バグがあっちこっち発見されて、人海戦術で修復している。網ノ目三郎も、徹夜をしている。
10月１日土曜日である。徹夜をして喫水を見て帰ってきた。９月月末の試算表のことだ。リアルタイムの試算表である。たな卸しもやって、クタクタになっている。
「マーボ豆腐なんだけど丼用にしたんだけど」
「お願いします」
「丼にするの？」
「お願いします」
明日は日曜日である。千鶴は、大阪風揚げモノのお店で働く。チェリー株式会社の化粧品の仕上げ工場で働いているのだが、日曜日は、アルバイトをしている。揚げ物のお店が、網ノ目三郎のアパートに近いこともあって、土曜

日には、時々、泊まっている。
網ノ目三郎と千鶴は、何も約束などはしてはいない。同じ会社に勤めている。知られたくはない。千鶴は、11月３日で20才になる。
網ノ目三郎は、まだ27歳である。３月が来なければ28歳にならない。若い。電気技師である。湯本化学に入社して、どういうわけだか、経営管理室に転勤になった。夜間の学校で経営経済と会計を学んだ。学んだというより、ただ学校へ通った。佐原友子がいなかったら、卒業できなかった。そしてすぐに、チェリー株式会社へ出向である。
「経営管理をしてくれ」
網ノ目三郎は、「経営の近代化のためにやってきました」と、自分に言い聞かせるようなあいさつをしたものだ。今年の、４月だった。
９月１日から、コンピューターのシステムで、チェリー株式会社は動いている。毎日朝１番に、社長の机に、リアルな試算表を届けるというのが、網ノ目三郎の目指したことだった。それを、経理の担当役員の峠下冴子は、喫水と名付けた。社長の山上郁夫と息子で営業本部長の山上一郎は、出社が遅い。事実上、毎朝、峠下冴子が、喫水を見ている。もちろん、網ノ目三郎も見ている。
網ノ目三郎の考えでは、毎朝、昨日のリアルな試算表が社長の机に届いていれば、社長に、少しくらいセンスがなくても、会社という船の針路を間違うことはないと思っている。
網ノ目三郎は、確かに、経済経営の経験が乏しい。しかし、この喫水の考え方は、間違っていないと思っている。
「おいしくできた」
「おいしいです」
千鶴のごはんは、いつもおいしい。豪華ではない。少ない収入で、お母さんと２人で、細々と生きてきたことだろう。お母さんの病気がなにかわからない。入院している。千鶴が網ノ目三郎のアパートにやってくる時は、決まって、土曜日で、しかも遅くなってからだ。お母さんの晩ごはんが終わってからだ。
「わたし読んでるからシャワーしてきて」
網ノ目三郎は、千鶴と一緒にシャワーを浴びたい。葛飾北斎には見せたくな

い。それほど素晴らしい。
千鶴は、ずっと、電子出版をしている先里万丈を読んでいる。小説も、次々に、本棚に掲載しているらしい。
「この人すごい早いんだよね」
網ノ目三郎は、『よろい』の他に、読んだことがない。多分、筆が早いのだろう。必死で読まないと、間に合わないのかもしれない。網ノ目三郎の部屋に来るのは、たまの土曜日である。そんな時くらい、先里万丈を読まなくてもいいと思う。
「パソコン貸してください」
メモリースティックの先里万丈を、網ノ目三郎のパソコンで読む。シャワーに行けだの、買い物してきてくれになる。網ノ目三郎は、もう１台パソコンを買おうと思っている。せっかく千鶴が来ても、ほとんど、話しをしない。確かに、ベッドが１つしかないから、どちらからともなく迫るのだが、もっと、千鶴を感じていたいのだ。
土曜日だけ、網ノ目三郎のシャワーはながい。パソコンを買えば、一緒にシャワーを浴びるのだろうか。定かではない。
「しっかり見たいんだけど」
ノドの近くまでことばは出ているのだが、口から出ない。
「三枝さんは、もうあなたを襲わないの？」
シャワーから出てアロエヨーグルトを食べていると、千鶴が聞いた。
「あなたって、自分を襲った人に仕事分けるんだから、カッコいい」
「先里万丈さんの変革者みたい」
網ノ目三郎には、何が変革者なのか、よくわからない。千鶴は、先里万丈に犯されているようだ。何かにつけ、先里万丈が出てくる。
「人って〜ワルイ人はいないからね」
「ワルクしているのは、その人の見えざる悪魔だから」
「よろいだから」
「三枝さんもホントは、ワルイ人じゃない」
「三枝さんの悪魔が、あなたを襲えって言った」
「あなたって〜先里さんのよろいを読んだんでしょ？」
「だからだよね」

「喫水がまだ落ち着いてないんだけど平気なの？」
「カッコいいからでも困るし」
「チカラあるの？三枝さんって」
千鶴は11月３日に20歳になる。網ノ目三郎は27歳である。ほとんど、同じ目線である。
確かに、千鶴は、網ノ目三郎のように、経営企画室の仕事などできない。セッケンの仕上げ工程で、毎日、セッケンの最終工程を担っている。しかし、人間としての生き方は、同じ目線なのだ。網ノ目三郎は、千鶴に助けられた。
もうこのまま餓死しようとして、パソコンの前に座ったままだった。千鶴からケータイがあって、ドアの前に乾燥ラーメンが置いてあった。身体が、富士山に向かった。視界ゼロの富士山を登った時、生き返ったと思った。
一度死んだのだ。思いっきりが良くなった。それを、千鶴は、よろいを少し脱いだからだと言う。網ノ目三郎は、まだよくわかっていない。
千鶴は、電子書籍で出版をしている先里万丈のファンである。ファンというより、個人的な相談もしているようだ。網ノ目三郎は、いつも千鶴に助けられていて、何も千鶴のためにやってやれないことを、すごくまずいと思っている。

〇写真
もうお昼に近かった。千鶴は、大阪風揚げ物屋さんで働いているだろう。お昼を食べに行こうと思った。最初に、千鶴と、揚げ物屋さんで会った時には驚いた。双子なのかと思った。会社勤めをしているのに、揚げ物屋さんで働いている。
正社員ではないのだろう。聞いたことがない。
ヒゲもあたって髪も整えて、出かけようと思った。
網ノ目三郎は、固まってしまった。
ついメールを見たのだ。迷惑メールにでも入りそうな名前だった。
千鶴が、網ノ目三郎のアパートから出ようとしている写真である。千鶴は、網ノ目三郎のアパートのカギを持ってはいない。どうぞとは言ったのだが、

「お母さんいるから引っ越せない」と言って、受け取らなかった。
こんなおかしなメールははじめてである。今日の朝撮った写真である。
網ノ目三郎は、着たものをすべて脱いで考えなければならなくなった。これはなんなんだ。注意をしていたのだが、三枝伸治をチェリー株式会社に招いた時点で、戦いは終わったと思ってしまった。千鶴とのことは、あれだけ注意していたのに、誰かが知ってしまった。知ってしまっただけならよいが、おかしなことに使おうとしている。
今も、揚げ物屋にお昼を食べに行こうとしている。甘かった。
「わたしのケータイメールを転送します」
千鶴からメールがきた。
同じ写真が、千鶴のケータイにも送られていたことになる。
悪意のメールなのだが、網ノ目三郎には、どうしていいのかわからない。千鶴と話したいのだが、今は、忙しい時間である。12時に近い。
網ノ目三郎の思考は、完全に止まってしまった。さっきまでの、ウキウキした気分は、一瞬に消え去ってしまった。
網ノ目三郎は、フツウは、お昼は、ラーメンをつくって食べる。アパートにいる日は、必ずだ。ラーメンをつくることさえ忘れてしまっている。考えているのだが、どこから考えていいのかわからない。焦っている。
自分だけのことならまだいいが、千鶴のことだ。
新しいメールが届いた。
今度は、スーパーマーケットで網ノ目三郎と千鶴が買物をしている写真である。
これだと、もっとたくさんの写真を撮られている。
「今日お昼食べに来ると思ってたけど」
千鶴から電話がきた。そういう気分ではない。
「お昼食べたの？」
そういう気分でもない。
「今空いてるから」
千鶴は、どういう感覚をしているのだろう。どうなっているのだ。
「ラーメンつくって食べる」
「帰りに寄るから」

網ノ目三郎は、なんと答えていいのかわからなかった。完全に混乱している。
それから夕方まで、何をしたのか、よく覚えていない。
「カギ開けてください」
17時30分だった。千鶴の日曜のアルバイトの勤務が終わっている。
「揚げ物いただいてきたから」
「ごはん炊けるまで待って」
「なにしてるの？」
網ノ目三郎には、こんな千鶴が不思議でならない。動揺していないのだろうか。
「わたし病院に行かないといけないから遅くなれないから」
炊飯器のスイッチを入れて、味噌汁の具のジャガイモを切りながら、千鶴は、何事もないかのように話す。
「今日の写真だけど」
「あなた変革者みたいになってるから襲われる」
「あなたがわたしを愛しているのを知られてる」
「あなたはわたしが攻められたら両手を挙げる」
「そのことを知らせてる」
「わたしは注意しないといけない」
「あなたはわたしを守ったら変革者になれない」
「わたしはあなたのアキレス」
「それを写真は知らせてる」
網ノ目三郎は、お昼から、ラーメンもつくらずに考えていた。千鶴は、働きながら考えていたのだろうか。なぜ千鶴は、こういうことがわかるのだろうか。千鶴はまだ19歳である。
「揚げ物丼にしたから」
「お味噌汁もおいしいと思う」
「どうしたの？」
「あの写真がショックじゃないのですか？」
「あれはあれでわかりやすいから助かった」
あんな写真を送られて、わかりやすくて助かったと言う人なんかいない。

「あの写真を周りに送られたらどうしよう」
「送られたら考えるしかないでしょ？」
「あなたの刀って切れることがわかったから切れないようにしようとしてる」
「誰が」
「わたしにもわかんない」
「わたしの写真が送られてくる度にあなたの刀は切れなくなる」
「もっとすごい写真が送られて来るかもしれない」
「あなたが嫉妬に狂うような写真」
「そんなのがあるのですか？」
「合成すればいくらでもできる」
「わたしを襲えばあなたの刀は折れる」
「私の個人的な刀が狂う」
「それは恐いかもしれないけど」
「私はやる」
「わたしの襲い方だね」
「どこまでだったらあなたは刀を折るのか」
「どこまでだったらあなたはすべてを捨ててわたしを襲った人を襲うのか」
「聞いててわかった」
「なにが？」
「私はあなたを守りにくい」
「わたしはいろんなことがあって苦労してる」
「あなたに守ってもらおうなんて考えてない」
「私に深入りしたばかりにメンドーになった」
「あなたを愛したんだから仕方がない」
ますます千鶴がわからなくなってしまう。まだ19歳である。辛いことがたくさんあると、人間ができてくるのだろうか。そんなことはない。逆だと思う。辛いことが多くて折れる。網ノ目三郎は、今でも、辛いことが多いと折れそうになる。

〇輪島クレンジング

10月３日になった。月曜日である。
「おはよう」
簡単なメールをしたのだが、返事がない。
用事もないのに、工場に入るわけにはいかない。お昼休みを待つ以外にない。社員食堂で、全員一緒にごはんを食べる。元気かどうか見る以外にない。気になって、仕事ができない。千鶴は、工場でフツウのように働いているのだろうか。気になる。車があるかどうか見に行った。来ているらしいが、顔を見ていない。
美鈴千賀子が朝からテンションが高い。輪島クレンジングと輪島セッケンである。静岡だけでやっているドラックストアーの化粧品のバイヤーの君津峰子の反応もよく、金型をつくっている。チェリー株式会社は、化粧品の会社である。社長の山上郁夫だけが開発者のようなものだった。売れなくなった。化粧品がみんな古い印象なのだ。
網ノ目三郎は、先里万丈に紹介された梅岡玄蕃に顧問になっていただいた。梅岡玄蕃は商品開発のプロだと、先里万丈は紹介した。網ノ目三郎は、商品開発などわからない。電気技師である。最近は、誰も、電気技師とは思わない。経営管理者だと思っているだろう。網ノ目三郎は、現在の経済は市場経済社会だから、市場経済のキーである商品がダメならば、何をやってもダメだと思っている。チェリー株式会社が、ずっと低迷している原因は、いろいろあっても、最終的には、商品がダメだからと思っている。しかし、網ノ目三郎は、自分で商品など思いつかないし、開発もできない。梅岡玄蕃に、すべてをお願いしている。
梅岡玄蕃は、おかしな人だ。渋谷のすごく若い女性を何人も抱えている。商品モニターとして抱えている。網ノ目三郎は、土曜日には、渋谷に呼び出されることが多い。若い女性のための商品をつくるのだからと言われる。やっている人達が、感覚的に、若い女性をわからなければダメだと言う。
美鈴千賀子は、梅岡玄蕃のコンセプトを具体化する開発者である。チェリー株式会社の近くに住んでいる。結婚して子どももいる。チェリー株式会社が、営業本部長の山上一郎の、マーケティング優先体制になって、研究部門

がなくなった時、それでも、チェリー株式会社を辞めなかった。信念とかそういうことではない。実家も近いし、子どももいる。安定を求めた。品質管理にいるところを、半ば、網ノ目三郎に説得された。
輪島クレンジングと輪島セッケンは、新しい化粧品をはじめる時に、スキンケアを中心にやりたくて、梅岡玄蕃が提案したものだ。輪島のプラセンタを使っている。プラセンタは、ブタの胎盤のエキスを使っている。２段のクレンジングで、丸い箱型の油性クレンジングとセッケン箱になっている。
「相談があるのですが」
「梅岡玄蕃さんからですけど」
「金型仕上がって、これです」
「ファーストトライのものです」
「修正するのですか？」
「キレイにするだけです」
「梅岡玄蕃さんっていうのは何ですか？」
「これを見てください」
下の段の輪島セッケンが入るところに、飴やチョコの個包装のようなものがバラで入っていた。
「個包装で使いきりの輪島セッケンです」
「梅岡さんは個包装にするのですか？」
「金型は変わりませんが、個包装のパッケージが変わります」
美鈴千賀子は、チョコレートのパッケージのような箱を取り出した。
「チェリーがこんなもの発売するはずないと思いますけど」
「金型が一緒ですのでいいのですが」
美鈴千賀子は、自信なさそうだった。
「梅岡さんと相談してください」
網ノ目三郎は、すぐに、梅岡玄蕃に電話をした。
「今週の土曜日に渋谷のいつものところで待っています」
「まだ襲われそうだから11時に来てください」
「３人にお昼をお願いします」
「美鈴さんに試作品を送ってもらってください」
梅岡の言ったことが気になった。電話を切って気になった。

まだ襲われそうだからとは何だろう。もう襲われそうもないから夜にしますでも良かったのだ。気になる。昨日メールされてきた写真のことを知っているのだろうか。千鶴しか知らないことだ。そして、犯人だ。
それにしても、こんなチョコレートのようなセッケンなど聞いたことがない。梅岡玄蕃の考えることは、よくわからない。
大盛り鳥肉ソバだった。千鶴は、こんなに食べられないと言って、網ノ目三郎の器に、半分くらい移しそうだ。遠くに、千鶴のグループがいた。千鶴は、網ノ目三郎を見るでもなく、仲間と話し込んでいた。一見、何事もないかのような雰囲気である。何度もチラッと見るのだが、千鶴は、網ノ目三郎を見ていない。それはそれで気になる。とうとう、１度も千鶴と顔を合わせることはなかった。こんなことは、いままで１度もなかった。
「ごはん食べました？」
南良子から電話があった。
「梅岡玄蕃さんから電話があって明日来るって言ってるんですけど」
「何時ですか？」
「10時に来て12時に東京に帰りたいそうです」
「わかりました」
「わたしたち７人も全員出席します」
「わかりました」
「美鈴さんにも連絡しました」
梅岡玄蕃が何をしたいかわかる。１回きりの使い捨ての輪島セッケンが、生活の中に入っていけるか、確かめたいのだ。土曜は渋谷の若いオンナで、少し大人のオンナではどうなのか、調べたいのだ。
千鶴は何を考えているのだろう。よくわからない。梅岡玄蕃は、どうしてまだ襲われそうだからと言うのだろう。
網ノ目三郎は、不安のまま夕方になった。
「喫水は落ち着くかもしれません」
「今日は私は早く帰ります」
三枝伸治が、いかにも睡眠不足の顔を見せた。三枝コンピューターの社員３人も、三枝伸治と一緒に来てもらった。三枝コンピューターは解散した。情報処理室の室長が三枝伸治である。組織上は、経営企画室の中にある。三枝

伸治の上司は網ノ目三郎である。

○使い捨て輪島セッケン

南良子たちは、どう反応したらよいのかわからないようだった。
「多分、もったいないと言われると思います」
１人が言った。
確かにそうだ。セッケンは何度も使えるからセッケンである。使い捨てだったら、ポンプ式のソープでよいではないか。
「輪島セッケンのファンだったらハンドバックで持ち歩くかもしれませんけど」
チェリー株式会社の化粧品で、しかも若い女性に、ファンになってもらうことは、難しいかもしれない。
今日から、説明会で、モニターしてみると言った。
美鈴千賀子は、チョコレートを１００個買ってきて、その中に、個包装の輪島セッケンを収めて、モニターにした。輪島クレンジングは、ボトルの
ファーストトライ品を、美鈴千賀子がバリをとって、モニター品にした。直径６センチの輪島セッケンも、用意した。同じものは、渋谷の３人にも届いているようだ。
網ノ目三郎は、梅岡玄蕃を静岡駅まで送って行った。車の中で、メールが来るのがわかった。運転中であったが、そっと開けてみた。千鶴が、揚げ物屋で働いている写真だった。静岡駅に着く前に、再度メールがあった。多分、お昼休みだから、千鶴だろう。写真を送ってきたことを知らせている。
梅岡玄蕃は、急いでいるからと、網ノ目三郎の食事の誘いを断って、新幹線に急いだ。網ノ目三郎は、改札口で、メールを見た。２度目のメールは、千鶴からではなかった。
今日の朝だろう。千鶴が車に乗り込む写真だった。これはタイヘンである。千鶴が、ずっと張り込まれて追われている。その写真を網ノ目三郎に送っている。
網ノ目三郎は、すぐ後を走っている車が気になった。近づき過ぎる。あまりにも近い。追突される。左に寄せてやり過ごそうとした。後の車も、同じよ

うに、速度を落とした。網ノ目三郎は、車を止めた。
２分くらい、そのままじっとしていた。後の車は、若い男らしかった。すぐ後にいるのだ。
「何か用事ですか？」
網ノ目三郎は、後の車のナンバーをケータイのメモに書いて、意を決して、若い男に話しかけた。
「千鶴から離れろ」
思ってもみなかったことばが、若い男から出た。
「イヤだと言ったらどうしますか」
「千鶴はオレのオンナだ」
「約束でもしているのですか？」
「あなたは誰ですか？」
「あなたは私を知っている」
話ながら、網ノ目三郎は、なぜだか、ホッとしていた。こんなことでよかったと思った。
「千鶴が、あなたと約束をしているのだったら、私は考える」
「あなたの希望だったら、沿えないかもしれない」
「千鶴があなたを選ぶんだったら私は千鶴から離れてもよい」
若い男は、網ノ目三郎の言っていることがよくわからなかったらしい。
「あいつはいつも世話になると抱かれてしまう」
「バカだ」
網ノ目三郎は、この若い男がわからなくなった。
「約束してもよい」
「千鶴が私から離れようしても私は追わない」
「もちろん、あなたを選んであなたのところへ行くんだったら、私は、それでいい」
「千鶴が、世話になった男に抱かれていた時はいつですか？」
「高校２年だ」
「あなたと千鶴は一緒に住んでいたのか」
網ノ目三郎は、この若い男は、ずっと千鶴を見ていたのだろうか。ホントは、どういう関係なのだろうか。

「もう写真は送らない」
それだけ言うと、若い男は、少しバックして、網ノ目三郎のチェリー株式会社の車を追い越して、去って行った。
網ノ目三郎はずっと考えていた。あの若い男のことだ。
夜だった。千鶴から電話だった。
「ゴメン」
「トモノリと会ったんだ」
「どういう関係なんだ」
「お兄さんじゃないけどお兄さん」
「オレのオンナに手を出すなだったけど」
「いつもそう言う」
「どういう意味なんだ」
「聞いたんでしょ？」
「世話になるといつも抱かれると言ってた」
「昔の話し」
「いつもトモノリが助けたのか」
「脅してわたしはまた孤独になった」
「今はわたしは先里万丈がいるから」
「ブッダのようなオトコがいるから心配ない」
「オトコはみんなずるかった」
「あなたは違うけど」
「これで写真のことは片づいたのか」
「もう写真は送らないと言った」
「お兄さんじゃないけどお兄さんってなんだ」
「お母さんが違う」
「どうして千鶴のことが気になるんだ」
「知らないで幼なじみ」
「関係はないのか」
「兄妹だから」
「愛してるのか」
「そうだ」

「あなたは経営企画室長だから」
「また世話してやると言ってわたしを抱いてると思ってた」

〇渋谷のオンナと輪島クレンジング

10月８日11時に渋谷だった。土曜日である。喫水のバグも少なくなって、
少しは気がラクになっている。
最も気がかりだった千鶴の写真が送られることもなくなった。
今日は、輪島クレンジングと輪島セッケンを３人の渋谷の若者は、どう感じたのか、集中できそうだ。
「しばらく」
11時に渋谷のカフェだった。梅岡玄蕃との渋谷は、しばらくだった。網ノ目三郎が喫水に集中していて、輪島クレンジングと輪島セッケンに、頭が向かわなかった。
やっとである。
「南さんからメールをいただきました」
「60歳近くの女性は、はやり難しいですね」
「外出先でセッケンを使うこともないでしょうから」
３人の渋谷の女性がやってきた。まだ20歳にはなっていないように見える。
梅岡玄蕃は、他にも、食品などで、彼女たちに依頼をしているのだろう。状況を聞いている。
そのまま、輪島クレンジングと輪島セッケンに、話しが移っている。
「このクレンジングはよく落ちる」
「油性なんでしょ？」
「だから湿り気の多いセッケンを使ってほしいんだけど」
「洗顔してしっとりしたいからね」
「しっとりになったの？」
「これなら大丈夫」
「個包装を使ったの？どっち？」
「個包装」
３人とも個包装だった。

「セッケン箱が汚れないから」
「個包装は高いかもしれないけど」
「モニターだとタダだから」
梅岡玄蕃は、３人に封筒を渡した。いくら入っているのかわからない。食事は、網ノ目三郎が支払う。カフェだが、イタリアンである。たくさん頼んでみんなで食べる。
網ノ目三郎さんが静岡に帰るまでには、今日の結果を送ります。梅岡玄蕃は、明るいうちに帰ってくれという態度だった。梅岡玄蕃は、そのままカフェで、パソコンを開いた。話したくないのだ。書こうとしていることが目の前に浮かんでいるのだろう。梅岡玄蕃は、モニターと話しをしている時に、何もメモをとっていない。梅岡玄蕃がメモをとっていないので、当然、網ノ目三郎もメモをとらない。ただ、モニターの女性と話しをしているだけだ。
梅岡玄蕃に聞いたことはないが、多分、本音が知りたいから録音とかメモはしないと言うだろう。
網ノ目三郎は品川から新幹線に乗った。
メールだった。
だれかよくわからない。
千鶴の写真だった。
今日の日付だ。
どこかに出かけるつもりのようだ。車に乗り込むところだ。
網ノ目三郎は、一気に混乱した。
それまで落ち着いていたのに、動悸が早くなって、ボトルのお茶を飲んだ。
トモノリだろうか。またはじめたのだろうか。
横浜に着く時に、千鶴からメールがあった。
「夕方行く」
「写真が来たけどトモノリに聞いたら違うと言った」
どうしてこんな写真が送られてきているのに、網ノ目三郎のアパートに来るのだろう。網ノ目三郎は、千鶴がよくわからない。それでも、来なくていいとは、メールしなかった。多分、千鶴が網ノ目三郎のアパートに入るところを撮られる。

今度は、誰なのか、おかしなオトコが、もう１人いるのか。千鶴のことで、網ノ目三郎に嫉妬しているオトコがいることは、容易に想像できる。トモノリとは異なった動機だ。
網ノ目三郎がアパートに着いた時には、千鶴は、まだ来ていなかった。多分、遅くにやってくる。お母さんの病院に行っているのだ。
梅岡玄蕃から今日のモニターの結果が送られていた。
「投資がかからないのだったら、個包装とセッケンを２つやった方がいいのではないかというのが、私の考えです」
梅岡玄蕃は、網ノ目三郎が、社内で説明に困らないように、南良子のモニターと渋谷の３名のモニターの言っていることを、キチンと並べてくれていた。どうしてこんなに覚えていられるのか不思議である。

〇ずっと追われているオトコ

千鶴は、やはり遅くなってやってきた。冷蔵庫を見ないとわからない。
「モヤシがなんでこんなにいっぱあるの？」
「いっぱいのつもりでもなかったんだけど」
「ニラもいっぱいだけど」
「使ってください」
「ブタさんもいっぱいあるから野菜炒めでいい？」
「お願いします」
「ごはん炊けるまで少し時間ある」
「パソコン貸してください」
網ノ目三郎は、写真のことを聞きたいのだが、千鶴は、先里万丈を読もうとしている。
網ノ目三郎と千鶴のケータイが鳴った。
「ここに入って来る時のあなただけど」
千鶴は、素早く駆け出した。網ノ目三郎も駈け出した。危ないと思った。
アパートの駐車場にオトコがいた。
「警察に行きます」
中年の見知らぬ男だった。

「高校２年の時のアルバイト先の店長」
だいたい察することができる。千鶴はお金に困っていたのだ。トモノリが脅して連れて帰ったのだろう。
「わたしは何も怖いものがないから訴えます」
「もう15枚目の写真です」
「今日はこの人にも写真送ったでしょ？」
「わたしも限度だから」
「帰って来てくれ」
「イヤだ」
中年の男は、車に乗り込んで去って行った。網ノ目三郎は、ナンバーを覚えておいた。ケータイメモに書き込んだ。
「野菜炒めしなくてよかった」
「納豆は？」
「お願いします」
「勝負つけようと思ったのですか？」
「今日来ると思った」
「ずっとストーカーだったんだ」
「トモノリに言ったらあの人殺される」
「あなたたち兄妹はおかしな関係だな〜」
「辛さがわかる」
「彼も辛かったんだ」
「お父さんが殺人者」
「今は何をしているのか」
「工事現場で作業やってる」
千鶴にメールがきた。
「家族もいるから訴えないでほしい」
「先里万丈さんの小説みたい」
「どこかで勝負しないといけない」
「できたから」
「野菜ないから明日買物行って」
「わたし揚げ物屋さんだから」

「わかった」
網ノ目三郎は、マジマジと千鶴を見るしかなかった。
まだ20歳になっていないのだ。網ノ目三郎を使ってストーカーの決着をしたのだ。まだ他にもいるかもしれない。実にアタマがいい。知恵が働くし閃く。感心する以外にない。
「こんなわたしじゃイヤだ？」
野菜炒めを食べながら千鶴が聞いた。
「自由にしてください」
千鶴は箸を置いて、大粒のなみだを流しはじめた。
しばらく、網ノ目三郎も食べるのを止めた。
千鶴は、大粒のなみだを流しながら、網ノ目三郎を見ていた。

〇喫水は活きているのか
「あんたのボスに言ってくれない？」
「何をですか？」
「ジャンプしている１億２千万円の道すじをたてろ」
「湯本化学にも現金払いをするように計画しろ」
「うるさく言ってくる」
神部五郎は、湯本化学の経営管理室の室長である。チェリー株式会社の親会社である。当然の要求ではある。
峠下冴子は、何度も電話があって話したくないと言った。しかし、網ノ目三郎は、湯本化学から出向している社員である。言ってくれと言われても、言うべきことばがない。
もともと、チェリー株式会社の経営者は、湯本化学のチカラを利用しようとしている。チェリー株式会社の39％の株を持っている。しかし、湯本株式会社は古い会社で、おっとりしている。派遣されている役員も、社長の山上郁夫と息子の山上一郎に、上手にあしらわれている。お金が足りなくなれば、１億２千万円のジャンプのお願いをする。ここのところ、５か月連続でジャンプしている。
現在の担当役員の神部五郎は、厳しい人だ。湯本化学株式会社の経営管理室

長である。ジャンプしている１億２千万円は早く戻すように要求してくる。
「あんたこれからどうしようとしてるの？」
峠下冴子は60くらいだ。チェリー株式会社のお金と会計の番人のような人だ。網ノ目三郎のお母さんより年上である。
「今は喫水が威力を発揮してほしい」
「威力ってなに」
「在庫の回転を上げたい」
「お金を在庫からつくりたいの？」
「預金も」
「預金はムリだって」
「神部さんも喫水を見てるから」
「預金も落とせって言ってくるの？」
「１億２千万円の道すじを示さなかったら言ってくるんじゃないですか？」
「売上は依然として良くないけど」
「コストが少し下がるだろうからやっていけるけど」
「銀行と交渉するのはイヤだな」
「在庫は西条朋子に頼もう」
「あんた１億２千万円の道すじを書いて」
「在庫と預金を落とすことでいいですか？」
「仕方ない」
「喫水勘定をつくってください」
「なに？」
「預金を圧縮してそこに集めてください」
「４か月先にして」
「１億２千万円の実行ですか？」
「うん」
「承知しました」
「計画書は私がつくりますけど神部五郎さんに送るのは峠下冴子さんにしてください」
「わかった」
多分、喫水ができていなかったら、こんな芸当はできないと思った。次第

に、喫水は、活きてきているのかもしれないと思ってしまう。
美鈴千賀子が、梅岡玄蕃のワードの文を読んでいる。
「忙しいんだろうけど」
「相談しましょう」
網ノ目三郎は、書きはじめていた喫水勘定の道すじを、一旦止めることにした。昨日の渋谷の３名の若い女性モニターの結果を伝えないといけない。
「前川芳則さんも一緒でいいですか？」
「どうぞ」
美鈴千賀子が、前川芳則に電話をした。
「前川さんはどう思われますか？」
「セッケンを２つやっても投資は大丈夫ですか？」
「個包装は大人の女性は難しそうです」
「しかし大きいセッケンは若い女性は使わないでしょうから」
「投資は同じです」
「じゃ〜梅岡玄蕃さんの案のように輪島セッケンは２つやりますか」
網ノ目三郎は、何も話さない。はっきり言って、よくわからない。商品のことはよくわからない。このままではいけないとは思っている。

○また千鶴の写真が送られてきた
「品質管理から経営企画室に人事異動していいですか？」
網ノ目三郎は、美鈴千賀子に聞いた。美鈴は、現在は、月曜と火曜だけが経営企画室である。経営企画室といっても、梅岡玄蕃と商品開発をしている。チェリー株式会社では、以前あった、商品開発の組織を、マーケティング中心に変えるために、廃止している。美鈴千賀子も、品質管理に転属になっていた。
「お願いします」
今日10月９日中に決めておきたかった。網ノ目三郎は、佐藤寛治のところへ急いだ。もうここまできたら、商品開発と品質管理の仕事を兼ねることは難しい。
佐藤寛治は、快諾してくれた。９月17日付けにしたくて、横辰八郎の机に急

いでいた。
メールだった。また写真である。メールをそのままにして、横辰八郎と話しをした。９月17日になった。
網ノ目三郎は、危うく、メールの写真を忘れるとこだった。美鈴千賀子は喜んでいた。
また千鶴の写真だった。サングラスの男と腕を組んで歩いている。これはなんだ。千鶴から夜にメールがあると思っていた。
網ノ目三郎は、少し遅くなって帰った。歩いて帰った。多分、襲われることはない。少し寒くなってきている。台風も来ている。いつものスーパーマーケットで、長いもを買った。モヤシも買った。キャベツも丸ごと買った。お好み焼きを焼こうと思った。
21時になった。千鶴は何をしているのだろう。メールが来ない。この写真が何なのか、知らせて来ないといけないだろう。
しびれをきらせて、写真を、千鶴に転送した。
すぐに返事が返ってきた。
「病院から帰ってこれからごはんにする」
「こんな写真知らない」
「いつこの写真が来たの？」
網ノ目三郎は、電話した。
「ちらし寿司つくってるけどおいしそう」
「このオンナはわたしだけどこんなオトコ知らない」
「かなり手の混んだ写真だと思う」
網ノ目三郎は、ことばがなかった。
「あなた〜動揺した？」
「この人凄いよね〜こんな写真送ったら効果があるとわかってる」
「効果ってなんだ」
「あなたの思考を停止すること」
「なんのためにだ」
「あなたがやってることが進んでほしくない」
「どうして千鶴にそんなことがわかるんだ」
「わたしに送って来ないから」

「あなたわたしに転送するけど〜転送しないで１人で悩むと思ってる」
「わたしは平気だから何でも言って」
「よろいないから」
これは、いままでの、トモノリや千鶴の高校２年の時のアルバイト先の店長が送ってきた写真とは異なっている。
現に、網ノ目三郎は、取り乱している。

〇喫水勘定
「まだ計画書がこないけど」
10月12日の朝、峠下冴子が、網ノ目三郎の机にやってきて言った。
「今日の夕方送ります」
「元気がないの？」
「平気です」
１億２千万のジャンプの支払い計画を湯本化学に出さないといけない。今後の、湯本化学への支払いの現金化の計画書も書かないといけない。
気が重い。
それもあるが、千鶴とサングラスの男の写真が気になって困る。
「喫水に喫水勘定をつくったから」
峠下冴子からメールがきた。
一時的に１億２千万をプールする勘定がないといけない。峠下冴子だけが知っている預金口座だろう。明日の朝は、神部五郎や山上一郎から電話がある。
「喫水勘定とはなんだ」
なんだかんだと言われながら、喫水は威力を発揮するのではないかと思われる。誰も褒めてはくれないが、１人でビールでも飲みたい気分だ。喫水勘定という勘定科目は、網ノ目三郎への褒め言葉のようだった。
夜になったが、峠下冴子に、湯本化学への１億２千万円のジャンプ分の返済計画と、支払いの現金化計画を書いて、送った。どう計算しても、湯本化学への支払を現金化することは難しい。売上が増えない限り、難しい。それか、規模を縮小するかである。

湯本化学への支払いの現金化は、３年かかって、徐々にサイトを短くして、３年後に、現金化すると書いた。峠下冴子がどう考えるかわからない。神部五郎が、これではダメだと言うかもしれない。
いずれにしても、売上が見込めない以上、どう考えても難しい。喫水の考えだけでは、難しい。
ビールがおいしかった。明日、峠下冴子が何を言うのか、神部五郎がどう言うのか、気にはなるが、とにかく、親会社の湯本化学への支払い計画を書いたことで、ホッとしていた。
また写真が送られてきた。
千鶴が、黒メガネのオトコと寄り添って歩いている。
千鶴に転送した。
すぐに電話がきた。
「おつかれさま〜」
「ここどこだと思う？」
「渋谷の駅前の交差点」
「わたしそんなとこ行かない」
よく見ると、確かにそうだ。バックのビルも見覚えがある。
「嫉妬してるね」
「そうだ」
「２分も経ってないもんね〜転送したの」
「なんであなたがわたしを愛してるって知ってるんだろう」
「愛は人が動く押しボタンだからさ〜あなたこんな写真見せられたら何も手がつかなくなるよ」
「あなたはどうなんですか？」
「わたしはよろいなから関係ないわよ」
「あなたがわたしのゼッタイ的な味方だっていうのを疑ったりしない」
「こんな写真が行くかもしれない」
「平気」
網ノ目三郎は27歳である。千鶴は19歳だ。どっちが生きた経験がながいのか、わからない。
「あなたさ〜前に〜リストラのためのコンピューター計画提案したことある

じゃない」

「神部さんいなかったらあなたもうそこでいなくなってる」

「恥ずかしい」

「あなた人間できてないからさ〜」

高校２年の時に、アルバイト先の店長に世話になったからといって抱かれていた千鶴に言われたくないと思った。

「いま〜人間できてないわたしに言われたくないと思ってるでしょ？」

「高校卒業してからのわたしは人間できてるからね」

「よろいないから」

「どうなってもいいからよろしくお願いしますとか言わない」

喫水だけでは会社はダメだ

〇新製品の販売計画を出せ

10月13日だった。網ノ目三郎は、梅岡玄蕃に、美鈴千賀子のことをメールで知らせた。梅岡玄蕃は、美鈴が、月曜と火曜が経営企画室勤務なので、静岡にやって来るのを、月曜と火曜のどちらかにしていた。
明日、10月14日の金曜日に、静岡の魚のおいしい所で、２人でごはんを食べないかというメールが返ってきた。大阪からの帰りに静岡で降りるらしい。
多分、何か話しがあるのだろう。
お昼過ぎに、神部五郎から電話があった。
「峠下冴子から計画書が送られてきたが承知しているのか」
「商品開発をやっているらしいがまだ新製品は出ないのか」
予想したとおりの電話だった。
電話をしている時に、メールがきた。神部五郎と話しながら、気になって、メールを見た。
３回目の写真が来た。
ここの工場の玄関前で、千鶴と黒メガネのオトコが、親しそうに話している。なんだこれは。慌てて千鶴に転送した。
神部五郎が何か言っていたが、よく覚えていない。
たいしたことは言っていなかったように思った。
夜になって、千鶴から電話がきた。
「この人まずいんじゃないかな〜毎日毎日電話するチャンス与えてるようなもん」
「30秒後に転送してるけどなに？」
「アタマにきてるの？」
神部五郎と電話中だったのだ。神部五郎は、網ノ目三郎の出向元の湯本化学の経営管理室長だ。
「神部さんがなんか言わなかった？」

「たいした話じゃなかった」
「あなた〜電話中に転送したの？」
「いま電話してみて」
「なにを？」
「何か指示されなかったか聞いて」
「あなたに失敗させたいんだから」
「すぐ電話してよ？」
千鶴は、さっさと電話を切ってしまった。
もう21時である。躊躇した。
それでも、電話をしてみた。
「お昼の電話中にハチが飛んできてよく聞こえなかったものですから」
「新製品の販売計画を出せと言った」
何度もあるのだが、千鶴は、何でもわかっているような気がした。
もし神部五郎に電話しなかったら、１週間後くらいに、怒りの電話をもらうところだった。電話はよくないと思った。

〇梅岡玄蕃の言いたいこと

静岡駅で梅岡玄蕃を待った。網ノ目三郎は静岡の人間ではない。詳しくはないが、魚の街には違いない。駅から遠くない所を確保してある。料亭ではないが、仕切った部屋になっている。
魚がコースで出てくる。
「何か、お話しがあるのでしょうか」
「網ノ目三郎さんは、湯本化学との関係で苦労されていると思いまして」
「１億２千万円のジャンプをしてもらっていることなどもです」
どうして梅岡玄蕃が、１億２千万円のジャンプの話しを知っているのか、不思議だったが、突っ込まなかった。
「いまのままでは、チェリー株式会社を復活させることは難しいと思います」
「喫水のシステムがよくできているとは思いますが、喫水は喫水です」
「喫水は、安定のシステムだと思います」

「網ノ目三郎さんは、凄いノウハウを持っていると、感心しています」
梅岡玄蕃に褒められてはいるが、網ノ目三郎が喫水を思いついたのは、ほんの少し前である。網ノ目三郎は電気技師だ。会社の経営のシステムなど、何もわからなかった。
夜に、経営経済と会計を学びに行かなかったら、何も、気がつかなかったと思う。それでも、たいしたものではない。
「これからはチェリー株式会社を成長させることを考えないといけません」
「私には会社を成長させる方法などわかりません」
網ノ目三郎は、わからないことは、はっきり言っておいた方がよいと思った。
「現在の経済は市場経済社会で成り立っています」
「会社は市場経済社会の１つの細胞です」
「市場経済社会は商品の価値で動いています」
「メーカーであろうが問屋であろうが小売りであろうが、商品の価値が高くないと、市場経済社会ではやっていけません」
「市場経済社会の主役は生活者です」
「商品の価値が高いものを商品といい、商品の価値の低いものを物資と言います」
「会社は、商品を追わないといけないのです」
「商品の価値です」
「商品とは、新しい生活のシナリオライターです」
「輪島クレンジングと輪島セッケンをやっていますが、これが、生活者にとっての新しい生活でなければ、商品にならないのです」
「私は、物資はつくりたくない」
網ノ目三郎は、目からウロコ状態だった。はっきり言って、チェリー株式会社に派遣されてはいるが、これからどうしていいのか、よくわからなかった。梅岡玄蕃が頼りである。梅岡玄蕃を紹介してくれた先里万丈が頼りである。先里万丈は、千鶴がブッダのように慕っている人だ。
「梅岡玄蕃さんから話し聞いたんでしょ？」
タクシーの中に、いきなり千鶴から電話がきた。梅岡玄蕃は、今東京行きに乗ったばかりだ。

「先里万丈さんの『ヒット商品』が参考になるから」
「それだけ」
「今日はおかしな写真来なかった？」
実におかしいと思った。
帰って、電子書籍から先里万丈の『ヒット商品』を検索した。ダウンロードして読みはじめて、すぐにわかった。
多分、梅岡玄蕃は先里万丈だ。
梅岡玄蕃は、先里万丈が言うことには、などと、一言も言わなかった。新しい生活のシナリオライターの話などは、自分の考えであるかのように話した。
千鶴が、どうして電話してきたのかも、わかる気がした。千鶴は、先里万丈と、頻繁に交信している。電話なのかメールなのかわからない。
網ノ目三郎は、必死になって、先里万丈『ヒット商品』を読んだ。

○揚げ物屋のサングラスのオトコ

10月16日日曜日だった。土曜日に、千鶴は、やってこなかった。連絡もない。今日の揚げ物屋のアルバイトは中止なのだろうか。
じっとしていればいいものを、朝から気になっている。早くお昼にならないかと思ってしまう。
何も手につかない。
神部五郎に指示された、新製品の販売計画をつくらないといけない。朝から考えないといけないのだが、エクセルを開いたままだ。
11時30分になった。少し早いが、着替えて、財布を持った。千鶴は、揚げ物屋に来ているのだろうか。
千鶴がアルバイトをしている揚げ物屋は、網ノ目三郎のアパートから、歩いて５分くらいだ。ドキドキしてしまう。電話をすればいいではないかと、もう１人の網ノ目三郎が言うのだが、どういうわけだか、何もしない。
「こんにちわ〜」
網ノ目三郎は、写真を見ているのではないかと思った。千鶴とサングラスのオトコが親しそうに話していた。

見てはいけないものを見た気がした。
「来ると思ってた」
「日替わり揚げ物でいいよね」
黙っている網ノ目三郎に話しかけて、そのまま厨房へ行った。
網ノ目三郎は完全に混乱していた。
サングラスのオトコは、黙って出て行った。
３回送られてきた写真のサングラスのオトコではないかと思う。こんなオトコ知らないと言っていた。ウソだったのか。しかも、網ノ目三郎がやってくるかもしれない揚げ物屋で、この時間である。
この揚げ物屋は、流行っている。千鶴目当てのオトコも、多分多い。アッという間に満席になった。
「日替わり揚げ物がお勧めです」
千鶴が、大きな声を出している。
何度もドアの方を見るが、サングラスのオトコは、入って来なかった。これは何だろう。
千鶴が、今日の新聞を持ってきた。
「ありがとう」
意外に落ち着いた声が出ている自分に、網ノ目三郎は驚いた。
新聞に何が書いてあるのか、アタマに入って来ない。ただ眺めているだけだ。
14時30分になって千鶴から電話が来た。
「日曜日すごいお客さんだよ」
「おいしかった？」
「わたしいま食べてる」
「サングラスのオトコが道を尋ねて入ってきたの」
「そこにあなたが来た」
「多分混乱してるだろうと思って」
「わたしはあのオトコは知らない」
「昨日来るかと思ってた」
「わたし今できない」
「ああ」

千鶴から電話があったのに、混乱は収まらない。偶然にサングラスのオトコが道を尋ねに来るだろうか。よく見なかったが、送られてくる写真のサングラスの男と同じオトコだ。
混乱したまま、カレー味のジャガイモを食べようと思って、皮を剥きはじめた。
メールがきた。
予想したとおりだった。
サングラスのオトコと千鶴が、揚げ物屋で親しそうに話している。確かに、網ノ目三郎も、このシチュエイショインで、写真のように見た。しかし、これは、網ノ目三郎でないと、写真を撮れない。
途中まで皮を剥いたのだが、ジャガイモにゴメンを言って、ごみ袋に入れた。カップラーメン用のお湯を沸かした。
網ノ目三郎は、この写真は、千鶴に転送するのを止めた。

〇５回目の写真が来た

10月17日だった。今日から美鈴千賀子が正式に、経営企画室に配属になった。美鈴は、朝から、忙しそうに研究室に何度も行っている。網ノ目三郎は、美鈴が何をしているのか、よくわからない。
神部五郎に指示された新製品の販売計画をつくらないといけない。何もやっていない。
朝から、交通費の精算をして、交際費の精算をした。それだけだ。
メールがきた。
５回目の写真だった。
千鶴とサングラスのオトコが、網ノ目三郎もいつも行くスーパーマーケットで、仲良く買物をしている。
網ノ目三郎は、もう完全にパニックになった。
アタマにきて、昨日の揚げ物屋の写真と今のスーパーマーケットの写真を、無言で、千鶴に転送した。そのまま、網ノ目三郎は、外に出た。
美鈴には、「サンプルを見てきます」と言った。
お昼は頼んであったのだが、食堂へは行かなかった。ハンバーガーを食べ

た。１時近くになって千鶴からメールがきた。
「怒ってもダメだよ？」
「敵にはまっちゃうだけだよ？」
「わたしはこんな写真知らないんだから」
「新製品の販売計画出せって言われてるの？」
「あなたがやることじゃないでしょ？」
「前川芳則さんの仕事でしょ？」
「『売上を目指すと滅びる』を読んで」
また混乱した。どうして千鶴が、神部五郎の新製品の販売計画を出せという指示を知っているのだろう。千鶴に、神部五郎に電話しろと言われて、電話して、千鶴にまた電話したのだろうか。完全に、パニックになった。
千鶴はなんなんだ。
もうセッケンの仕上げ工程に入って磨いているだろう。返事をしても夕方まで返って来ない。
「どこで遊んでるの？」
「早く帰って前川芳則さんのとこに行って」
千鶴に追われている。
網ノ目三郎は、仕方なく、車に向かった。
「セッケンのサンプルありました？」
「センスのいいのはないですね」
網ノ目三郎は、美鈴千賀子に聞かれて口ごもった。
「前川さんのところに行ってきます」
「なんですか？」
「神部五郎さんに新製品の販売計画を出すように言われているんです」
「じゃ〜前川さんに来ていただいていいですか？」
これがフツウだと思った。網ノ目三郎は、新製品開発のことはよくわからない。わからないのに、１人で新製品販売計画をつくろうとしていた。なにかがおかしい。千鶴に言われなかったら、おかしなことをしていた。勝手に網ノ目三郎が数字をつくっても、前川芳則や美鈴千賀子や南良子は、よく思わないだろう。
結局、前川芳則に任せることにした。

「販売計画よりスケジュールが大事です」
確かにそうだ。スケジュールが固まっていない。10月24日の月曜日に、梅岡玄蕃も含めて、打ち合わせをすることにした。輪島クレンジングと輪島セッケンの新製品開発の打ち合わせだ。

○『売上を目指すと滅びる』
その夜。網ノ目三郎は、先里万丈『売上を目指すと滅びる』を読んだ。
おかしなことが書いてある。目標とか目的ということばは、結果が良くない症候群に陥っている場合に、少しでも、結果を良くしようとして、無意識に使うものだそうだ。
網ノ目三郎は、これまで、ずっと、目的が定かでないことには動かないように、教わってきた。教わったというより、みんなそうした。湯本化学でも、起案書の最初には、目的を書く欄があるし、どんな計画書をつくっても、目的を最初に記さないといけない。
今回の、輪島クレンジングと輪島セッケンでも、目的を書かないといけない。
いけないとは何だろうか。不思議は不思議である。為政者が向かっていること以外のことは、拒否しやすいように、目的を書かせているのだと言っている。先里万丈だ。
目標とはなんだろうか。
達成率９８・３％は確保したいから目標ということばがある。販売目標１０３％達成は確保したいから、目標ということばがある。目標とは、そういうものだと書いてある。
結果が良くない症候群だからだ。
チェリー株式会社の事業計画がある。今年の事業計画だ。網ノ目三郎が４月に、チェリー株式会社に派遣される時は、すでに、今年度の事業計画が出来上がっていた。販売目標は、前年対比で９７・２％である。販売目標などは、千円単位まで書いてある。
網ノ目三郎は、経営企画室長である。この事業計画を守らないといけない。来年の５月には、株主総会があって、結果責任が問われる。

網ノ目三郎は、チェリー株式会社の取締役ではないが、経営企画室長だ。ダメだったら交替させせられる。
フツウは、どこの会社も、こうなっている。販売目標がない会社などない。
夜だったが、梅岡玄蕃にメールをした。
「結果が良くない罠にはまっていることを言っています」
「輪島クレンジングと輪島セッケンをどうしたいかで、わかります」
これだけでは、さっぱりわからない。
確かに、チェリー株式会社は、結果が良くない。ずっと良くない。結果が良くないと、少しでも結果を良くしようとする、姑息な考えに支配されるということを言っているのだろうか。
目的とか目標とかのことばは、姑息なことばなのだろうか。網ノ目三郎は、そうは思わないが、先里万丈は、そう言っている。
しかし、現実問題として、輪島クレンジングや輪島セッケンの新製品販売計画書に、目的が書いてなかったら、山上郁夫や山上一郎などは、バカにするだろう。バカにするというか、そこでモメる。

○６回目の写真が送られてきた

目覚ましのようにケータイが鳴っていた。
メールだ。
まだ６時だった。
６回目の千鶴の写真だった。
千鶴とサングラスのオトコが静岡のホテルの前で話している。
多分、だんだん、過激になるような気がしてきた。これは、罪になるのだろうか。毎日毎日これでは、気が滅入る。千鶴に転送した。
千鶴は、もう起きていると思った。千鶴は、必ず病院に寄る。お母さんの顔を見て、チェリー株式会社へ向かう。
朝が早いのだ。夜も早く寝る。土曜日などは、網ノ目三郎がテレビを見ていると、催促される。寝る時間が遅くなるのがイヤなのだ。
千鶴から短いメールが返ってきた。
「ベッドシーンとかありそう」

「わたしは知らないから」
「修業が足りないとこんなの防げない」
「もっとよろい脱がないとダメ」
写真を送ってくるオトコかオンナか知らないが、網ノ目三郎のことはよくわかっているが、千鶴を知らないようだ。
網ノ目三郎は、写真が送られてくる度に、ドギマギして混乱して、何をするかわからない状態になるのだが、千鶴は、常に客観的である。写真を送っているオトコかオンナが、何をしたがっているか、キチンと読んでいる。
網ノ目三郎は、千鶴からの指示で動いているようなものだ。網ノ目三郎は、千鶴を信じられなくなったら、ストーカーになるだろうと思った。ストーカーというか、千鶴を監視する。
網ノ目三郎は、もう、ここまできたら、真剣に考えないといけないと思った。これは、イタズラではない。しかも、網ノ目三郎の千鶴への想いを知っているオトコかオンナだ。網ノ目三郎が混乱するのを知っている。
この犯人は何をしようとしているのか。誰なのか。
10月18日だった。
お昼に食堂へ行った。千鶴も仲間と一緒に食べていた。少し遠い。最近は、網ノ目三郎のところへは、近づかなくなった。前は、隣でお昼を食べたこともあった。
網ノ目三郎は、チラッとは見ているのだが、千鶴は、仲間と話し込んでいる。網ノ目三郎を見ない。
夜、千鶴からながいＰＣメールがきた。
「しばらく網ノ目三郎のアパートには行かない」
「これは、本気だから気をつけないと危ない」
「あなたのやっていることを潰そうとしているけど、あなたを潰さないと、それは潰れない」
「だから、あなたを襲っている」
「あなたが、もっとわたしに狂ってほしいんだと思う」
「あなたは狂いそうだけど、わたしは平気」
「でも、狂ったフリでもしないと、もっと過激になるかもしれない」
「なんか考えて」

○頭が痛いと会社を休んだ

美鈴に電話をした。10月19日だ。

「頭が痛いので今日はアパートにいます」

「何かあったら電話をください」

「電話しても大丈夫ですか？」

「平気です」

網ノ目三郎は何もない。頭も痛いわけではない。千鶴に言われたことが気になっている。

「このままだともっと過激になる。少しは写真が効いたところを見せないといけない」

網ノ目三郎は、商品論の本をたくさん買ってあった。勉強しようと思った。経営企画室長なのに、梅岡玄蕃と前川芳則と美鈴千賀子の打ち合わせに入れないのは、良くない。どうして話しに入れないのか、よくわからない。なにかが固定観念になっているらしいのだが、自分でよくわからない。

お昼に千鶴からメールがきた。

「カゼなの？効いたフリなの？」

「いきなりだとわからない」

それはそうだ。

「効いたフリなんだけど誰にしてるのか自分でもわからない」

網ノ目三郎は、買い物にも出ないで、必死になって本を読んだ。マーケティングの本だ。商品開発の本も読まないといけない。

18時になって、お好み焼きをやろうと思った。お腹が空いたのだ。

「今日は７回目の写真はあったの？」

千鶴からだ。

網ノ目三郎は、意識しなかった。必死で本を読んでいる。

「今日は写真はありません」

それっきりだった。

網ノ目三郎は、お好み焼きをつくりはじめた。

夜になって、千鶴から電話があった。

「なにしてたの？」

「商品のことやマーケティングの本を読んでいた」
「梅岡玄蕃と前川芳則と美鈴千賀子の話しに入れないのが不思議だから」
「あなた電気の技師なんでしょ？」
「そうだけどゼンゼン違う感じがしている」
「梅岡玄蕃さんがやってることはさ〜キャンバスに何も描かれてないことしかやんないからだよ」
「あなたのやってることはさ〜電気にしても会計にしても〜すでに描かれてるから」
「商品だって描かれてるけど」
「いままでにないもん創んないといけないからさ〜商品は」
「あなたみたいによろいあったら難しいわよ」
「少しはよろい脱いできてるけど」
「前川芳則さんだって〜あの人のマーケティングはあなたの電気技師と同じだから〜ホントはまずいよ」
網ノ目三郎は、ホントに頭が痛くなってきた。千鶴は19歳である。高校を出たばかりである。
多分、千鶴が言いたいことを、網ノ目三郎は、理解できていないのだと思った。商品開発は、創造することだと言ってるのだろうか。そしたら、電気技師とか会計とも、根本的に異なる。会計は、創造するようなことではない。

〇販売計画の打ち合わせ

10月24日になった。梅岡玄蕃は、10時にやってきた。静岡駅からタクシーで行くから来なくてよいとのことだった。
不思議なことに、１月19日に網ノ目三郎が会社を休んで以来、千鶴とサングラスのオトコの写真は送られて来なくなった。網ノ目三郎は、静かにしている。会社にいても、いるのかいないのか、わからない態度をしている。
10時になって、早速、輪島クレンジングと輪島セッケンの販売計画の打ち合わせがはじまった。
叩き台として、私が案をつくりました。
前川芳則が、ＰＣスライドを開いた。

輪島クレンジングと輪島セッケン開発の目的からはじまっている。
チェリー株式会社の、若い女性向け化粧品を切り拓くために、輪島クレンジングと輪島セッケンを発売すると書いてある。
次に目標が書かれてあった。
２０１１年11月15日に発表して、２０１２年２月１日に出荷するとあった。初回２万個づつと書いてあった。１年間の販売目標は４万個づつである。
「この数字では、シェアーを云々するような数字ではないので、計算もしておりません」
「もしこの数字で良ければ、月別の販売数量を記してあります」
「販売先は、静岡のスーパーマーケットとチェリー株式会社の通信販売です」
「販売促進費は、大きなお金を用意する計画にしていません」
「スケジュールですが、現在耐久テストに入っていますので、11月15日の発表には、間に合います」
「パッチテストを来週から行います」
「いままでの経験から、アウトになるとは思っておりませんが、やっておかないといけません」
「生産は、２０１１年の11月１日から入ります。輪島セッケンは、少し寝かせないといけませんので」
「表向きはこれでいいと思いますが、網ノ目三郎さんはどうですか？」
梅岡玄蕃が、おかしなことを言った。表向きとはどういう意味だろうか。
網ノ目三郎は、この案は、よくできていると思った。
美鈴千賀子から、パッチテストの計画案が説明された。品質管理項目も美鈴が説明した。確かに、若い女性の肌に使うものだ。しっかりやらないといけない。
千鶴が、あなたが考えることじゃないでしょ？前川芳則さんの仕事でしょ？と言ったことで、ここまで進んだ。もし千鶴が言ってくれなければ、網ノ目三郎は、どうしたらよいかわからずに、まだ、悶々としているだろう。
「15分休憩しましょう」
11時になって、梅岡玄蕃言った。

梅岡玄蕃と網ノ目三郎の２人になった時、梅岡玄蕃が、おかしなことを言った。
「網ノ目三郎さんは、チェリー株式会社の改革を目指していると思うが、これで、この輪島ンクレンジングと輪島セッケンは、改革の武器になりますか？」

〇改革の武器になるのか
「商品が、なかなかヒット商品にならないのは、開発している商品に付託している事柄によります」
梅岡玄蕃は、大事な話しを、網ノ目三郎にするという態度だった。前川芳則と美鈴千賀子がいない時にである。
「網ノ目三郎さんは、自分で気がついていないけど、チェリー株式会社の改革の武器に使えればグッドだと思っています」
「輪島クレンジングと輪島セッケンです」
「よく考えてください」
「前川さんと美鈴さんは、輪島クレンジングと輪島セッケンが、成功することを願っています」
「成功するという意味は、販売目標のとおりに販売されるということです」
「網ノ目三郎さんと前川芳則さんと美鈴千賀子さんでは、やっていることは同じですが、輪島クレンジングと輪島セッケンに付託していることが違います」
「網ノ目三郎さんは、この輪島クレンジングと輪島セッケンの販売計画で、経営改革の武器にふさわしいと思うのですか？」
「今の自分にはわかりません」
「もし経営改革の武器ならないようであれば、どうすれば武器になるのか考えないといけません」
「輪島クレンジングと輪島セッケンは、経営改革の武器にしなくてよいと思うのでしたら、それはそれでいいのでしょう」
「網ノ目三郎さんが、自分で決めないといけません」
「前川さんと美鈴さんに、経営改革を要求することは、難しいです」

「商品というのは、みんなこうするものですか？」
「付託しているものが大きいと、自然と、商品は、大きくなるものです」
「単なる、売上が稼げればいいのでしたら、その商品への付託は小さいから、それなりに終わることでしょう」
たった15分の休憩中の話だった。ものすごく大事な話しを、梅岡玄蕃は、網ノ目三郎にしたと思った。
網ノ目三郎が、前川芳則と美鈴千賀子の話しの中に入れない理由も、こんなところにあったのかもしれないと思った。
輪島クレンジングと輪島セッケンに、付託しているものが異なっている。確かにそうだ。
「喫水のシステムを少し修正したいのですが、時間がありませんか」
「緊急です」
三枝伸治が、いかにも緊急だという顔で、網ノ目三郎に話した。
「すみません、もし良ければ、前川芳則さんと美鈴さんで来週の月曜日に、経営会議で説明していただけますか？」
「会議を途中で打ち切るようでワルイのですが」
誰も、納得していた。
三枝伸治との喫水のシステム修正の打ち合わせは、30分で終わった。喫水のシステムは、網ノ目三郎の手の中にある。どこをどう変えるのか、そのことが、なにを及ぼすのか、網ノ目三郎には、すぐわかる。峠下冴子から、自動仕訳を、一部外してくれとの要求だった。網ノ目三郎は、それを断った。峠下冴子の要求の意味がよくわからなかった。峠下冴子は権力者である。毎日、三枝伸治に言っているらしい。
「断るの？わかった」
峠下冴子の返事は簡単だった。
網ノ目三郎は、お昼を静岡の駅で、梅岡玄蕃と食べようとしていた。改革の武器としての商品のことが気になっていた。
「14時の新幹線に乗ります」
梅岡玄蕃は、快く受けてくれた。
峠下冴子の、要求が気になっていたが、急いでいた。

〇商品開発の本質

「経営の改革の武器としての新製品など聞いたことがありませんけど」

おすしを食べながら、網ノ目三郎は、梅岡玄蕃に聞いてみた。

「網ノ目三郎さんの喫水を見ていると、これは、完全な経営改革です」

「チェリー株式会社のみなさんは、よくわかっていないのですが、知らない間に、喫水の考えに、はまってしまいます」

「まだ、時間が経過していませんが、いずれ、みんな、喫水の考えのようになります」

「リアルに仕事をするという考えです」

「これは素晴らしいことです」

「改革というのは、こういうことを言います」

網ノ目三郎は、梅岡玄蕃が、喫水について、ここまで理解してくれているとは知らなかった。

「喫水は、経営状態をリアルに把握するということも含めて、大きな改革ですが、改革は、それだけではありません」

「その会社の状況によって、改革の目指すものが異なっています」

「チェリー株式会社の場合は、もちろん、喫水の考えが足りないという改革が必要ですが、そもそもは、会社が沈滞していることに、改革の焦点があります」

「それは、網ノ目三郎さんが、よく承知していることです」

「どうしたら、沈滞している会社を活気ある会社にすることができるのか」

「新製品開発というのは、それ以外に何か目指すことがあるのでしょうか」

網ノ目三郎は、フツウではない話しを聞いているのだと思った。新製品開発は、売上を多くしたいからやっているものだ。

「ここはすごい大きなポイントです」

「網ノ目三郎さんが、ホントの商品開発者に向かうかどうかの分かれ目です」

「商品開発が売上を多くするためのものであったならば、結果は惨敗します」

「例外はありません」

「よく調べてください」
網ノ目三郎は、商品開発の本をたくさん読んでいる。マーケティングの本もたくさん読んでいる。最近だ。梅岡玄蕃が言っているようなことは、どこにも書いていない。
「40年くらい前、日本の会社の商品開発者は、経営者でした」
「みなさん、すごいヒット商品を開発したのです」
「日本は、経済成長しました」
「大きな会社がたくさんできました」
「誰も、商品開発が、経営の改革の武器であるという本質を知らないままです」
「今は、日本のどの会社も、日本自体も、沈滞しています」
「経営者が商品開発者ではないからです」
「経営の改革の武器としての商品開発をやってないからです」
10月19日以来、ずっと読んでいる商品開発の本やマーケティングの本は、本質を外れているような気がしてきた。売れる商品をつくれる本だ。一言で、そうだ。多分、売れない。
本来、会社をどうしたいということと商品開発は一貫しているものだ。それは確かだ。経営者が商品開発者でなかったら、ただ儲けのための会社になり下がってしまう。
「日本の会社は、経営管理者が社長をやってる気がしますが」
「網ノ目三郎さんも、経営管理者です」
「商品開発ができません」
「いまのままでは、儲けが多いことをやっていくしか、方法がなくなります」
「日本という国そのものも同じです」
「たとえば、お米の達人が日本の国のリーダーだったら、日本の食糧がすごく立派で大事になるのでしょう」
「日本の国家のコンセプトそのものが、食糧の国家になります」
「例えばです」
「日本全体に、管理者や運転者の社会になっているのです」
「コンセプトが不明確の社会でもいいです」

「けっこう、研究施設なんかに投資はしているように思いますけど」
網ノ目三郎は、時々、あまりよくわからないが、基礎研究をやっている研究所の報告会を聞きに行くことがある。
「会社をどうするかということが商品開発の本質ですから」
「どういう日本にしたいのかということが、研究や商品開発の本質です」
「単なる研究者や商品開発者やマーケターが、どんなに多くの予算を注ぎこんでやったとしても、行き着かないでしょう」
「試行錯誤を繰り返すだけです」
「山上郁夫さんは、経営者であって商品開発者でした」
「山上一郎さんは、経営管理者です」
「もう、チェリー株式会社は難しいのです」
「会社というのは、市場経済社会の細胞の１つです」
「会社は、商品価値を扱っています」
「メーカーでも問屋でも小売でも同じです」
「経営管理者では会社はやっていけません」
「チェリー株式会社は、商品開発を武器に使える経営者を必要としているのです」
「網ノ目三郎さんは、チェリー株式会社の役員ではありませんが、責任という意味では、同じです」
「どう見ても、網ノ目三郎さんが、その役をやるしかないのです」
「その役とは、経営改革の武器として商品開発を使える経営者のことです」

○７回目の写真が送られてきた

網ノ目三郎は、梅岡玄蕃と、そんなに多くの時間、一緒にいるわけではない。しかし、すごい影響を受けそうだと思った。
経営改革の武器としての商品開発が使えるようなれば、凄いことだ。網ノ目三郎は、喫水を経営改革の武器として使える。
メールだった。
網ノ目三郎は、静岡駅からチェリー株式会社に帰る車だった。運転をしていた。

危うく、ブレーキとアクセルを間違えそうだった。
千鶴が、サングラスの男と、ホテルの部屋に入るとこだった。８回目の写真がどういうものなのか、察しがつく。千鶴が言うように、写真が、過激に向かっている。
10月19日に会社を休んで以来、写真は、送られてこなかった。網ノ目三郎は、痛めつけられた。傷心している。どうして、急に、７回目の、過激に向かう写真が送られてきたのだろうか。
千鶴に転送した。
しばらく路肩で休憩しないと、事故になる。
こんな写真、どうやって編集するのだろうか。
「今日お母さんの調子がワルクて遅くなった」
「ごはん食べたの？」
「もらった冷凍した揚げ物を朝のごはんの残りでチンしてどんぶりにしてる」
「梅岡さんにいろいろ教わったの？」
「あなたの喫水すごいけど梅岡さんの商品開発凄いから教わるといいよね」
千鶴は、網ノ目三郎の返事も聞かずに、どんどんしゃべっている。梅岡玄蕃か先里万丈とつながっていることは、確かだ。
「この写真何回目？」
「７回目だけど」
「いよいよ８回目はベッドシーンね」
「わたしのハダカの写真なんかないもんな〜」
「あるのかな〜」
「多分、今日、バレちゃったんだよね」
「どういうことですか？」
「どんぶり食べながらでいい？」
「どうぞ」
「演技だってバレちゃった」
「せっかくお休みしたのに」
「犯人がわからないからどうにもならない」
「自信なさそうにしてればいいじゃない」

「そこまで気がつかなかった」
「梅岡さんと前川さんと美鈴さんにガンバってもらってさ〜あなた自信なさそうにしてた方がいいよ」

○ 8 回目の過激な写真
10月25日だった。早朝に送られた写真を、起きてすぐに転送した。千鶴は、病院かもしれない。
「あなただからまだいいけど、こんな写真彼に送られたら、わたしもうダメだよね」
「顔はわたしだけど、わたしこんなにおっぱい小さくないから」
「わかるでしょ？」
確かにそうだった。網ノ目三郎は気がつかなかった。動転している。すごい嫉妬心がある。
「大丈夫？なんか話したら？」
「疑ってるの？」
「ムリもないよな〜よくできてる」
「サングラスしてセックスするかな〜」
「おかしいな〜この写真」
網ノ目三郎は、演技ではなく、ホントに傷心した。会社に行きたくなくなった。今日は、パッチテストがある。パッチテストが終わったら、サンプルでも買いに行こうと思う。
「今日のお昼はどうしますか？」
有吉里子が声をかけてくれた。
「出かけますので〜ありがとう」
有吉里子は、網ノ目三郎が、以前に、40人のリストラのためのコンピューター化計画を出して以来、話しをしたことがない。お昼の食堂での食事券を頼んでいるのだが、黙って券を受け取るだけだ。総務人事で、網ノ目三郎が最初に会った人は、有吉里子だった。
どういうわけだか、話しかけてきた。
「元気ないけど」

有吉の目にも傷心したように見えるのだろうか。ホントに、網ノ目三郎は、傷心しているのだ。
15時頃だった。網ノ目三郎は、繁華街にいた。カフェでコーヒーを飲んでいた。サンプルは見たいのだが、女性の売場に行く勇気がない。
サングラスのオトコが後から出口に向かった。２階にいたのだろうか。外で女性が待っていた。網ノ目三郎は、驚いてしまった。千鶴である。確かに千鶴だった。
網ノ目三郎は、慌てて、電話をした。
この時間である。千鶴は、セッケンの最終工程で、セッケンを磨いているはずである。こんなところにいるはずがない。
電話には、出るわけがない。
すると、ドアの外の女性は、千鶴ではないのか。
ドアの外の女性が、ケータイ取り出して、何かした。切ったのだ。
網ノ目三郎は、もう、正常ではなかった。抑えられなかった。サングラスのオトコを追った。
「お勘定をお願いします」
何か言われていたのだが、サングラスのオトコを追った。千鶴を追った。
おかしなことになってしまった。
おまわりさんが来た。
「身分証明書はあるのですか？」
「会社に確かめます」
最悪である。運転免許書だけでは納得してもらえずに、チェリー株式会社の社員証を奪われた。おまわりさんである。網ノ目三郎が悪かった。お金を払わずに走って逃げたのだ。２８０円だ。走って逃げたわけではない。サングラスのオトコを追ったのだ。千鶴を追ったのだ。
「確認できました」
「どうしたのですか？」
網ノ目三郎は、何もことばがなかった。
「すみません」
そう言うしか、ことばがなかった。
「わたしなみだ出てるから」

「明日会社に来ても誰も話しかけない」
「２８０円の無銭飲食だから」
一言もなかった。
「どうしたの？」
「外にサングラスの男と千鶴がいた」
「わたしセッケンの仕上げやってんじゃない」
「どうしてわたしのこと信用できないの？」
「わたし悔しい」
「こんなの無視すればいいんだよ」

〇無銭飲食のクセあるのか

横辰八郎が応接室で待っていた。
「無銭飲食のクセがあるのですか？」
「はじめてです」
「病気ですか？」
「元気です」
横辰八郎は、全く理解できないと思う。
網ノ目三郎は、サングラスのオトコと千鶴を追ったのだ。無銭飲食など関係ない。しかし、サングラスのオトコと千鶴を追ったなどとは、話せない。おかしな写真が８回も送られてきたとは、話せない。
「網ノ目三郎さんは湯本化学にとっても、チェリー株式会社にとっても、重要人物です」
「少しの判断ミスが許されないポジションにいます」
「どうすればいいのですか」
横辰八郎を困らせることになってしまった。
湯本化学に返って、適切な人事をお願いしますがフツウだろう。
多分、８回も千鶴の写真を送ってきている犯人の、シナリオのとおりに、物事が動いてしまったのだ。
湯本化学に返って、適切な人事をお願いしますで、終わりである。すべてが終わる。それで、写真も送られなくなる。

「しばらく静かにしておいてください」
横辰八郎は、おかしなことを言った。
有吉里子は、また、網ノ目三郎を無視するかのように、食券を受け取った。
美鈴千賀子は、パッチテストで忙しい。月曜にはテスト結果を報告したいと言った。経時テストの中間報告もしたいらしい。忙しくしている。多分、美鈴千賀子は、昨日の無銭飲食事件を知らない。
「無銭飲食のクセあったんだ」
峠下冴子がお昼前にやってきて言った。
「自分で湯本化学に帰らないとみんなに迷惑になるかもね」
神部五郎にまで届いているのだろうか。自分で言った方がいいんだろうか。
峠下冴子は、神部五郎にメールしそうである。
網ノ目三郎は、神部五郎にメールした。
「昨日、静岡市内で、15時頃、急いでいて、カフェからお金を払わずに出て、警察に身分照会をされました」
「会社に迷惑がかかるようであれば、私の処分をお願いします」
神部五郎から、何も返事はなかった。
このメールを、横辰八郎に転送した。
網ノ目三郎は、無銭飲食事件が、どの程度伝わっているのか、よくわからない。千鶴から電話があった時、千鶴は、知っていた。多分、無銭飲食で警察から電話がかかってきたということだろう。
峠下冴子も知っていた。
網ノ目三郎は、ホントに傷心した。
食堂に、お昼を食べに行った。少し時間をずらせて、遅く行った。千鶴からメールだった。
「ごはん食べて、健康害したら、ますます状況悪くなる」
千鶴が、自動販売機に向かって、食堂に入ってきた。網ノ目三郎の横を通った。
「わたし見て、あなたの味方だから」
網ノ目三郎は、パッと何かが割れたような気がした。なんだかよくわからない。このまま墜ち込んでいくようなことはないかもしれないと、自分のことなのに、思った。

〇先里万丈『人と集団を滅ぼすもの』

無銭飲食事件は、網ノ目三郎には、大きな痛手だった。梅岡玄蕃から、改革の武器としての商品開発への導入口のような話しを聞いたのだが、そこへ入り込めるかどうかわからない。その前に、人事異動があるかもしれない。すべては、神部五郎次第である。

10月29日土曜日だ。前川芳則と美鈴千賀子から送られた、輪島クレンジングと輪島セッケンの発売計画を読んでいた。

あんまり頭に入らない。頭に入らないのではなくて、すでに、頭は整理できている。

網ノ目三郎は、網ノ目三郎を無銭飲食にまで追い込んだ犯人を考えないといけない。犯人は、何がしたいのだろう。それすらよくわからない。

「『人と集団を滅ぼすもの』を読んで」

千鶴からのメールだった。多分、先里万丈の電子書籍だ。

「ありがとう」

網ノ目三郎は、ちょうど良かった。犯人探しをするとこだった。犯人探しをやると、グルグル回って終わらなくなる。

おかしなことが書いてある。

人を滅ぼすものは、人自身の中に巣食ってしまう、見えざる悪魔によるものだと書いてある。見えざる悪魔は、人に必ず巣食って、どんどん大きくなって、最後は、人を崩壊させると書いてある。例外はないとは、どういうことだろうか。人は、みんな滅んでしまうのか。人は、必ず死ぬから、滅ぶようなものだが。

集団も、人が集まったものだから、集団の見えざる悪魔がいるのだと書いてある。集団の見えざる悪魔は、独り歩きをして、風土と化すらしい。

風土が、集団を滅ぼすことになる。

多分、チェリー株式会社は、滅ぶ寸前にまで達しているのだろう。

人も集団も、すべて崩壊するのだが、この崩壊を救えるのは、挑戦者しかいないと書いてある。

見えざる悪魔と戦う人らしい。風土と戦う人だ。そして、挑戦者は、人の歴史上たくさんいるが、全員見えざる悪魔に殺られたと書いてある。

死んだんだろうか。
高杉晋作も坂本龍馬も挑戦者だと書いてある。高杉晋作は健康を害したのではないのか。まあ〜殺られることを覚悟していただろうから、それでいいかもしれない。
網ノ目三郎は、チェリー株式会社の見えざる悪魔と戦っているのだろうか。チェリー株式会社の風土だ。そして、悪魔に殺られかけている。もしかしたら、殺られたのかもしれない。神部五郎から、人事異動だと連絡が来たら、そうなる。もう、網ノ目三郎が、チェリー株式会社に来ることはない。
気がついたら14時30分になっていた。
「取っ手に、ちゃんぽんがかかってる」
網ノ目三郎は、慌てて外に出てみた。
千鶴はいなかった。スーパーの買い物袋がぶら下がっていた。野菜が切ってあった。チャンポン麺が生のまま入っていた。千鶴のお昼は、ちゃんぽん麺だったのだろう。２人分つくって、網ノ目三郎のアパートの取っ手にぶら下げた。
「『人と集団を滅ぼすもの』を読んで」
網ノ目三郎がどうするか、読まれてる。お昼も食べないで、『人と集団を滅ぼすもの』を読む。

○無意識の変革者
徹夜したわけではないが、ずっと、見えざる悪魔のことを考えているのだと思った。千鶴のことかもしれない。
こんな難しいことを、19歳の娘が考えるだろうか。網ノ目三郎に『人と集団を滅ぼすもの』を読めと言えるだろうか。
すごい不思議である。
網ノ目三郎は、戦う相手も知らずに、自分勝手に、何かと戦っている。期待している結果はわかっている。チェリー株式会社が、活気ある会社になることだ。立派な会社になることだ。
この『人と集団を滅ぼすもの』には、犯人が書いてある。網ノ目三郎が必死で探している犯人が書いてある。

人を見るなと書いてある。
網ノ目三郎は、ずっと、人しか見ていない。８回も、サングラスのオトコと千鶴の写真を送ってきたのは、人である。それは確かだ。しかし、それは、見せかけだと言っている。物事の本質ではないと言っている。本質は、見えざる悪魔だ。自分自身だ。
こんなわけのわからない先里万丈の話を、千鶴は、理解しているのだろうか。さっぱりわからない。
喫水はどうなったのだろう。今は、喫水は、動いている。止まらない。壊されてはいない。なぜできたのだろう。何度も何度も網ノ目三郎は、ホントに殺されかけた。襲われた。人を追ってもダメだと言われた。最後は、犯人がわかったのだが、三枝伸治を、チェリー株式会社に迎えた。ひょっとすると、網ノ目三郎は、この『人と集団を滅ぼすもの』のとおり、やったのかもしれない。喫水は、だからできた。網ノ目三郎は、チェリー株式会社の見えざる悪魔に勝った。
それはおかしい。
見えざる悪魔はゼッタイだ。勝つとか負けるとか、そういうものではない。
頭が痛くなって、網ノ目三郎は、着替えをしている。揚げ物屋さんに行こうとしている。千鶴に会いに行こうとしている。千鶴の本性を誰も知らない。多分、先里万丈と網ノ目三郎しか知らない。彼女は、凄い人だ。まだ19歳なのに。
「いらっしゃいませ」
「揚げ物どんぶりですか？」
「揚げ物です〜」
勝手に揚げ物どんぶりにされてしまった。
話したくないのだろう。
千鶴は、厨房に行ってしまった。お客さんは、次から次にやってくる。
「いらっしゃいませ」
「決まりましたらお知らせください」
「いらっしゃいませ」
千鶴からのメールだ。今奥から発信した。
「今から行くとかメールして」

「こころの準備ができない」
凄い千鶴にも弱みがある。それは網ノ目三郎だ。網ノ目三郎は凄くはないが、弱みがある。それは、千鶴だ。
８回も写真を送ってくるオトコには、これを読まれている。無銭飲食者にされてしまう。
マーボ豆腐の晩ごはんを食べてテレビを見ていた。
「９回目の写真は来たの？」
「来ないだろうね」
「ここで送ってあなたが切れたら困る」
「覚悟ができてないから切れるんだからね」
千鶴は、凄い人だと思う。網ノ目三郎が、無意識の変革者だと思っている。チェリー株式会社を活性化する。立派な会社にする。それはいいのだが、代償を覚悟しないといけない。チェリー株式会社の見えざる悪魔に、網ノ目三郎は、殺られる。殺られる覚悟だ。
短いメールの文だが、千鶴は、それがわかっている。網ノ目三郎は、わからずに悪戦苦闘している。ひょっとして、もう消されたのかもしれない。

〇山上郁夫の目的論

10月31日である。11月１日から輪島クレンジングと輪島セッケンの生産を開始することもあって、経営会議での決済を受けることにした。
湯本化学から神部五郎もやってきた。事前に説明するとメールしたのだが、必要ないとの返事だった。
２８０円の無銭飲食のことには、何も触れなかった。神部五郎が何も言わなかった。不気味である。網ノ目三郎は、恐いのだ。
思わぬところで、山上郁夫が怒り出してしまった。
「若い女性のお客さんを取り込む先兵のような話しをしているが、若い女性は、高い化粧品を買えない。だから私は、ターゲットを高くしたのだ」
「いままで目的を明らかにしなかったが、それはよくない」
「生産直前になって、こんな大事なことを言いはじめては困る」
網ノ目三郎は、こうなることを、予想もしなかった。

前川芳則も美鈴千賀子も、どうしていいのかわからない。あまりの山上郁夫の怒りに、震えていたかもしれない。
「山上さん、化粧品以外の事業をやる提案ではないし、山上さんの考えはもっともだけど、若い女性が、化粧品を買わないこともないから、一旦、トライしても、ワルクはないと思いますけど」
「このトライで、チェリー株式会社の屋台骨が崩れるようだと困りますが」
「聞いていませんが、多分、たいしたリスクではないと思います」
「もしうまくいかなかったら、網ノ目三郎には、責任をとらせます」
株を39％も持っている親会社の取締役のことばである。しかも、網ノ目三郎を差し出した。誰も異論を唱える者はいない。
「一応聞いてみましょう」
山上郁夫も、計画を聞いてくれることになった。
「チェリー株式会社の辞表を書いておけ」
神部五郎が、帰り際に言った。
２８０円無銭飲食事件では、チェリー株式会社の見えざる悪魔は、網ノ目三郎を、殺れなかった。戦いは、輪島クレンジングと輪島セッケンの開発と販売に持ち越された。
網ノ目三郎にも、やっとわかった。
やっと理解できた。
多分、千鶴は、もっと早くにヤバイと思っていたに違いない。輪島クレンジングや輪島セッケンをはじめることは、チェリー株式会社では、ヤバイことなのだ。
「網ノ目三郎さんを差し出して輪島クレンジングと輪島セッケンを通してもらったんだけど」
前川芳則と美鈴千賀子が、待っていて、網ノ目三郎に言った。
「私は、こうしてくれることが望みだったと思います」「どうぞよろしくお願いいたします」
美鈴千賀子は、慌てて、明日からはじまる生産の打ち合わせに向かった。
網ノ目三郎は、経営会議の出来事を、できるだけ細かく、ＰＣメールにして、梅岡玄蕃に送った。
２８０円無銭飲食事件があって以来、有吉里子は、一言も口をきいてくれな

いし、食堂へも、少し遅めに行っている。いつも１人で食べている。美鈴は、マイ弁当である。
千鶴が、後を通った。自動販売機に向かっている。
「メール見て」
慌てて、網ノ目三郎はメールを開いた。
「輪島クレンジングとセッケン、何度も、襲われる」
「あなたを殺るよりラクだから」
網ノ目三郎は、千鶴を、目で追いかけたが、もういなかった。
千鶴は、どうして今朝の結論を知っているのだろう。どうして、これからどうなるかを知らせられるのだろう。網ノ目三郎に注意するように言っている。

〇20歳になった

11月３日千鶴の誕生日である。どうしたものかと、昨日から迷っている。
「しばらくあなたのアパートには行かない」
迷ったまま、朝になってしまった。
「５分で着替えて来て」
「揚げ物屋の駐車場から遠く見たらわたしの車が見えるから」
「バックアップだけしてきて」
「ヒゲしてないけど」
「ながくいられない」
そのまま着替えた。髪も起きたまま。ヒゲもそのままだ。オシッコだけは行かないといけない。帽子をかぶった。どうしてバックアップだけはしろと言ったのだろうか。喫水の時に、このアパートを襲われて、カギを２重にしている。１つはオートで指紋にしてある。
バックアップをした。こんなにバックアップに時間がかかるとは思わなかった。ヒゲもできてたのに。
「わたしの誕生日だから」
「ええ」
「１日わたしにください」

「どこですか？」
「着けばわかる」
富士山の方に向かっている。
「『人と集団を滅ぼすもの』読んだ？」
「あなたがやってること自分で気がついていないから」
「あなたは、どうしてこんな難しい本が読めるのですか？」
「理解できなくてもたくさん読んでたら、そのうち繋がってくるから」
確かに、先里万丈は、多くの文を綴っている。小説も多い。
「私は、どうやら、無意識の変革者のようだけど」
「そう」
「無意識の変革者はどうなるんですか？」
「消されて終わる」
「どうして消されるんだって不満言ってるけど関係ない」
「私は不満は言わない」
「思ってる」
確かに、どうして８回もサングラスのオトコと千鶴の写真を送ってくるのかと思っている。
「不満に思っていると、はまってしまう」
「無銭飲食者にされてしまうのか」
「そう」
「私は、ただ、チェリー株式会社を活性化したいだけだし立派にしたいだけだ」
「そんなことはチェリー株式会社を壊さないとできない」
「壊されたくないから」
「見えざる悪魔は壊されたくない」
「あなたがいなくなったら、壊れないから」
「チェリー株式会社も日本株式会社も同じ状態」
「日本を活性化したいし立派な国にしたいって思って動いたら、襲われて、消される」
今日で20歳になる千鶴から、日本株式会社を活性化したいということばが出るとは思わなかった。

「千鶴は、よくわかってるのか」
「頭ではよくわかってる」
「あなたのやっていることもよく見えている」
「でもわたしは自分で実行したことはない」
「見えざる悪魔は、実行している人を襲う」
「だからわたしは安全だ」
「あなたの仲間だと見抜かれてるから、それが危ないだけだ」
「あなたが私の仲間だと見抜けるって〜すごいと思うけど」
「あなたのアパートを見張っていたらわたしが入って行った」
「もっと気をつければよかった」
案内されたのは離れの部屋だった。
「温泉入ってゆっくりしよう？」
「ありがとう」
「なにが？」
千鶴の誕生日だから、網ノ目三郎が考えつかないといけない。しかし、この宿に来ることなど、網ノ目三郎には、思いつけない。
千鶴は、そこいらにゼンブ脱いで部屋の温泉に向かった。網ノ目三郎は、ずっと思っていた。千鶴をしっかり観たかった。
「どうしたの？」
「観たいんだけど」
「どうぞ」
しばらく、難しい話しはできない。
「きて」
千鶴は、ガマンできなくなって、湯船から出て行った。
「ここから歩けるでしょ？」
「わたしこのまま病院行くから」
「お母さんと晩ごはん食べる」
「これまでで１番幸せない日だった〜ありがとう」
「早く行って」
網ノ目三郎は、歩きながら思った。
千鶴は、大胆だ。なにも起こらない状況を、よくわかっている。ほんの、束

の間なのだ。

拡大すること

〇喫水だけでは足りない

11月４日金曜日だった。昨日の甘い余韻が残ったまま、網ノ目三郎は出社した。写真は、８回目の過激な写真から、送られて来なくなった。

網ノ目三郎の無銭飲食で終わったと思ったのだろうが、少し事情が変わった。写真を送ってきている犯人は、まずいと思っているだろう。

網ノ目三郎は、今日は、歩いて出社した。歩くと、考える時間になって、都合が良い時もある。

喫水は、うまくいったように思える。

西条朋子が言っていた。

「部品の在庫がリアルにわかるのがすごい」

「発注がうまくやれる」

喫水は、うまく動きはじめているのだが、だからといって、売上が増えそうな感じはしない。

やはり、喫水だけでは足りない。今網ノ目三郎がやっている、輪島クレンジングとセッケンは、次の手としたら、グッドではないかと思った。これはなんなんだ。何をしようとしているのか。

梅岡玄蕃に聞いてみたいと思った。

「もっと歩道の奥歩いて」

「車に襲われそう」

千鶴からの電話だった。

「輪島クレンジングと輪島セッケンで、何をしようとしてるんだ？」

「拡大じゃない？」

「ありがとう」

網ノ目三郎は、千鶴が車から電話しているのかもしれないと思って、すぐに切った。

はっきり言って、網ノ目三郎は、自分のやっていることを、作戦をしっかりたてててやっているわけではない。目指していることは、チェリー株式会社の

活性化であって、立派な会社にすることだ。いまいち、立派な会社が何なのか、わからないが。
「拡大じゃない？」
千鶴は、網ノ目三郎が、チェリー株式会社の拡大をもくろんでいると思っているようだ。
そうだろうか。ただ拡大すればいいわけではないことは、わかっている。一般的には、成長することだろう。
網ノ目三郎が会社に着くのを、美鈴千賀子が待っていた。

〇金型が傷ついていた

「成形メーカーで、昨日の夜、輪島クレンジングのボトルの金型が壊れたんです」
「一緒に行ってください」
これはタイヘンである。網ノ目三郎は、成形メーカーに行ったことがない。プラスチックの成形のことだ。金型が、どのように使われているのかわからない。
車で１時間はかかるらしい。
美鈴千賀子は、エンジンをかけて待っていた。
「ゆっくりでいいですから」
急いでいるのに、ゆっくりでいいと言う網ノ目三郎に、美鈴千賀子は、機嫌がワルかった。
１時間、美鈴の金型の講義を聞いていた。美鈴は、化学屋さんである。どうしてハードのことがわかるのか、不思議だった。
金型屋さんも来ていた。
「はじめて成形した時に、傷があるのに気がつきました」
「工場では、完全にチェックしました。傷などありませんでした」
成形した輪島クレンジングのボトルを見せてもらった。
ボトルの内側である。切って割って見ないと、傷がわからない。
「ボトルの耐久性に問題がありますか？」
「デザイン上のことだけです」

「デザインといってもボトルの中なので見えませんが」
網ノ目三郎は、美鈴千賀子を見たが、判断しようがないという顔をしていた。
「金型メーカーで傷があったのか、成形メーカーに来てから傷がついたのか、よくわかりませんが、今回は、傷があるまま、進めます」
千鶴からメールがきた。
「ちょっとすみません」
「また車に襲われたの？会社に着かないけど」
「輪島クレンジングの金型に傷があったので見に来ている」
すぐにまた千鶴からメールが来た。
「誰かが金型を壊してる」
網ノ目三郎は、頭の後を金づちで殴られたようなショックを受けた。
「金型メーカーからどういう梱包で成形メーカーに来るのですか？」
遠くないので、金型メーカーの自動車で通い箱のような箱に入れて運ぶらしい。
「カギをして運ぶのですか？」
「そんなことはしません」
金型メーカーも成形メーカーも、切れ者には見えないイケメンの網ノ目三郎がやってきて、ホッとしていた。美鈴は、機嫌がワルかった。
それが、いきなり、聞いてきそうもないことを言いはじめた。
網ノ目三郎は、これから、成形メーカーが注意をしようと思ってくれればよかった。誰かが金型を壊しているなどとは、言えない。
網ノ目三郎は、傷ついた金型を見せてもらった。成形機から外してあった。多分、表だと思って傷つけたのではないかと思った。誰かわからない。金型は、どっちが表面になるのか、よくわからない。金型メーカーか成形メーカーの人は、こんなミスはしない。キチンと、ボトルの表面になる金型に、傷をつける。
「この傷は、何かでこすったものですか？」
「金型は硬いから、かなりのことをしないと、こんな傷はつきません」
網ノ目三郎に、弁償してくれと言われるかと思って、ビクビクしながら話している。どっちが傷つけたのか、言い争いになってしまう。

ボトルの内側の傷なので、今回は、このまま生産を続けることにした。

○千鶴カンノン

夜になるのを待って、千鶴に電話をした。
「今病院から帰ってきた」
「シャワーするとこ」
「どうして金型が壊されたってわかるんだ？」
「わたしだったらそうする」
「輪島クレンジングと輪島セッケンが出なかったらあなた辞表だから」
「あなた車で襲うのタイヘンだから」
「それでも最後はやるけど」
「わたしだったら」
「クレンジングに虫入っててもあなたを潰せる」
これはタイヘンなことになった。
千鶴は、自分だったらどうするかを考えている。
網ノ目三郎には、そんなことは考えられない。
千鶴は、まだ20歳になったばかりである。
「わたし、辛いことばかりだったからね」
「今は、その辛さの１つ１つがよくわかる」
「あなた追い出すくらい簡単」
「よく見えるようになった」
「先里さんがいなかったらいまだに悔しさだけだろうけど」
シャワーの音がしはじめた。
「思い出すから止めて欲しい」
「電話切る」
網ノ目三郎は、ますます千鶴がわからなくなった。先里万丈がわからなくなった。先里万丈は、何をしたいのだ。千鶴は、自分がどうなりたいのか。「千鶴カンノン」と言うのかもしれないと思った。

○ブルーのセダン

11月５日だった。土曜日だが、前川芳則と三枝伸治に呼び出されていた。
「販売実績をリアルにグラフでも表示できるサブシステムです」
「明日オンラインが止まっている時にテストしますから」
ちょっと考えても、すごく便利である。輪島クレンジングの売上の実績が出てきたら便利だ。
今朝は、フツウどおり起きて朝ごはんを食べて、歩いてきた。もちろん、今日は休日だからバスもない。
「お昼まで準備しますから」
「遊んでいていいですか？」
網ノ目三郎は、チェリー株式会社から、駅の方ではない、逆の方向にあるスーパーマーケットに向かった。お昼の弁当くらい買ってこようと思った。喫水の修正だが、網ノ目三郎には何もできない。
１キロくらいはある。
スーパーマーケットから出てくる千鶴を見た。隣に、サングラスのオトコがいた。幸いだった。まだスーパーマーケットに入る前だった。何も買っていない。無銭飲食ではなくて万引きの現行犯になる。
静岡の繁華街のカフェで、網ノ目三郎が追った千鶴と同じだ。
「どうしたの？」
「千鶴がサングラスのオトコと目の前にいる」
「車のナンバー覚えて」
「話しかけたら殴られて警察だからね」
どうして、何から何まで、千鶴はわかるのだろう。不思議である。
一応電話するようになっている。
危なかったのかもしれない。
網ノ目三郎は、弁当を買うためにお店に入った。どの車に乗るのか、見逃さなかった。ブルーのセダンだった。わかりやすい車に乗っている。遠くて、ナンバーが見えない。それにしても、彼女が千鶴ではないなど、信じられない。確かに、千鶴は、電話に出た。
「お昼食べてからにしましょう」
前川芳則と三枝伸治は、もう結果を知っていた。
「このサブシステムをやるくらいだから、喫水のバグは少なくなったのです

か？」
「多分、もう特殊なケースに限られると思います」
三枝伸治の顔は、やっとだという顔をした。
「これじゃ〜元気が出ませんね」
三枝伸治が言った。
商品別だとか、商品群別に実績数字とグラフが出るのだが、すべて、右肩下がりになるのだ。
「サブシステムは、うまく動いているようです」

○ブルーセダンが揚げ物屋に

網ノ目三郎は、これは病気ではないかと思った。今日は、日曜日なのだ。朝から、お昼になるのが待ち遠しい。
何も手がつかないのだ。揚げ物屋に行きたい。千鶴に会いたい。先里万丈の『売上を目指すと滅びる』を読んでいるのだが、ゼンゼン進まない。ずっと、そわそわしている。これは、もう病気に違いない。さっきから、何度もパソコンの時計を見ているが、２分くらいしか進まない。パソコンが壊れているのではないかと思う。
11時43分になった。着替えた。そして、外へ出た。カギを締めたかわからない。ドアを回してみた。締まっている。
揚げ物屋まで歩いて５分しかかからない。
揚げ物屋の前に、ブルーのセダンが止まっていた。エンジンが止まっていない。急に、おかしなことになってしまった。
昨日のブルーのセダンに間違いはない。
サングラスのオトコが出てきた。手に、袋を提げている。
運転席の女性が、アクセルを踏んだ。
間違いない。千鶴とサングラスのオトコだ。
「いらっしゃいませ」
ホットした。千鶴の声だった。
千鶴は、メモを持ってきた。
「何にしましょう」

メモを見た。
「Ｎｏ？」
網ノ目三郎は首を振った。
千鶴は、メモを網ノ目三郎に渡した。
Ｎｏが書いてあった。
「かき揚げどんぶりです」
千鶴は、ダメだな〜という顔をして厨房へ向かった。
網ノ目三郎は動転していた。ブルーセダンのＮｏなど、気がつかない。
これからどうするのかなど、考えないといけないのだろうが、網ノ目三郎は、千鶴と会って話すことしか頭に浮かばない。べつにお腹が空いているわけでもない。
夜になって、千鶴から電話がきた。
「知ってる人がいて、調べてもらった」
「なんですか？」
「ブルーセダン」
「大野康子23才」
「５キロくらい奥のお店で車検やってる」
「今日はここまで」
「あの２人は、何しに行ったんだ？」
「揚げ物テイクアウト」
「もう少し早く来たらあなたまた無銭飲食になってた」
「彼はわたしに寄ってくる」
「車にオンナいたけど」
「大野康子」
「大野康子とサングラスのオトコは何してるんですか？」
「わかんない」
「送られてきている写真の千鶴は大野康子なんだ」
「似てる」

〇サンプルを２００つくる

11月７日だった。網ノ目三郎は、チェリー株式会社の経営企画室長である。現住所だ。親会社の湯本化学の経営管理室が本籍だ。経営企画室長でありながら、千鶴に、いろいろ聞いている自分のことを、未発達だと思ってしまう。経験が少ない。まだ27歳だから仕方がないとは思うのだが、千鶴は20歳である。わけがわからない。
千鶴は、今網ノ目三郎が、チェリー株式会社でやっていることは、拡大だと言った。しばらく前は、喫水をやっていた。
喫水は、組織であったら、どんな組織でも、欠いてはならないことだ。リアルに喫水を把握しておくことは、大事だ。
しかし、拡大をすることは、欠かせないことだろうか。考えないといけないと思った。会社は拡大することが本質なのか。
また千鶴からメールがきた。
「もっと歩道の奥歩いて」
「車に襲われそう」
最近、毎日のように、千鶴に見られている。車から見られている。２８０円無銭飲食事件以来、網ノ目三郎は、バスに乗れなくなっている。朝早く出て、歩いて会社に行く。帰りも、歩いて帰る。
幸いなことに、喫水の時のように、車で襲われそうにない。しかし、千鶴は、注意しろと言っている。
会社は拡大しないといけないのかを考えている。
会社がゼンブ拡大を繰り返したら、地球はパンクしてしまう。会社は、滅んでしまうことが多いから、それで帳尻を合わしているのかもしれない。
会社も人と同じだろうか。いつか死ぬ。
人は、24才くらいから衰える。成長はしない。細胞分裂はしない。衰えるのを、リモデリングするだけだ。再生する。完璧には再生できないから、衰えることになる。
会社も同じなのだろうか。
多分、会社には、細胞分裂などない。成長などない。リモデリングだけだ。ほんの小さなことでさえも、リモデリングで、デカイことになってしまうこともあるのだろう。会社の拡大とは、それしかない。細胞分裂などない。
「輪島クレンジングと輪島セッケンの発表のためのサンプルを２００つくり

ます」
「手がないから手伝ってもらえますか？」
美鈴は、網ノ目三郎を、今日の作業員として勘定していた。
「２００だからたいして時間はかかりません」
前川芳則もやってきた。
「金型はそのままですか？」
「内側に傷がありますけど見えません」
「セッケンは乾燥が必要ではないのですか？」
「これはわたしが試作しておいたものです」
「生産品ではないんだ」
「生産は11月１日からやってますから間に合いません」
「クレンジングは11月１日生産のものです」
「パッケージも最初の印刷分です」
網ノ目三郎は、パッケージがゼンゼンわからない。最初の印刷分とはなんだろうか。
網ノ目三郎は、作業着に着替えて、作業場に向かった。今日使っていない作業場を使うらしい。
「これお願いします」
千鶴が輪島セッケンを持ってきた。どうして千鶴が持って来たのかわからない。
「どうもありがとう」
美鈴は、当然のように受け取っていた。サンプル分の、６センチセッケンと、個包装されたセッケンだ。これを、チョコレート形状の箱に詰めないといけない。
千鶴は、そのまま、部屋から出て行った。手伝うのではないらしい。
網ノ目三郎は、輪島クレンジングと輪島セッケンのサンプルをつくる手伝いをして良かったと思った。美鈴は、個包装の輪島セッケンのサンプルを、余分に、２００つくってくれと言った。チェリー株式会社の女子社員に、発表時に配るらしい。
夜、千鶴から電話があった。
「輪島セッケンの個包装もらった」

「少し手伝ったら美鈴さんが今日くれた」
「内緒にしてだったからお願い」
「チョコの箱みたいですごくいい」
「１回分なんだけどすごく使いやすい」
「泡立ちもいい」
「これは最高」
「すごいヒットする」
「渋谷のオンナ向けだけど渋谷のお店には出せないんだよね」
千鶴は、それだけ言うと電話を切ってしまった。
10分後にメールが来た。
「なんとしても発売させたらまずいと思う人いる」
「チェリーは伝統あるから」

〇拡大は組織の本質なのか

11月８日の朝も、早く出て歩いて会社に向かった。
「美鈴さんも危ないかもしれない」
短いメールが千鶴から来た。
「千鶴は大丈夫か？」
「わたし襲っても輪島セッケンは止まらない」
「千鶴のそっくりさんとサングラスのオトコの写真は、あなたを無銭飲食者にまでした」
「でもわたし襲っても意味がない」
「脅迫だったらあなたビビるだろうけど」
どこからメールしているのかわからない。
網ノ目三郎は、拡大のことを考えていた。
美鈴千賀子が危ないと言われて、混乱してきた。
網ノ目三郎が輪島クレンジングと輪島セッケンでやっていることは、拡大だったら、網ノ目三郎は、これからも、輪島クレンジングや輪島セッケンのようなことを続けるだろうから、自分の中で、折り合いをつけておかないといけない。

梅岡玄蕃に電話した。
「早くからすみません」
「どうしたのですか？」
「千鶴に、あなたがやっていることは、喫水の次に拡大だと言われて、会社は、拡大することが本質かどうか考えているんです」
「網ノ目三郎さんは本質ではないことをしない人なんだ」
「自分ではわかりません」
「会社は拡大しなければ滅びますよ」
「どうしてですか？」
「滅びる会社も多いからです」
「会社も生き物と同じです」
「常に新鮮さを求められるのです」
「できなかったら会社は滅びます」
梅岡玄蕃に聞いてみると、どうしてこんなことで電話したのか不思議になる。あたりまえのことだと思ってしまう。千鶴も同じことを言いそうだ。
なんかまだありそうだが、よくわからない。
チェリー株式会社だって、拡大しようとして必死にやってきたのだろうが、拡大など難しい。滅びる方が簡単だ。日本だって、拡大できないでいる。
梅岡玄蕃からのメールが来ていた。さっき電話で話したのだが、メールは、今朝の７時に届いていた。梅岡玄蕃は、どうしたのだろう。
11月12日の土曜日にいつもの渋谷のカフェで待っていいかである。若者が集まるファッションビルの、女性のバイヤーに、輪島クレンジングと輪島セッケンを説明してくれである。
「美鈴を一緒に連れて行くけどいいか」
「了解した」
網ノ目三郎は、自信がなかった。
渋谷のファッションビルのバイヤーに、輪島クレンジングと輪島セッケンを説明することなどできない。
そもそも、どうして梅岡玄蕃が動いたのだろう。この話は、千鶴が網ノ目三郎に言った話しだ。千鶴が、梅岡玄蕃に頼んだのだろうか。そんなことはないと思う。

○美鈴の交通事故

11月10日だった。手作りギョーザを食べていた。美鈴のケータイだった。
こんな時間に、電話などかかってきたことがない。
「美鈴千賀子の主人です」
「15分くらい前に交通事故で、今救急車の中です」
「美鈴が電話してくれと言いますので」
「病院はどこですか？」
網ノ目三郎は、ガスを見てカギを締めて、そのまま飛び出した。
15分前ということはどういうことだろうか。どうしてダンナが救急車に乗っているのだろう。家の近くだったのだろうか。網ノ目三郎に電話してくれと言ったことはなんだろう。スーパーマーケットまで走った。タクシーがいた。
家の近くまで歩いて帰っていて、後から車で飛ばされたらしい。鎖骨が折れていた。頭を打たなかったことは幸いだった。
「現在検査していますけど、鎖骨以外にも何かあるかもしれません」
美鈴のダンナは、実直そうな、真面目そうな男だった。美鈴の両親が、すでに、来ていた。美鈴は、両親の近くのアパートに住んでいる。
「いつもお世話になっております」
網ノ目三郎は、丁重に挨拶された。
「意識はあるのですか？」
「平気です」
警察が来た。
話しの様子によると、ひき逃げらしい。
11月10日だ。最も日が短い。夕方だが、暗かったのだろう。
網ノ目三郎は、美鈴に、車のことを聞きたかった。
千鶴に、美鈴が危ないと言われていた。しかし、網ノ目三郎は、何もすることができなかった。
無力感が漂う。
千鶴にメールだけしておいた。
「すぐにタクシーに乗って車の修理工場に来て」

網ノ目三郎は、病院の前にいたタクシーに行く先を注げた。かなり北に走った。富士山の方だ。
網ノ目三郎は、修理工場から30メートル手前でタクシーを降りた。サングラスのオトコと千鶴似の大野康子が見える。後から千鶴が引っ張った。
「もっとこっち来て」
「サイドミラーが壊れたから修理に来た」
「どうして知っているんだ」
「カン」
「車検やってる所だから」
「こんなつもりじゃなかったんだろうけど」
「どういうことですか？」
「跳ばせば車には傷がつかない」
「あなた何度も経験あるじゃない」
網ノ目三郎は、どういうわけだか、車に乗り上げて後に落とされた。
美鈴は、右から当てられている。左に跳ばされているだろう。左のサイドミラーが壊れたのだろうか。
修理代を払った。そして、ブルーのセダンは、何事もないかのように滑るように走り去った。
「右のサイドミラーです」
網ノ目三郎にとっては意外だった。
時間はピッタリだった。すぐにここへ来たのだ。誰も気がつかない。
「あの２人のことを聞いたことは内緒にしていただけますか？」
自動車修理工場の主人は、快く受けてくれた。
「わたし病院行く」
「ここで降りて」
「歩いてもたいしたことない」
「一緒にいるとこ見られない方がいい」
千鶴は、凄い女性である。驚いてしまう。
網ノ目三郎は、タクシーを探して、また美鈴の入院している病院に向かった。

○美鈴に呼ばれて

11月11日だった。輪島クレンジングと輪島セッケンが気になっていた。明日の渋谷のファッションビルのバイヤーへの説明も気になっていた。

11時ごろ美鈴から電話があった。

「相談あるけど来れますか？」

「わたしのノート持ってきてください」

食べられるかどうかわからなかったが、美鈴が好きなハンバーガーとコーラを買った。鎖骨が折れているのだが、胃腸は大丈夫かもしれない。

「どうもありがとう」

「食べたかった」

美鈴は元気だった。ハンバーガーをおいしそうに食べた。

「わたしここから電話でやってるから、クレンジングもセッケンも、遅れない」

「発表の時にわたしがいないから網ノ目三郎さんか前川さんにお願いします」

「君津峰子さんとはアポイントが取れていますから、商品説明をお願いします」

「陳列とかは前川さんがやっています」

「入り値の話しもできています」

「通信販売での発表も前川さんが案をつくっていますので聞いてください」

「ホームページをオープンします」

網ノ目三郎は、まだ前川芳則から聞いていなかった。

発表といっても、その２つだ。

「明日の渋谷のファッションビルのバイヤーへの説明は網ノ目三郎さんがお願いします」

美鈴に、そう言われて、急にプレッシャーになった。網ノ目三郎が、経営会議などで話してきたのは、会社の話しだ。若い女性に話したことなどない。そもそも、感性が合わないと思う。時々梅岡玄蕃に連れられて、渋谷のカフェで若い女性に意見を聞くが、梅岡玄蕃がいなかったら、網ノ目三郎は仕切れない。何を話したらいいのかわからなくなる。

「わかりました」
それでも、美鈴の現在の状況を考えると、勝手なことは言えない。気は重いが。
「車で跳ばされた時は歩道を歩いていたのですか？」
どうして急に事故のことを聞くのかといった顔した。
「そうです」
「どっちの歩道ですか？」
「左」
「車は覚えていませんか？」
「ゼンゼン」
網ノ目三郎は、チェリー株式会社の車で来ていた。
美鈴が跳ねられた現場に向かった。
もちろん、跡形もない。
網ノ目三郎は、車を降りてシュミレーションしてみた。
美鈴は左の歩道を歩いていた。家に向かって左だ。もうアパートまで１５０メートルくらいしかない。
ここだけ歩道が広くなっている。
ブルーセダンは右のサイドミラーが壊れた。
網ノ目三郎は、15メートル離れている街路樹の切り株が目についた。
ブルーセダンの右のサイドミラーが壊れたことを知っていなければ、２本先の街路樹の切り株に気がつかない。
ブルーセダンは、広い歩道に入って、美鈴を跳ばして、２本目の街路樹から車道に抜けようとしたが、この切り株に、右のサイドミラーをぶつけた。
何度シミレーションをしても、間違いない。ブレーキのタイヤ跡があれば確実なのだが、何もなかった。ブレーキもかけなかったのだ。右のサイドミラーをぶら下げたまま、ブルーセダンは、修理工場に向かった。
「あなた小説家になれる」
「誰も信じないだろうね」
千鶴から、冷たいメールが返ってきた。

〇千鶴のカミングアウト

「９時30分の開店前にお願いします」

梅岡玄蕃から、渋谷のファッションビルの化粧品店のバイヤーのメールが転送された。

早く起きて、シャワーをして、念入りにヒゲをあたった。髪も整えた。こういうことに慣れていない。

パソコンのバックアップが終わるのを待って、ガスを見て、電気を消して、カギを締めて出た。

静岡駅までタクシーで出た。遅れたらタイヘンである。

網ノ目三郎は、こういう時に失敗したことがない。いつも、早めになる。新幹線の自由席の乗り口で待った。

３分前になって、いかにも渋谷のオンナがやってきた。静岡のオンナではない。真っ直ぐ網ノ目三郎に向かって来た。みんな見ている。

「千鶴？」

「おはよう」

「どこ行くんだ？」

「あなたがこの電車に乗るの聞いていた」

「誰に」

「美鈴さん」

新幹線は、まだ時間が早いせいか、空いていた。

「朝ごはん食べた？」

「どうせヒゲしたり忙しくて食べてないでしょ？」

「どうぞ」

おにぎりを２つ渡された。

「サケとウメしかないけど」

「漬物ある」

「ノリはこのまま使って」

千鶴は、ホントによろいがない。すごいキレイなのに、大きなノリをおにぎりに巻きつけてほうばる。

「ありがとう」

すごいおいしいおにぎりだと思った。
「お茶買ってくる」
千鶴は、２両先の自動販売機に向かった。
多分、誰も、千鶴に気がつかない。すごいキレイなのだが、いつもの千鶴のキレイさとは違っている。
「どこ行くんだ？」
食べ終えて、やっと１番聞きたいことを聞いた。
「渋谷のファッションビル」
「あなたがダメそうだったらわたしが説明するように頼まれた」
「誰に」
「美鈴さん」
「誰も知らない」
「昨日のあなたの小説家みたいなメールが来た時、美鈴さんと病院でスライドつくってた」
「ちょっと見せてくれないか」
「メモリースティックなのか」
網ノ目三郎は、パソコンを取り出した。
美鈴のメモリースティックから輪島クレンジングとセッケンを読み込んだ。
網ノ目三郎は、ホントに驚いた。チェリー株式会社で、前川芳則と美鈴千賀子が説明した、輪島クレンジングと輪島セッケンとは、まるで違っていた。
今までに見たことにないようなスライドだった。
「あなたの見せて」
網ノ目三郎は、嫌がった。経営会議で話すスタイルと、あまり違わない。
「イヤなの？」
「恥ずかしい」
「こういうのがよろいだって言うんだよ〜」
勝手に、網ノ目三郎のスライドを開けた。
「だから美鈴さんはわたしに頼んだんだよね」
「３秒で終わりだよ」
網ノ目三郎は、はじめてわかった。
網ノ目三郎は、電気技師である。今は、経営管理者と思われているかもしれ

ない。こんなスライドを見たのは、はじめてである。これが、若い女性のフツウの感覚なのだろうと思う。
網ノ目三郎は、すごく恥ずかしかった。千鶴に恥ずかしかった。
美鈴は、よくわかっていたのだ。経営会議で話すスライドと、渋谷のファッションビルで話すスライドを、完全に分けていた。網ノ目三郎だけが、何もわからなかった。
「ワルイんだけど〜私はあいさつだけにしていいですか？」
「わたしが話すの？」
「晩ごはんご馳走するから」
「渋谷で映画見て晩ごはんだったらいい」
「お願いします」
「千鶴はなんなんだ？」
「わたしパソコンの先生もアルバイトでやってる」
「美鈴さんは知ってる」

○渋谷のファッションビルのバイヤー
梅岡玄蕃がまだ開いていないビルの前で待っていた。
「バイヤーは忙しいから３分前に行きましょう」
不思議なことに、千鶴を紹介しなかった。
「今日は、千鶴さんが説明します」
「わかりました」
「あの〜紹介します」
「おはようございます」
紹介にならなかった。顔見知りなのだ。
「じゃ〜行きます」
梅岡玄蕃は先里万丈なのだ。千鶴は、先里万丈にホレている。
「考え過ぎないでいいから」
階段を登りながら、千鶴が言った。顔見知りであることだ。紹介にならなかったことだ。しかも、今日、千鶴が来ることを、梅岡玄蕃は知っていた。考え過ぎないでもいいと言われても、網ノ目三郎は考えてしまう。

「ワ〜キレイ〜」
「チェリーさんってこういうのじゃないと思ってました」
10分しか説明しなかった。終わったのだ。
やはりパフォーマンスも大事だ。つくづく感じる。千鶴の渋谷っぽいキレイさは、抜群である。
「わかりました〜12月１日から売場つくります」
「輪島クレンジングは１００個置けるスペース差し上げますからデザインしてください」
「個包装の輪島セッケンは５００個置きます」
「販売員は、わたしどもでやります」
「55でいいですか？」
「お願いします」
梅岡が返事をした。
何が55かわからない。
真鍋真琴という名前だった。30くらいだろうか。
お茶しましょう。
梅岡玄蕃が言った。
千鶴は、歩きながら電話をしている。多分、12月１日からできるのか、聞いているのだ。美鈴だ。
「量産試作したの使わないと乾燥してないらしい」
「全く同じものだから問題ないって」
網ノ目三郎は売場をどうするのか、よくわからない。
「千鶴さんがやれるといいんだけど難しいでしょうね」
梅岡玄蕃が、どうして千鶴だったらうまくいくと言っているのか、よくわからない。
「前川芳則さんと南良子さんのチームでやるしかないと思う。わたしが手伝う」
網ノ目三郎は、千鶴を、よく知っていると思っていたが、実のところ、半分くらいしか知らなかったのではないかと思った。
梅岡玄蕃は、次の仕事があると言って、カフェを出て行った。
「なにしてるんです？」

「映画調べてる」
「１時からのでいい？」
「わかりました」
「晩ごはんもご馳走するんだよ？」
「喜んで」
「お昼ごはん食べに行こう？」
網ノ目三郎は、よくわからない。網ノ目三郎のアパートの近所の揚げ物屋でアルバイトをしている千鶴と、チェリー株式会社のセッケンの仕上げ工程で働いている千鶴と、パソコンの先生をやっている千鶴と、渋谷の若いオンナっぽい千鶴が、繋がらないのだ。
千鶴は、多分、フツウだと思っているだろう。

○発表を遅らせる指示
11月14日だった。９時30分に山上一郎がやってきて、いきなり言った。
「明日の輪島クレンジングと輪島セッケンの発表を中止してください」
「開発者がいないのですから」
網ノ目三郎は、渋谷の話しを、事前に、山上一郎に話しておけばよかったと思った。10時になって、網ノ目三郎は、山上一郎と山上郁夫の部屋に向かった。
「どうしてこんな勝手なことをするんだ」
輪島クレンジングと輪島セッケンの明日の発表を遅らせるように言ったのは、社長の山上郁夫だった。
「失敗したら私が責任をとることで、輪島クレンジングと輪島セッケンは進行したと思っていました」
「君ではよくわからんだろう」
「開発者がいないのに」
「明日は、静岡のドラックストアー１社と通信販売だけの発表にします」
「渋谷は、約束して来ましたので、１店舗だけやります」
山上郁夫は、シブシブ引き下がった。
「渋谷のファッションビルなどで売るようなモノはチェリーとは違う」

多分、雑貨のように化粧品をやっているのを批判しているのだと思った。真鍋真琴は、そういう人ではない。
前川芳則が心配してやってきた。
「美鈴さんがいないから説明ができないだろうって言ってるんです」
「静岡のドラックストアー１社と通信販売以外は発表しないと言いました」
「渋谷はどうしますか？」
「予定通りお願いします」
「11月19日土曜日ですけど千鶴さんを出勤させてもらいたい」
「お願いしてみます」
「須藤百合子さんにも来てもらいます」
パッケージデザイナーだ。
網ノ目三郎は阿仁屋和人にメールして、千鶴を出勤させてもらうように、頼んだ。特例だと記しておいた。
夜になって、千鶴から電話があった。
「阿仁屋和人さんに頼まなくてよかったのに」
「わたしは手伝いたいから手伝ってる」
「もし交通事故があってもチェリーは補償できない」
「そんなのわかってる」
「わたしが中心人物に近くなるとわたしが襲われる」
「わたしは襲われてもいいけどそしたらあなた何もできなくなる」
「わたしは陰にいないとダメなの」
「わたしが輪島クレンジングと輪島セッケンを手伝ってることを知ったらダメなの」
「美鈴さんを襲った人に知られたらダメなの」
「わたしは今はあなたが１番愛してる人になってる」
「だから写真送ってきてあなたを混乱させてる」
「あなた無銭飲食の常習者だから」
「信用ない」
網ノ目三郎は、千鶴のことが、ますますわからなくなった。
「美鈴さんは、こういうのわかんないから気をつけてあげて」

○輪島クレンジングとセッケンの発表

11月15日だった。火曜日だ。

チェリー株式会社のホームページには、輪島クレンジングと輪島セッケンが紹介されていた。２０１１年11月15日に発表して、２０１２年２月１日に出荷するとあった。静岡のドラックストアーと通信販売だ。渋谷のファッションビルのことは、紹介していない。初回２万個づつと書いてあった。１年間の販売目標は４万個づつである。

網ノ目三郎と前川芳則は、勇んで、君津峰子のところへ向かった。10時である。風邪で休んでいるとのことだった。

「一昨日確認したのですが」

前川芳則は、不思議だという顔をした。前川に連絡があってもいいと思った。ケータイに電話したが出ない。

網ノ目三郎は、イヤな予感がした。

午後になって、前川芳則がやってきた。

「君津峰子さんから電話がありました」

「上から輪島クレンジングと輪島セッケンは取り扱わないように指示があったそうです」

「理由はわからないと言っていました」

輪島クレンジングと輪島セッケンは、しょっぱなから苦戦である。

網ノ目三郎は、どうしていいのか、これからどうするのか、考えることができない。喫水のことでは、網ノ目三郎は、躊躇するようなことはない。すぐに決断できる。しかし、輪島クレンジングとセッケンのことは、どうしたらいいのか、わからない。

「わたしはブログを考えますから」

前川芳則は、通信販売に絞るようだ。

夜になって、野菜炒めを食べていた。野菜炒めはおいしくできるのだが、気落ちしている。静岡のドラックストアーのことは、思ってもみないことだった。

夜になって、千鶴に電話をした。病院から帰ってきた時間だ。

「わたし野菜炒めつくってる」

「なに？」
「元気ないの？何かあった？」
「静岡のドラックストアーから断られた」
「それで？」
「わたしは断られると思ってた」
そういう千鶴が、さっぱりわからない。
「輪島クレンジングと輪島セッケンはいじめられてるんよ」
「できた〜おいしそう」
「冷たくなったらおいしくないから話しながら食べる」
「ええ」
「お味噌汁もおいしそう」
「納豆あるか」
「それで〜どうすんの？」
「わたしのおかしな写真を８回も送ってきてるんだよ？」
「静岡のドラックストアーにおかしなこと言うくらい平気だよ」
「渋谷もダメになるか」
「真鍋真琴さんとは毎日話してるから平気」
「毎日話してるって？」
「場所の見取り図とかわかんない」
「それに〜渋谷のファッションビルとか知ってる人いないもん」
「どうせダメだと思ってるだろうし」
「わたしがいるから平気」
網ノ目三郎には、ゼンゼンわからない。どうして自分がいるから平気だと言えるのだろうか。

○もう負けたのか

網ノ目三郎は、11月19日土曜日だったが、朝早くから出勤した。輪島クレンジングと輪島セッケンの、渋谷のファッションビルの化粧品店での店頭ディスプレイを検討する。前川芳則は、今日中に決めないと、制作が間に合わないと言っていた。パッケージ担当の須藤百合子と販促担当の南良子と千

鶴がやっている。
網ノ目三郎は、静岡のスーパーマーケットから断られたことで、渋谷のファッションビルのことも心配になっている。やはり、お店は、信用が大事だ。
「おはよう」
前川芳則と須藤百合子と南良子と千鶴は、すでに、手作りで陳列スペースをつくりはじめていた。
「窓はどこ？」
いちいち千鶴に聞かないとわからない。場所を知っているのは、千鶴しかいないのだ。千鶴は、目立たない服装をしている。
「12月３日に行くことを約束した」
「渋谷のお店ですか？」
「土曜日だし１日でどんくらい売れるか自分でやってみる」
「わたし上手だから」
おかしな話だ。わたし上手だと言っている千鶴は、セッケンの仕上げ工なのだ。セッケンを磨いている。
千鶴１人が、張り切っているかのように見える。
網ノ目三郎は弁当を買いに行った。５人分である。ブルーセダンは姿を見せない。
前川芳則は、ディスプレイの制作会社を呼んだようだ。
「この唐揚げおいしい」
南良子もホッとしたように弁当を食べていた。
夕方になって、その場で、見積もってもらって見積書をもらった。
「11月30日20時に搬入します」
「私と須藤百合子がお店にいますので」
前川芳則は、心配そうである。ここまで制作して断られたら困る。そうかといって、確かめることなどできない。前川芳則は、発注書を渡した。
みんな自信なさそうだ。網ノ目三郎も、自信がない。
「静岡のスーパーマーケットがなくなったから、出荷日を12月１日にしますか？」
「ものがあればそうしてください」

「量産試作のものがあります」
みんな急いで帰って行った。
「車で待ってようか？」
千鶴が言ってくれたのだが、戸締りしたり整理するからと、先に帰ってもらった。
網ノ目三郎は、考えてみたかった。
網ノ目三郎は、新製品などやったことがない。すごくシンドイと思っている。たった電話の一言で、なくなってしまうのだ。
網ノ目三郎は、歩きながら考えた。
もしかして、もう負けたのかもしれないと思ってしまう。
何回も千鶴の写真を送られて、自分自身もおかしくなった。無銭飲食の常習者にされた。輪島クレンジングの金型が傷つけられた。美鈴は、事故かもしれないが、車に飛ばされて鎖骨を折って入院した。静岡のスーパーマーケットには納入を断られた。
このままでは、生産しても、売れないで在庫になるのではないかと思った。
いつものスーパーマーケットに入って行く時、後にブルーセダンがいたことに気がついた。網ノ目三郎は、今は襲われない。勝負はあったのだ。ブルーセダンが勝ち誇っているかのように、エンジンをふかして、走り去った。

〇美鈴が退院する日だった

11月22日火曜日だった。美鈴の退院日だった。左腕をしばらくは吊っていなければならないらしいが、会社に出ると言って来た。
「大丈夫ですか？」
「歩いて来れるとこにあるから」
確かにそうだ、美鈴は、チェリー株式会社まで歩いて出勤できる。
「美鈴さん気をつけて」
短いメールが千鶴から来た。
網ノ目三郎は、車で、美鈴の入院している病院に向かった。
かなり離れたところから、美鈴を見ていた。美鈴が出てきた時、危ないと思った。１人だったのだ。荷物もバッグ１つだ。多分、昨日中に家族で持っ

て帰ったのだ。網ノ目三郎は心臓が止まるのではないかと思った。
ブルーセダンが網ノ目三郎のバックミラーに見えたのだ。
網ノ目三郎は、無意識に、車を急発進させて、美鈴に向かった。ブルーセダンは、後にいた。ひょっとしたら、ブルーセダンが追突するかもしれないと思いながら、ブレーキを踏んだ。
ブルーセダンは、網ノ目三郎の運転している車スレスレに右に出た。そして走り去った。
危なかった。
千鶴のメールがなかったら、危なかった。
「どうしたのですか？」
「家まで送って行きます」
「わざわざすみません」
美鈴は、直前に起こったことに、何も気づいてはいなかった。
それにしても、千鶴はなんなんだ。

○**12**月１日発売初日

網ノ目三郎は、美鈴のことが毎日心配だった。朝は、襲われることはないと思った。夕方は、美鈴が断っても、ムリに車で送って行った。しかし、ブルーセダンは現れなかった。
12月１日だった。渋谷のファッションビルでの輪島クレンジングと輪島セッケンの販売初日である。
前川芳則は、朝から渋谷に出かけていた。網ノ目三郎は、喫水を見たかった。昨日の夜は、みんなたな卸しで忙しかった。12月だ。夜は寒い。
依然として、売上は良くない。しかし、喫水勘定に、預金が多くなってきている。在庫も更に絞れてきていることは確かだ。
良くないが、ワルクはない。
網ノ目三郎は、美鈴と一緒に渋谷に向かった。美鈴も、生産をしてはいるが、在庫が増えるのではないかと心配していた。
美鈴は、渋谷の売場を見て驚いた。
「チェリー株式会社とは思えない」

それはそうだ。渋谷ギャルにも買ってもらいたいのだ。
「お客さんもまだとまどってるみたいね」
前川芳則は、もう売場にはいなかった。確かにそうだ。オトコが長居をできる所ではない。網ノ目三郎は、美鈴が一緒だから少し長居をできる。
「わたしはダメだけど千鶴だったらいっぱい売るかもしれない」
美鈴は、おかしなことを言った。商品は、モノが勝負だ。売る人によって、そんなに売上が違うものではない。網ノ目三郎は、おかしいと思った。
「はっきり言って、わたしは、ドラックストアーで販売するモノと思っていた。渋谷のファッションビルで売れるかどうかわからない」
美鈴も、渋谷のファッションビルのお客さんと同じように、輪島クレンジングと輪島セッケンが、若い売場にあることに、とまどっていた。

〇渋谷で千鶴が

12月３日だった。網ノ目三郎は、千鶴が、渋谷のファッションビルに出向いているのを知っている。多分、早い時間の新幹線だろう。お昼ごろお店に行ってみようと思っていた。11時に静岡駅にいた。
「足りないから車で持ってきて」
「個包装５００に輪島クレンジング１００あったけど」
「２時までに来て」
「いくつ持っていくんだ？」
「個包装１０００にクレンジング２００」
「明日もあるから積めるだけ」
網ノ目三郎は、美鈴に電話をした。モノがわからない。網ノ目三郎は、タクシーで工場へ向かった。どうなっているのか、よくわからない。
「こうなるんじゃないかと思っていた」
美鈴は、おかしなことを言った。
「伝票忘れないで」
「バイヤーに渡して」
網ノ目三郎は、運送屋に徹した方がよいと思った。網ノ目三郎には、よくわからないことが動いている。

14時までに着けるだろうか。
「まだこの時間だから昇りも混んでないから」
網ノ目三郎は、急いだ。お腹が空いたのだが、ガマンして走った。
「ビルの後の搬入口あるからそこで降ろして」
「伝票持ってきた？」
「わたしも行く」
バイヤーの真鍋真琴もやってきた。３人で売場に運んだ。驚いたことに、輪島クレンジングは３つしか残ってなかった。個包装輪島セッケンはゼロだった。朝は５００あったはずである。
真鍋真琴は、忙しく、伝票を持って出て行った。何事もないかのようだった。
しばらく、網ノ目三郎は、千鶴を見ていた。
すっぴんに近い千鶴だが、すごくキレイだ。
「このセッケンだとキレイになるんですか？」
「どうぞ」
そんなに高額な箱ではない。チョコの箱のような個包装輪島セッケンは、次々に売れていった。千鶴のようになるかもしれない。
「バイヤーから明日の朝輪島クレンジング２００と輪島セッケン１０００の注文があった」
「出せるのですか？」
「あと３０００くらいは量産試作から出せる」
「11月１日から生産していてよかった」
美鈴から電話があった。
網ノ目三郎には、よくわからない。どうしてこうなってしまうのか、わからない。網ノ目三郎は、喫水も素人だったが、自信ができた。しかし、新製品を開発して販売することは、すごく難しいと思った。素人だ。少しはわかるようになるんだろうか。
網ノ目三郎は、もう負けたのかと思っていた。輪島クレンジングや輪島セッケンなど難しいと思っていた。
「わたしゆっくりできないから新幹線で食べるお弁当ご馳走して」
網ノ目三郎は、豪華な弁当を探した。３０００円の弁当があった。

「これを知ったら金型とか危ないからね」
「美鈴さんも危ない」
「わたしも危ないからわたしはここで引っ込む」
「ブルーセダンと戦わないといけないかもしれない」
網ノ目三郎は、不思議な顔をして千鶴を見ていた。

○喫水はシステム新製品は人材

12月４日になった。今日も渋谷は混雑が予想される。輪島クレンジング２００と個包装輪島セッケン１０００が届いているはずである。
「わたし揚げ物屋さんに向かってるんだけど」
「輪島クレンジングとセッケンが届かない」
「もう９時だからおかしい」
「日曜だからこのままだと11時には品切れになる」
「あなたまた運んで」
千鶴からだった。
網ノ目三郎は跳び起きて美鈴に電話をした。
運送屋の電話を聞いて電話した。
「すみません〜横から車が飛び出してきて避けて横転したんです」
「どこですか？」
「まだ静岡です」
「ブルーのセダンですか？」
「わかりません」
美鈴は、片腕を肩から吊っているのに、工場に来てくれた。
「品物は私が運びますから」
「横転した車の商品ダメなんですか？」
「明日お詫びに来るようですけど」
「輪島クレンジング４００と輪島セッケン２０００の伝票です」
「今週はこれで足りると思いますけど」
10時になっていた。網ノ目三郎は、急がないといけないと思った。
「美鈴さんありがとう」

「気をつけて帰ってください」
「歩道の奥歩きますから」
喫水をつくる時も、何度もトラブルに見舞われた。何度も徹夜をした。しかし、行き着かないと思ったことなどない。必死にもがいていれば、完成の時が来ることを疑ったりしない。喫水も素人だったのだが、どういうわけだか、自信があった。
しかし、輪島クレンジングと輪島セッケンは、もしかしたら、行き着かないかもしれないと感じてしまう。
在庫が溢れて、神部五郎に、これまでだと言われてしまう気がする。お店のバイヤーに、これまでねと言われてしまうかもしれない。
山上郁夫に、ガンバってくれてありがとうと言われるかもしれない。
新製品は、行き着かない可能性が高いと思った。
これだけ会社があって、たくさんの新製品が発売されている。生き残るのは、ほんの少しだろう。
喫水の場合は、確かに人材も重要だが、システムが出来上がっていることも、大きな要素だ。システムを完璧に理解した人材がいれば、喫水をつくることは可能だ。しかし、新製品は、システムがない。すべてが人材次第だ。こんなことは、はじめて気がついた。
網ノ目三郎は、商品の難しさを、つくづく感じていた。今日のように、商品が失敗する道筋がたくさんある。もし品物が届かないという連絡がなかったら、やっぱダメね〜と言われて終わりである。
網ノ目三郎は、バックミラーを見て心臓が止まるかと思った。ブルーセダンがすぐ後にいた。瞬間に、追い越し車線から左に移った。そして、そのまま、多分、バスの停留所かもしれない車線に入った。ブルーセダンは、そのまま追い越し車線を進んでいる。
網ノ目三郎は、追い越し車線には出ないようにしていた。軽自動車の後を80キロで走った。今日は、どうしても渋谷に着かないといけない。
渋谷のファッションビルまで、ブルーセダンは姿を現さなかった。網ノ目三郎の勘違いかもしれない。ブルーセダンは、何台もいる。
「今店頭に４００と２０００運んだ、今週は大丈夫だと、真鍋真琴さんは言っていた」

千鶴にメールをした。同じ内容のものを美鈴にもメールした。
ブルーセダンが気になっていた。

〇足元の盗聴器

12月５日の夜だった。網ノ目三郎は、以前に、自分のアパートの盗聴を調べてもらった人に来てもらった。どう考えてもおかしいのだ。網ノ目三郎の動きを、ブルーセダンに読まれている。美鈴の動きも読まれている。
網ノ目三郎の足元のコンセントだった。盗聴器が埋め込んであった。
「他にはありません」
「内緒でお願いします」
網ノ目三郎は現金で支払った。
これはタイヘンなことだ。ブルーセダンのことでは、常に疑わしいと思っているのだが、確信できるモノがない。美鈴が襲われたことも、ひき逃げ事件になったままだ。多分、捕まらない。
網ノ目三郎の足元の盗聴器は決定的だが、それを、どうすることもできない。どうしていいのかわからない。
多分、盗聴器を外したことは、すぐに気づくだろう。ブルーセダンは、慌てるのではないかと思った。余計にまずくなる可能性もある。千鶴だったら、知ってて外すなと言いそうだ。網ノ目三郎は、まだ幼いと思った。しかし、どうして千鶴だと、知ってて外すなと言うのだろう。よくわからない。網ノ目三郎は27歳で千鶴は20歳だ。ホントに、わからない。
しかし、もう盗聴器は外してしまった。ブルーセダンは、他の手を考えそうだ。
網ノ目三郎は、戸締りをして、歩きはじめた。
「おつかれさま〜」
守衛さんがいる。門のところには、夜だけ守衛さんがいるのだ。警備保障の会社に頼んである。
網ノ目三郎は、反対車線にブルーセダンが止まっていることに気がついた。
消灯している。しかし、不思議なことに、襲われる気はしなかった。
網ノ目三郎を襲っても、輪島クレンジングと輪島セッケンは止まらない。輪

島クレンジングもセッケンも、網ノ目三郎は、生産にも関与できないのだ。販売も前川芳則がやっている。やはり、キーマンは、美鈴千賀子なのだ。美鈴千賀子がいなくなったら、輪島クレンジングとセッケンは、止まる。
網ノ目三郎は、おかしいと思っていた。美鈴が入院した病院など、誰も知らないはずだった。退院する日だって知らないはずだった。しかし、退院の時間さえも、ブルーセダンは知っていた。網ノ目三郎の電話を聞いていたのだ。
網ノ目三郎は、よくわからなくなった。ブルーセダンには、大野康子とサングラスのオトコが乗っている。誰が雇っているのだろう。金銭的に、そんなメリットがあるのだろうか。金銭的ではないのだろうか。メンツなのか。大野康子とサングラスのオトコは何者なのだ。

○釜の処方を間違えた

盗聴器のことは千鶴には話さなかった。なぜ話さなかったのか、自分にもわからない。心配をかけたくないのだと思う。
美鈴が慌ててやってきた。
「輪島セッケンの処方を間違えた」
「ギリギリで動いているから心配だ」
「配合を間違えたのですか？」
「間違えるわけないんだけど」
「生産の人達慣れてる」
「どうなるんです？」
「廃棄」
夕方だった。
「クレンジングも間違えた」
「配合間違えたらしい」
「クレンジングは乾燥とかないからいいけど」
網ノ目三郎は、美鈴に案内してもらって、配合室へ行った。詳しく聞いたが、間違えるような手配ではない。
「ここはカギがあるのですか？」

「そんなものはありません」
それはそうだ。
「材料の倉庫はカギがあるのですか？」
「危ないものもあるからカギがある」
「お願いですからここもカギを付けてください」
「今日中にお願いします」
話しは、生産担当の取締役の永田峰雄にも話しがいった。
「いままでカギがないのがおかしい」
永田峰雄の意見だった。
網ノ目三郎は、昨日の夜、工場を出てすぐのところに、消灯したブルーセダンが止まっていたことが気になったのだ。
ブルーセダンは、網ノ目三郎が盗聴器を外したためにやってきたと思ったのだが、ひょっとすると、違う理由だったかもしれない。
疑ったらキリがないが、侵入して、配合釜に何かを混入させることは、昨日までだったらできた。
しかし、はっきり配合間違いだとわかるくらいの異物の混入で良かった。
その夜、網ノ目三郎は、工場内を見回った。はじめてである。いままで、気にもしなかった。
「カギが締まっているかチェックするのですか？」
「今日からはじめてください」
「私がカギの場所を書きますので」
「夜誰もいなくなってからと朝の５時にお願いします」
網ノ目三郎は、すべてのドアを調べた。そして図にした。エクセルにして一覧表にして、チェックできるようにした。網ノ目三郎は、チェリー株式会社の経営企画室長である。守衛さんも、会社に報告しますと言ってくれた。網ノ目三郎も、明日、総務人事部長の横辰八郎に報告しようと思った。
多分、こんなことまでやってくれなくていいのにと言うだろう。しかし、網ノ目三郎は、ブルーセダンが怖いのだ。しかし、今は、横辰八郎にも話せない。

〇輪島ＢＢジェルをつくってくれ

12月10日だった。

「わたし渋谷にいるんだけど」

「真鍋真琴さんに来てくれって言われた」

「売場は混雑してるしいっぱい売れてる」

「輪島ＢＢジェルをつくってくれって言われてる」

「わたしじゃわかんないから美鈴さんに言ってくれって言ったんだけど」

「わたしのイメージにして欲しいんだって」

「千鶴のイメージってなんだ？」

「わたしが使ってるイメージじゃない」

「わたしＢＢクリーム使わないんだけど」

「梅岡玄蕃さんがもうすぐ来るから話しておくから」

「月曜日静岡に行ってもらうから相談して」

「美鈴さんにも電話したから」

「いい？」

「輪島セッケンは今日は１０００個くらい売れると思う」

「１時間売場に立ってくれって言われてる」

「わたしが使ってると思って買っちゃうんだって」

「いい？」

「ブルーセダンは千鶴の近くには現れてないのか」

「わかんない」

「おかしな写真も来てないでしょ？」

「渋谷に来て見てるからね？次のこと考えるから」

「輪島クレンジングと輪島セッケンを潰すことだよ？」

千鶴から、躊躇もなく、すごいことばが飛び出してくる。

「電話ありました～12日の10時にいらっしゃるらしいから用意しておきます」

「用意って何ですか？」

「輪島ＢＢジェルです」

「輪島プラセンタを使うことになると思うので」

網ノ目三郎は、みんなが千鶴に動かされているのだと思った。しかし、ブルーセダンには、そこが見えない。ブルーセダン一味と言ってもいいかもしれない。もし、この現実を知ったら、千鶴が襲われる。千鶴は、よくわかっている。決して表には出ないのだが、チェリー株式会社の渋谷テイストの化粧品を成功させようと思っている。

網ノ目三郎は、まだ未経験だと思ってしまう。

日曜日が待ち遠しい。

「しばらく網ノ目三郎のアパートには行かないから」

千鶴は一度もやってこない。

なかなかお昼にならない。

11時33分になって、待ち切れずに、着替えて、アパートを出た。揚げ物屋にいるはずである。

「サングラスのオトコが来てるから来ないで」

「帰ったらメールするから来て」

網ノ目三郎は、またカギを開けてアパートに入った。サングラスのオトコは、時々揚げ物屋に行く。テイクアウトをしたりしている。揚げ物どんぶりだろう。

急にお腹が空いてきた。

12時20分になった。

「帰った〜平気」

網ノ目三郎は、慌ててアパートを出た。ペコペコになっていた。

「こんにちわ〜」

「いらっしゃい〜今日の日替わりは揚げ物うどんです」

「お願いします」

揚げ物うどんがどんなものかわからなかったが、何でもよかった。千鶴は、元気そうな顔をしていた。キレイだが目立たない服装をしている。

〇輪島セッケン新企画

12月12日だった。網ノ目三郎は、一旦会社に出て、車で静岡駅に向かった。梅岡玄蕃を迎えに行った。

「輪島セッケンは通信販売でどのくらい出ているのですか？」
車に乗って、梅岡玄蕃がいきなり聞いた。
「千鶴さんに聞いたらわからなかった」
「毎日３００くらいです」
「通信販売は全国ベースですが渋谷のファッションビルの化粧品店より少ないんです」
「しばらくこのままの方がいいでしょうね」
「お店を拡大しないことですか？」
「そうです」
「渋谷のみんなに聞いたのですが、渋谷に出た時に20個とか、みんなのために買うのだそうです」
「これでいいと思うから」
「どうしても必要だったら通信販売で売ってるんだし」
「一気に売場を拡大したら売上も増えるかもしれませんけど」
「飽きられるのも一気にやってきます」
「商品は新鮮であることが一番です」
「新鮮を保つためには次々に新しいバージョンを出していかないといけません」
「輪島クレンジングや輪島セッケンのように、売場が限定されていることも、新鮮を保つ秘訣です」
「新鮮は、魅力の大事な要素です」
「魅力は、他に本当のこととオリジナリティと存在感があります」
「なかでも、渋谷コンセプトの若い女性向けの商品では、新鮮が一番大事です」
「輪島セッケンも、バラとかミントとか香りをつけて選択幅を広げた方がいいと思います」
網ノ目三郎は、こういう話しは、聞いたことがない。網ノ目三郎は、電気技師で最近は経営管理者だ。経営や会計が得意になってきた。渋谷テイストなどゼンゼンである。
「今車の中で、梅岡玄蕃さんにいい話しを聞いたので、一緒に聞いてください」

前川芳則と美鈴千賀子と南良子と須藤百合子が一緒にいた。
梅岡玄蕃は、魅力の話しをはじめた。
「新鮮とオリジナルと本当のことと存在感は人でも当てはまるのですか？」
須藤百合子が聞いた。
「パッケージの魅力も同じです」
「もちろん人もです」
「モナリザだって同じです」
「だれにでも当てはめて考えてみてください」
「モナリザは新鮮ですか？」
「モナリザは古いものですがその人にとっては新鮮だと思います」
「モナリザに魅力を感じるのでしたら」
「新鮮と本当のこととオリジナルと存在感のどれか１つあっても、魅力を感じます」
「たとえば、ミッキーマウスもそうです」
「存在感ね」
「ええ」
「モナリザもだ」
梅岡玄蕃の魅力の話しで盛り上がった。
「輪島セッケンにつけられる香りの案をみなさんに送ります」
美鈴が、締めくくるように言った。
話しは早かった。
「輪島ＢＢジェルの話しに移っていいですか？」

〇輪島ＢＢジェル企画
「梅岡玄蕃さんから電話で話を聞いていたので、わたしなりにコンセプトと処方案をつくってみました」
美鈴千賀子が、話しはじめた。
峠下冴子が、話しがあるとやってきた。
「このまま進めてください」
網ノ目三郎は、応接室に向かった。

「あなた無銭飲食のクセあるの？」
「また同じお店から問い合わせが来たわよ？」
「どうして横辰八郎さんじゃないんですか？」
「わたしがたまたまお店に行ったから」
「峠下冴子さんにまたやったと話したのですか？」
「まだ誰にも話してないから」
「やっていませんけど」
「だけど無銭飲食のクセあるんだよね」
「ありません」
「このまま突っ張ったらまずいわよ？」
千鶴の声が聞こえるようだった。
「少しは堪えたフリしないとヤバイわよ？」
突っ張っているように見えるのだろう。
峠下冴子が、どうしてこんなことを網ノ目三郎に言うのかわからない。
「反省はしています」
「あなたわかんないだろうけど、チェリーは静岡では著名なんだからね？」
「無銭飲食なんかしないでよ？」
「わかりましたって言えばいいのよ」
「わかりました」
網ノ目三郎は、おかしいと思った。何かがおかしい。
「輪島クレンジングだけどどうなってんの？」
「売場断られたんだって？」
「あなた責任とるのよ？」
「わかってます」
「どうしようとしてるの？」
「経営会議で報告させていただきますので」
網ノ目三郎は、おかしいと思った。疑いたくはないが、網ノ目三郎の足元の盗聴装置を外したことで、状況がわからなくなったのかもしれないと思った。峠下冴子は、網ノ目三郎が、そう感じたことを知らないだろう。
千鶴だったらどう感じるのだろう。聞いてみたいものだ。
網ノ目三郎が打ち合わせ場所に戻ると、雑談になっていた。

「わたしが試作することにしました」
「なんかないと話しが前に進みませんから」
「よろしくお願いします」
「それから〜今日のことは、試作ができて検証できるまで、社内でも、話さないようにお願いします」
「静岡のスーパーマーケットに断られたりしてうさわにもなっているらしいので」
「わかりました」
全員納得した。網ノ目三郎が、そのことで峠下冴子にクレームをつけられたと思ったようだ。

ブルーセダンとの戦い

〇成形工場でブルーセダンと

峠下冴子に言われたことが気になっていた。お好み焼きを焼いていた。早い時間だった。
テレビが気になることを報道していた。
「輪島クレンジングと輪島セッケンは、渋谷のここでしか売ってないために、みんな並んで買うらしい」
「ラーメンならわかるが、どうして化粧品に」
ほんの短いものだったが、網ノ目三郎は、美鈴千賀子に電話をした。明日輪島クレンジング２００と輪島セッケン１０００を臨時で出す用意をしておいてください」
「朝１番でお願いします」
「今芸能ニュースに輪島クレンジングと輪島セッケンが出ていました」
「前川芳則さんに連絡していいですか？」
「すみません〜美鈴さんになんでも言いやすいので」
確かにそうだった。美鈴千賀子は商品開発者だ。商品の出荷の担当者でもなければ営業でもない。
「今ニュース見てたんだけど」
千鶴から電話だった。
「金型危ないと思うんだけど」
「チェリーの工場ゼンブカギしたんでしょ？」
「成形の会社ってカギどうなってんの？」
網ノ目三郎は、着替えながら話していた。
千鶴のカンはすごいと思っているのだ。網ノ目三郎も感じている。ブルーセダンは、勝ったと思ったのに、おかしなことになってしまったのだ。何をするかわからない。美鈴も、依然として危ない。
網ノ目三郎は、タクシーで輪島クレンジングのボトルの成形工場に向かった。網ノ目三郎が行くことは連絡していない。

証拠はないが、ブルーセダンは、輪島クレンジングの金型に傷をつけた。たまたま、傷がボトルの内側になる部分だった。現在は、そのまま使っている。
工場団地の一角にある。まだ仕事をしている工場もあったが、輪島クレンジングのボトルの成形をしている工場は、真っ暗だった。
網ノ目三郎は、スキー帽子に黒のダウンにジーパンだった。寒い。かなり手前で降りて、工場に向かった。
狭い工場団地の道路だ。横を、静かに、ブルーセダンが追い抜こうとしていた。網ノ目三郎は、予想していなかった。ブルーセダンが金型を襲うかもしれないから来たのだが、自分の横を、静かに追い抜くとは、思っても見なかった。
中がよく見えないが、サングラスのオトコだ。
網ノ目三郎は、少し震えた。心臓が高鳴った。
まさか、網ノ目三郎が、この時間にここにいることなど、想像もできないだろう。
ブルーセダンは、ゆっくり走って、そのまま、成形工場を通り抜けた。左に成形工場がある。網ノ目三郎は、手前の路地を左に曲がって、まだ電気がついている工場に向かうフリをした。成形工場の裏手になる。その路地は、行き止まりになっていた。灯りがある工場は、明りだけで、工場には誰もいない風だった。
網ノ目三郎は、迷った。成形工場の社長に電話するかどうか迷った。ブルーセダンは、必ず、今晩、この成形工場に侵入する。そして、輪島クレンジングの金型を壊す。
しかし、誰も信じないだろう。千鶴以外は、誰も信じない。
懐中電灯も持っていなかった。
網ノ目三郎は、輪島クレンジングのボトルの成形の場所を知っている。思い切って、金網のフェンスを乗り越えた。そんなに難しい金網ではなかった。
そして、輪島クレンジングのボトルの成形場所に向かった。物陰に隠れた。
ひょっとして、監視カメラがあるかもしれないとは思った。ドロボーと思われる。守衛がいないが、警備保障会社が飛んでくる。
何も起こりそうもなかった。

真っ暗である。
しばらくここに潜んでいようと思った。
10分くらい時間が過ぎたと思った。月明かりにサングラスのオトコが金網を乗り越えようとしていた。
網ノ目三郎は、予想が当たった。ブルーセダンは、輪島クレンジングの金型を壊しに来た。網ノ目三郎というより千鶴である。千鶴が、金型が危ないと言った。
サングラスのオトコは、網ノ目三郎のいる成形棟にやってくる。どうするか、考えていなかった。うかつに出て行くと、危険である。網ノ目三郎は、ケンカが強いとは思えない。
こんなに暗いのにサングラスをしている。どうなっているのだろう。
ペンシル型の懐中電灯で何かを探している。
窓を探している。
窓を割って入るつもりなのだろう。
窓を割ると、警備保障に繋がっているかもしれない。
サングラスのオトコは、壁を伝って、工場の屋根に登った。屋根がどうなっているのかわからない。何か、音がしている。屋根の明り取りを外していると思った。このままでは侵入される。
網ノ目三郎は、大きな石を拾って、窓に投げつけた。大きな音がして窓ガラスが粉々になって、緊急信号が鳴りはじめた。警備保障の会社がやってくる。
サングラスのオトコは、屋根から飛び降りて、金網に向かった。アッという間にいなくなった。
網ノ目三郎も、このままではまずい。金網を登って道路に出た。
もう、ブルーセダンはいなかった。

〇天井の明り取り
「会社に来ないで輪島クレンジングの成形工場に行っていただけますか？」
12月13日だった。まだ、ヒゲを当たっていた。美鈴から電話があった。
美鈴も生産担当と一緒に、輪島クレンジングの成形工場に来ていた。

「誰かが工場に侵入しようとしたんです」
「輪島クレンジングの成形をやってる工場棟です」
「金型もありました」
「窓から侵入しようとして石を投げたらしいんです」
「警備保障の会社がすぐに来たんですけど」
「警察へは？」
「連絡はしていないようです」
「こんな大きな石を投げて窓割ったんだけど〜おかしいですよね」
この石は、網ノ目三郎が投げたのだ。
誰も天井の話しをしない。このままではまずい。
「中を見せていただいていいですか？」
「あの天井の明り取りも警備の対象ですか？」
「違います」
サングラスのオトコは、だから天井に登ったのだと思った。窓は調べて、わかったのだ。
「前にも輪島クレンジングの金型が傷つけられていますし、注意した方がいいと思います」
「念のために、あの天井の明り取りも対象にしていただけますか？」
全員、不思議に思った。天井などから侵入しない。
「念のために見ていただけますか？」
警備会社の若い担当者が天井に上がった。
「半分こじ開けてあります」
「雨が降り込みます」
「閉じれますか？」
「やってみます」
「誰かが外から半分こじ開けたものです」
「修理しないとダメです」
天井の明り取りは、修理をして、警備保障の対象になった。
網ノ目三郎しか知らないことだ。サングラスのオトコは、天井をこじ開けて侵入しようとしていた。網ノ目三郎が石を窓ガラスに投げたのだ。
「そろそろ帰りますけど」

美鈴が呼びに来た。
網ノ目三郎は、シュミレーションしていた。サングラスのオトコのやりそうなことだ。
侵入できないかもしれない。
「個包装のセッケンはどうやって成形しているのですか？」
「治具をつくっています」
網ノ目三郎は治具なることばを知らない。
「金型みたいな大がかりじゃないけどカタチにしないといけないから」
「どこでやっているのですか？」
「チェリーの工場です」
チェリーの工場は、網ノ目三郎が見回って、警備を頑丈にした。
前川芳則から電話だった。
「渋谷に一応用意していた輪島クレンジング２００と輪島セッケン１０００を臨時で出します」
「よろしくお願いします」
やはり、予想通りなのだ。
サングラスのオトコが、このまま黙っているはずがない。何かをやってくる。ゼンゼン見当がつかなかった。

〇宣戦布告

12月14日だった。会社に向かっていた。右の歩道を歩いていた。ずっと、ブルーセダンが、車道の左にいた。止まっては、しばらくすると、網ノ目三郎の横に来る。ついにやってきたと思った。とうとう、網ノ目三郎を襲うしかなくなったのだ。
網ノ目三郎を襲っても。輪島クレンジングと輪島セッケンは止まらない。よくわかっているはずだ。美鈴千賀子を襲っても、止まらない。
金型を襲えば止まるのだが、ガードが固くなった。
網ノ目三郎は、そのまま、会社に入った。ブルーセダンは、いつの間にかいなくなった。
帰りが心配である。網ノ目三郎は、バスに乗れないのだ。無銭飲食事件以

来、バスには、乗れない。みんな、コソコソ話してしまう。
ブルーセダンに狙われることは、それはそれで、困ったことになる。
ブルーセダンは宣戦布告をしている。
「帰りは右の歩道を歩いて」
千鶴から短いメールが来た。
どこからか見ていたのだろう。
千鶴は、ブルーセダンが、網ノ目三郎に宣戦布告をしていることを理解している。
食堂でお昼ごはんを食べていた。いつものように、少し遅い。無銭飲食事件以来、大勢の前では食べにくい。
メールが来た。千鶴だと思った。
しばらく来なかったが９回目の写真だった。千鶴の写真ではなかった。朝網ノ目三郎が歩いている写真である。ブルーセダンから撮ったものだ。ついに、ターゲットが網ノ目三郎になった。
喫水の時は、よくわからなかった。自分がターゲットになっていることすらも、よくわからなかった。よく生き延びたと思う。今度のように襲ってくる犯人がはっきり見えていると、少しは、やりやすい。
しかし、意味がよくわからない。
ハンバーグのお昼ごはんを食べながら、千鶴に、転送した。
「ひょっとしたら戦わないとムリかも」
意味深長な短いメールが返ってきた。
網ノ目三郎はケンカが得意ではない。千鶴に戦えと言われても難しい。
帰りは、暗くならないうちにスーパーマーケットまで着こうと思った。千鶴に言われたとおり、右の歩道を歩いた。右の歩道を歩くのははじめてである。何か、近道ではない気がする。
確かに、ここに車が突っ込むには、前から来るしかない。いままでゼンブ、後から突っかけられている。後から来るには、逆走しないといけない。
スーパーマーケットまで、ブルーセダンは見えなかった。豆腐ハンバーグをつくろうと思った。
チラッと、ブルーセダンンが見えた。遠くに駐車している。アパートまでは近い。襲われることはないだろう。

しかし、ブルーセダンに襲われることがわかっているのだが、自分でしか守れないのは、なんとも辛い。警察に話しても、意味がわからないだろう。「大丈夫ですか？」と言われるかもしれない。また身元照会をされたら困る。

〇逆走して襲ってきた

「12月23日に、クリスマスセールで１時間店頭に立ってくれって言われてる」
12月15日朝、千鶴からメールがあった。
「一緒に行きます」
「危ないけど」
網ノ目三郎は、かまわないと思った。
今日も、輪島クレンジング２００と輪島セッケン１０００を、臨時で配送する準備をしている。前川芳則は、売場を増やしたくてたまらない。掛け算をしてしまう。10ヶ所になったら10倍だと思ってしまう。
「そしたら富士山より高くなってしまいます」
「売上は結果ですから目指すべきものではありません」
網ノ目三郎は、先里万丈の『売上を目指すと滅びる』を受け売ってしまう。
「通信販売もあるからいいか」
前川芳則は、どうして全国ベースの通信販売の売上が伸びないのか、考え込んでしまう。
「最近帰りが早いんだって？」
峠下冴子が言った。
「おさきに～」
曖昧な返事をして、網ノ目三郎は、会社を出た。少し歩いたところで、バスに抜かれた。バスの後に、ブルーセダンがいた。ブルーセダンは、網ノ目三郎と歩調を合わすかのように、止まったり動いたりしている。
こんなことをしても、輪島クレンジングと輪島セッケンは止まらないのにと思ってしまう。
どうしてブルーセダンが、網ノ目三郎が帰る時間ピッタリにくっつけるの

か、それも不思議だった。盗聴装置は取り外しているのに、なにかおかしい。
「後から来る」
千鶴から電話だった。
網ノ目三郎は考え事をしていた。工事中だった。少し車道に出たのだが、前から車は来ていないことは確認していた。網ノ目三郎は、工事中のマンホールのような穴に跳んだ。１秒もなかった。片足が工事中の穴にはまった。ひょっとして、片足がいかれたかもしれないと思った。ブルーセダンは、そのまま逆走して走り去った。まさか、逆走して襲ってくるとは思わなかった。千鶴の電話がなかったら跳ばされていた。頭を、柱に激突させて、終わりだったかもしれない。
股関節が折れたのではないかと思った。左の股関節だ。
おかしなカッコウで穴にはまったのだ。
近くに千鶴がいることはわかっていた。穴に座って、様子をうかがっていた。何も起こってはいない。フツウのように時間が流れていた。
「どうしたの？立ち上がれないの？」
「股関節が折れたかもしれない」
「簡単に折れるもんじゃないから立ち上がってみて」
「ブルーセダンは先の交差点で左に曲がって走っていった」
「もういないから」
「バッグがない」
「２９０円の透明ファイル？」
「３９０円だ」
「車道にあるけどひかれちゃう」
慌てて網ノ目三郎は、起き上がって透明ファイルを探した。
「立てるじゃない」
「わたし行くから」
「そこの穴のとこキチンとしとかないとおじさんに怒られる」
穴に落ちないように板がおいてあった。２枚が外してあった。そこにはまってしまった。
これはタイヘンなことだ。もし千鶴がいなかったら、明日の朝、交通事故で

死亡記事だ。
ブルーセダンは、車道を逆走してまで、網ノ目三郎を襲ってきたのだ。
それにしても、千鶴はなんだろう。不思議である。多分、もうお母さんのいる病院に向かっているだろう。

〇バラとオレンジとミント
梅岡玄蕃がやってくる。10時から打ち合わせである。輪島セッケンの香りバージョンを検討する。
12月20日だった。
「タクシーで行きますから迎えに来ないでいいです」
網ノ目三郎は、土曜も日曜も一歩も外に出なかった。昨日も、少し遅くなって、車の多い時に歩いて会社に行った。帰りも少し早目に歩いて帰った。
何も起こらなかった。
すごい注意をしているのだ。
逆走して網ノ目三郎を襲ったのだ。ブルーセダンの意思は固い。しかし、輪島クレンジングと輪島セッケンは、クリスマスが近いせいか、売上が好調である。次第に、チェリー株式会社の中でも、存在感を大きくする。
ただ、網ノ目三郎は、次第に落ち込んできている。できるだけ、静かにしている。日曜日に、千鶴のいる揚げ物屋にも行かなかった。
このままではまずいのだが、どうしたらよいのかわからない。
「バラとミントとオレンジでいいですか？」
「渋谷の彼女たちが選んだ香りですが」
梅岡玄蕃は、美鈴から試作を送られてきて、彼女たちにモニターしているのだ。網ノ目三郎は知らなかった。
「１００ｇの方も、この香りにして別売りをしてください」
南良子がいきなり言った。
「ああ〜それがいいと思います」
梅岡玄蕃が、気がつかなかったという素振りをした。
「じゃ〜パッケージ検討していいですか？」
「網ノ目三郎さんいいですか？」

「お願いします」
みんな、網ノ目三郎が元気がないことを知っていた。しかし、理由は誰も知らない。網ノ目三郎は、恐いのだ。
「駅まで送ってくれますか？」
梅岡玄蕃が言った。
「すごく難しい局面になっています」
車に乗って、梅岡玄蕃は、いきなり話しはじめた。
「網ノ目三郎さんは周辺が襲われるより自分が襲われる方が気がラクなはずなんです」
「あなたが何もしなくても仕事は進みます」
「自分が何かしなければなどと考える必要はありません」
「通常は、ここで変革者が動き過ぎて隙を与えてしまうのです」
「自分が狙われているのに自分を守らない」
「結局、みんなに迷惑がかかります」
「このままでは、気が滅入ってしまうと思うでしょうが、いつか勝負できるチャンスがきます」
「チャンスを待つのです」
「戦ったら負けます」
「勝負は１回で決めないといけません」
「あなた以外に、誰も、この戦いに参加することができません」
「美鈴さんも襲われたのですが交通事故だと思っているでしょう」
「網ノ目三郎さんとブルーセダンしか知らないことなのです」
網ノ目三郎は、黙って梅岡玄蕃の話しを聞いていた。
梅岡玄蕃が、どうしてここまで知っているのか、わからない。

〇クリスマスセール

12月23日だった。ここのところ、アパートでじっとしている。まだ早朝で暗かった。目立たないようにアパートを出た。タクシーがなかなか見つからない。呼ばないと難しいかもしれない。バスが来てバスに乗った。
こんな早朝にバスがあることなど知らなかった。祝日である。

多分、真鍋真琴にも会うことになる。おかしなカッコウでは行けない。千鶴とも、親しくするのはまずい。網ノ目三郎が最も怖いのは、ブルーセダンに千鶴が襲われることだ。
クリスマスだ。新幹線も混んでいる。自由席にかろうじて座れた。千鶴は、もう出かけているのだろうか。よくわからない。
向こうから千鶴が歩いてきた。
千鶴ではない。多分、大野康子だ。千鶴にどことなく似ている。あの写真のオンナに違いない。８回も送られてきた写真のオンナだ。見覚えがある。
しかし、どうして網ノ目三郎に見えるようにやってくるのだろう。大野康子がいるということは、サングラスのオトコがいるのだ。
千鶴はどうしたのだろう。千鶴を見られていなければいいのだが。
網ノ目三郎は、考えた。
「大野康子が同じ新幹線に乗っている」
「多分サングラスのオトコも乗っている」
「千鶴は大丈夫なのか」
すぐに返事が来た。
「もう渋谷のお店にいる」
「まさかこんな早い時間だから」
すぐに返事を返した。
「千鶴がどこにいるか知られたくないから渋谷には行かないかもしれない」
「あなたが渋谷以外でなんか用事があると思う？」
「考える」
困ったことになった。
「あなたなに考えてるの？」
「サングラスのオトコが狙っているのはあなた」
「電車とか突き落とされないように」
千鶴は20歳である。網ノ目三郎は27歳だ。お姉さんのようだ。網ノ目三郎よりも、はるかに辛い人生を過ごしてきた。どうしても千鶴を守りたい。強く想ってしまう。
それが良くないのかもしれない。見えてしまうことが良くない。だから写真を送られる。嫉妬に狂って無銭飲食者にされてしまう。

品川駅を出ようとした。
メールが来た。
10回目の写真である。網ノ目三郎の新幹線の座席に座っている写真である。
今日は、ゼッタイに襲われる。
「なんでわかってて渋谷に行くの～」
千鶴は、きっとこう言う。
網ノ目三郎は、品川の駅中のレストランに入った。落ち着かないといけない。
大野康子が入ってきてサングラスのオトコが入ってきた。網ノ目三郎はコーヒーを飲みはじめた。
サングラスのオトコが、いきなり、網ノ目三郎のファイルを持って走った。
網ノ目三郎は、無条件でサングラスのオトコを追った。
「あの人無銭飲食の常習犯です」
大野康子の大きな声がした。
レストランの若い店員が追って来たような気がした。
おかしなことになったのだ。追っているのは、網ノ目三郎なのだが、網ノ目三郎がレストランの店員に追われている。
いきなり足払いをされて、網ノ目三郎は倒れた。
「ダメだよ～こんなことしちゃ～」
たまたまいた警察官だった。
「サングラスのオトコが私の透明ファイルを持って逃げたから追っただけです」
誰も、網ノ目三郎が透明ファイルを持っていたことを知らない。
警察署まで連れて行かれて事情を聞かれた。誰も、透明ファイルを盗まれたことに触れようともしない。確かに、大事なモノは何も入っていない。先里万丈『ヒット商品』が入っているだけである。
「どうしたの？電車にでも突き落とされたの？顔見せないけど」
15時になって千鶴からメールがあった。
「はめられた」
「警察署からいま出た」
「もしもし～どうしたの？」

「品川の駅中のレストランでファイルを盗まれた」
「２９０円の？」
「３９０円です」
「それで警察にお願いしたの？」
「追いかけたら大野康子が無銭飲食の常習犯だと言ったんです」
「捕まったのか」
「たまたま警察官がいた」
「品川の警察署に連れて行かれたのか」
「ファイルはどうしたの？」
「戻ってきません」
「そっちはどうですか？」
「もう帰る〜もう品切れちゃう」
「それはいいんだけど〜明日うさわ流れるな〜」

○とんでもないイヴ

12月24日だった。とんでもないイヴになった。土曜日で休みだった。
「こんな写真がチェリーのホームページに送られてきました」
横辰八郎からメールがきた。。品川の警察署から網ノ目三郎が出てくる写真である。品川駅中で警察官に捕まっている網ノ目三郎の写真である。
「ニュースにならなかっただけ良かったです」
「無銭飲食は病気ですか？」
「はめられました」
峠下冴子からもメールがきた。
「チェリーの社員はみんな恥ずかしいんだから」
「自分で考えて」
「あなた何なの？」
峠下冴子は怒っている。
さんざんなイヴになってしまった。
網ノ目三郎は、昨日は、最初から仕組まれていたことに、やっと気がついた。

網ノ目三郎の無銭飲食の常習者は、定着した感がある。峠下冴子は辞表を書けと言っている。
網ノ目三郎の本籍の湯本化学にも写真が送られているだろう。神部五郎はどうするのだろうか。
なんでもないことだった。サングラスのオトコが網ノ目三郎のファイルを持って走ったのだ。網ノ目三郎は追った。
「あの人無銭飲食の常習犯です」
大野康子が叫んだ。
完璧だった。
人は、こういうふうに流れるのだ。
「外に鳥あるから焼いて」
「こんなことで萎れるくらいだったら輪島クレンジングとかセッケンに手を出さないで」
網ノ目三郎は慌ててドアを開けた。
いつも行くスーパーマーケットの袋が掛けてあった。
まだ18時だった。
「最終の新幹線に乗った」
「わたし真鍋真琴さんに呼ばれた」
「あなたの写真が送られた」
「輪島クレンジングと輪島セッケンを止めるように上司に言われた」
「真鍋真琴さんはわかってくれたけど上司がわかんない」
「危険な状態になってる」
千鶴からのメールである。
19時くらいの新幹線んで渋谷に行ったのだ。
「申し訳ない」
網ノ目三郎には、ことばがなかった。
こうなるとは思わなかった。網ノ目三郎を襲っても、輪島クレンジングと輪島セッケンは止まらない。しかし、無銭飲食の常習犯だったら、輪島クレンジングとセッケンは止まる。
タイヘンなことになった。

〇25日の勝負

「今日は輪島クレンジング３００に輪島セッケン３０００売ると約束したから朝からやってる」
「今日成功したら許してくれるかもしれない」
「売場だから売れるもんがいい」
「揚げ物屋さんも忙しいからあなた皿洗いの手伝いやって」
「連絡してあるから」
「余計なことしないでいいから皿洗うだけやって」
「揚げ物屋もクリスマスで忙しい」
朝の８時に、千鶴からメールが来た。12月25日だ。千鶴は賭けに出た。これだけ売るから助けてくれをやったのだろう。
網ノ目三郎は、揚げ物屋に電話した。すぐ来てくれである。揚げ物屋も、忙しい日曜日で、しかもクリスマスなのに、千鶴がいないのだ。何も食べていないし顔も洗ってなかった。揚げ物屋に向かった。
「クリスマスセールで10%引きにする」
「お昼に輪島クレンジング２００と輪島セッケン２０００を臨時に出す」
前川芳則からのメールだった。
網ノ目三郎は、もうクタクタだった。なんたって、お腹が空いた。何も食べていない。12時になる。
「働き者だって揚げ物屋が言ってました」
「上出来です」
短いメールが千鶴からきた。18時だった。今日は、夜までいいか聞かれていた。
夜20時になっていた。
12時間皿洗いをやった。途中で、ネギを切っておいてくれと頼まれた。
「料理はしたことがあるんですか？」
厨房のお兄さんに褒められた。
「どうもごくろうさまです」
「これを持って帰ってください」
「夜の賄いです」

「今日の報酬はどうしましょう」
「千鶴さんにお願いします」
「わかりました」
網ノ目三郎は、12時間も厨房にいた。クタクタだったが、満足感があった。
お湯を沸かして、インスタントの味噌汁にして、揚げ物どんぶりを食べた。
ホントに、ペコペコだった。
千鶴から電話があったのは、22時を過ぎていた。
「ブルーセダンは渋谷が止まると思ってる」
「でも今日真鍋真琴さんの上司も感心してくれて約束してくれた」
「あなたじゃなくてわたし」
「渋谷の輪島クレンジングと輪島セッケンは止まらない」
「わたしがやってることをブルーセダンは知らないから油断しないで」
「渋谷は平気ですとか言わないで」
「あなたは黙ってて」
「晩ごはん食べたのですか？」
「品川でお弁当買った」
「感謝してます」
「明日月曜だけどあなたシンドイからね？ガマンしてよ？」

〇針のむしろ

「この写真は何ですか？」
美鈴千賀子は、なみだを溜めて網ノ目三郎に迫った。
「今は、私を信じてくださいとしか言えません」
「私は無銭飲食者ではありません」
「この写真は何ですか？」
美鈴千賀子は、なみだを溜めたまま、実験室に向かった。
前川芳則もやってきた。
「真鍋真琴さんから輪島クレンジング１０００と輪島セッケン１００００発送してくれという電話がありました」
「暮れの休みに切らしたくないのだそうです」

「網ノ目三郎さんは何をしているのですか？」
前川芳則は、まったく理解できないだろう。当然だ。千鶴が救世主をやってくれているのだ。しかし、チェリー株式会社の社員は、そのことを誰も知らない。千鶴も知られたくない。
「神部さんにもお知らせしました」
横辰八郎がやってきて言った。
網ノ目三郎は、何もことばを発しなかった。横辰八郎は、網ノ目三郎が湯本化学に呼び戻されると思っているようだった。もう、明日かもしれない。網ノ目三郎も、何があっても、仕方がないと思ってしまう。はめられたのだ。修復するチャンスがない。梅岡玄蕃は、必ずチャンスが来るからと言ったが、チャンスは、来る気配がない。幸いなことに、輪島クレンジングと輪島セッケンは、千鶴が救世主になっている。
網ノ目三郎は、お昼を食べに行けなかった。食券を出さなかったわけではない。有吉里子は、網ノ目三郎の顔も見ずに、食券を受け取った。
「喫水だけにしておけばよかったのに」
峠下冴子がやってきた。
「喫水はわたしが受け継ぐから心配しないでいいから」
「わたしが名前つけたからわたしがやったでいいよね」
「輪島クレンジングと輪島セッケンは余計だったわよ」
どういうわけだか、峠下冴子は、終わったかのような言い方をした。
「どうしたの？」
「ごはん食べないとふんばれないよ？」
千鶴からのメールだった。
「ごはん食べてきます」
網ノ目三郎は、食堂に向かった。
マーボ豆腐どんぶりだった。
千鶴が自動販売機に向かった。
「わたしを信じて」
網ノ目三郎は、おかしいと思った。網ノ目三郎は、千鶴を信じていないわけはない。千鶴だってよくわかっている。どういう意味だろうか。
午後からも、針のむしろだった。誰も、網ノ目三郎に話しかけない。美鈴

も、実験室に入りっぱなしで、出てこない。

〇あなたは消えない

12月27日だった。
「15個入り３００円の輪島セッケン個包装の10セット売りが、いきなり３０００セット出ます」
「今日の出荷です」
「ネット販売です」
前川芳則が朝来て言った。
「渋谷のお店の評判です」
いきなり通信販売に流れがやってきた。前川芳則は興奮していた。網ノ目三郎は、神部五郎から電話があると思っている。今日で終わりである。峠下冴子も、すでに、終わったかのような言い方をする。
お昼まで、何も起こらなかった。神部五郎からも電話がない。
「真鍋真琴さんから連絡があった」
「どうして無銭飲食者の商品を販売しているのか」
「無視することにしたらしい」
「真鍋真琴さんに迷惑かかるからそろそろ勝負しないといけない」
勝負するとはどういうことだろうか。ゼンゼンわからない。
千鶴の顔を見たくて、食堂へ向かった。
みんな、一斉に網ノ目三郎を見た。無銭飲食の常習犯になっている。品川の警察官に取り押さえられた。すごい写真である。
千鶴は、仲間と話しをしているようだった。網ノ目三郎を見ない。カツカレーライスだった。
不思議なことに、千鶴からメールがきた。千鶴は、仲間と話している。
「あなたは消えないから」
「あなたを無銭飲食の常習者にすれば終わりと思ったかもしれないけど」
「ブルーセダンはあなた襲うから」
千鶴は、テーブルの下からメールを打っている。パソコンの先生なのだ。何でもできる。

「あなたは消えない」
これは何だろうか。
さっぱりわからない。
お昼から、誰も来ない。ヒマでもある。網ノ目三郎は考えた。
「あなたは消えない」
ブルーセダンは、必死になって網ノ目三郎を消そうとしている。無銭飲食者にすれば、フツウは消える。会社だったら消える。その無銭飲食者がやっている輪島クレンジングと輪島セッケンも消える。フツウは消える。
しかし、誰も知らないが、千鶴が１人で戦っている。
渋谷のお店は、網ノ目三郎ではなくて、千鶴を信じて販売している。網ノ目三郎は消えても関係ないのだ。
ブルーセダンは、千鶴のチカラを知らない。チェリーの社員も、誰も、千鶴のやっていることを知らない。
不思議な状態なのだ。
ブルーセダンが知ったら、ブルーセダンは、千鶴を襲う。リスクが大きいことは確かだ。
「あなたは消えない」
千鶴のメールの意味がわからない。
今日は、神部五郎から何もなかった。
「おさきに〜」
峠下冴子が遠くから不思議そうな顔をした。

○またブルーセダンが逆走した

10時から今年最後の経営会議があった。神部五郎もやってきた。網ノ目三郎も、喫水の状況と輪島クレンジングと輪島セッケンの状況を説明するように言われている。準備は、万全にやってきた。
「あなたは消えない」
千鶴の昨日のこの言葉が励みになった。
10時まで誰もやってこなかった。
10時からはじまったのだろう。網ノ目三郎は、よくわからなかった。経営会

議は、横辰八郎が議事をやっている。
多分、網ノ目三郎の品川での無銭飲食事件が話題になっているだろう。もしかして、神部五郎が、湯本化学に引き上げさせると言ったかもしれない。
「網ノ目三郎さんお願いします」
横辰八郎から電話があった。
「喫水ですが、システムは、完全に落ち着きました」
「バグもなくなったと思います」
「ご存じのように、毎日昨日の状況がわかりますので、運営がやりやすくなっています」
「湯本化学にジャンプしてもらっている１億２千万円も、２月には支払いができると思います」
「峠下冴子さんの努力も実っています」
峠下冴子は、網ノ目三郎が自分のことを持ち上げたことに、満足そうな顔をしていた。
「輪島クレンジングと輪島セッケンですが、渋谷のファッションビルの化粧品店だけで販売していますが、12月１日から輪島クレンジングが６０００個輪島セッケンが３００００個です」
「一見売場を増やすと、もっと売上が増えると思われがちですが、希少価値もあって、今のところは、値崩れもしないのだと思っています」
「通信販売が昨日だけかもしれませんが、輪島セッケンの10個入りセットが、３０００出ました」
「通信販売もやっと流れが来たのかもしれませんが、まだ安心はできません」
「現在は、新しい化粧品の開発を急いでいます」
山上郁夫と山上一郎は、輪島クレンジングと輪島セッケンの販売状況を知らなかった。通信販売が跳ねたのは昨日である。誰も知らない。
「いろいろ状況としては苦難が続いていますが、ひょっとすると、チェリー株式会社は、蘇るかもしれない」
「みんなで、苦難を乗り越えていただきたい」
神部五郎が、社長のような言い方をして、喫水と輪島クレンジング輪島セッケンの、網ノ目三郎の報告を終えた。

網ノ目三郎は、ある意味覚悟ができていた。拍子抜けした。無銭飲食常習犯が、もっと取り上げられるかと思った。表面的には、何もない。
お昼だった。
美鈴が心配そうに実験室から帰ってきた。経営会議があるのを知っている。無銭飲食事件がどうなるか、心配なのだ。美鈴だけではない。みんな遠くから網ノ目三郎を見ている。ひょっとすると、明日には、網ノ目三郎はいなくなるかもしれない。
食堂に向かう網ノ目三郎を美鈴は見ていた。何も言わない。複雑なのだ。美鈴にとっては、網ノ目三郎の無銭飲食常習者は信じられないことなのだ。しかし、品川の警察官に取り押さえられている写真がある。ぶざまな写真である。
「ブルーセダンはあなたをやるしかない」
短い千鶴のメールだった。
かぼちゃの煮物とひじきの煮物だった。
かぼちゃの煮物をこれだけの数煮るのはけっこうタイヘンだろうと思う。すごくおいしい。
千鶴は、ブルーセダンの無銭飲食作戦は成功したのだが、網ノ目三郎を、ギリギリ潰せなかったと思っているのだろう。もう、やるしかない。サングラスのオトコに刺されるのか。そんなことはない。事故に見せかけるに決まっている。
４時になって、美鈴が机に座った。
「今日通信販売の注文はどうですか？」
「パンクしてるそうです」
それだけだった。
定時で帰るのだが、暗い。
バスよりも先に歩きはじめた。
右側の歩道を歩こうと思った。
峠下冴子から電話だった。
「今日の議事録横辰さんから送ってきたんだけど」
「いまいい？」
「わたし修正しようと思うの」

「私まだ見ていませんから明日でいいですか？」
千鶴が割り込んできた。
「後から来る」
網ノ目三郎は後を見ずに、歩道の端に跳んだ。壁である。２メートルは跳んだ。我ながら驚くほど跳んだ。一瞬だった。
「すみません〜修正した箇所のメールをいただけますか？」
「なにやってんの？」
「帰りの途中です」
ブルーセダンが、また逆走したのだ。赤信号を突き抜けて、その先のカーブを左に曲がって、そのまま消えた。
網ノ目三郎は、冷静にブルーセダンの後を見ていた。
「だれからの電話だったか覚えておいて」
千鶴のメールがきた。
まさかとは思う。

〇年末輪島化粧品
10時に梅岡玄蕃がやってくる。
お昼からは大掃除である。
「バラとミントとオレンジの試作です」
「パッケージはまだできていませんので、現在のパッケージです」
「いまの香りはなんですか？」
「原料の匂いそのままです」
「たまたまだけどワルイ匂いではありません」
「これはこのまま販売を続けたらいいかと思います」
「網ノ目三郎さんいいですか？」
美鈴が聞いた。網ノ目三郎が何か言わなければ何も決まらない。
「パッケージデザインですけど」
「まだ案です」
「３パターンあるから選んでください」
「渋谷のモニターに任せていいですか？」

須藤百合子と梅岡玄蕃が、正月休みのどこかでモニターをすることになった。
「１００ｇの方もお願いします」
「わかりました」
須藤百合子は、どこも行かないから平気だと言った。
「輪島ＢＢジェルの試作ができてます」
「使ってもらいたいのですが」
「わたしは毎日使ってます」
「グッドです」
美鈴は、全員に、小さな試作ボトルを渡した。開けてみると、トロッとしたジェル状になっていた。香りはバラだった。
「私がパッケージのモニターと一緒にやってもいいですか？」
須藤百合子が言った。
「よろしくお願いします」
「１月２日でいいですか？空いてますか？」
梅岡玄蕃が須藤百合子に言った。
「平気です」
「網ノ目三郎さんはゆっくりしてください」
須藤百合子は、また品川で無銭飲食があると困るのだ。自分が渋谷に行きたい。
輪島化粧品のプロジェクトは、高ぶるわけでもなく、フツウに進行している。誰も、いくら売りたいと言い出さない。フツウは、網ノ目三郎が言うのだろう。前川芳則が言うのだろう。２人とも、数字を言わない。
網ノ目三郎は毎日のように危ない目に合っている。
「来年もよろしくお願いします」
「食堂でみんな集まってあいさつをした」
少しお酒が入る。
多分、このまま静岡の繁華街に出る若者も多いだろうと思った。網ノ目三郎もまだ27歳で若者だが、ゼンゼン違う生活である。
網ノ目三郎は、狙われているのだ。胃が痛い。プレッシャーがある。
美鈴と一緒に会社を出る。

「三枝さんよろしくお願いします」
「どうぞごゆっくり」
ここのところ。網ノ目三郎には、ゆっくりしてくださいの声がかかる。フツウではない。
網ノ目三郎は、また右の歩道を歩いた。バスの方が安全だ。わかっているが、無銭飲食者は辛い。バスには乗れない。

〇大晦日に襲われた
「わたし揚げ物屋でずっとアルバイトしてるから」
千鶴からメールがきた。
千鶴は、ずっと、こういう生活を続けてきているのだろう。とにかく働くのだ。あれだけの美人だから、何かに応募すれば、もっと稼げる仕事もあるのだろうが、揚げ物屋で、暮れと正月にアルバイトをしている。チェリー株式会社の休みの時に、アルバイトをしているのだ。
お母さんから離れられない。離れようとしない。
千鶴は、網ノ目三郎との距離感を、微妙に、うまく保っている。網ノ目三郎と一蓮托生になってしまうと、お母さんの、メンドーが見られなくなってしまう。自分が狙われると困るのだ。
そうかといって、網ノ目三郎を見えないところでバックアップしている。網ノ目三郎を助けたいのだ。
網ノ目三郎は、ブルーセダンから狙われている。アパートに籠っている。外出もしない。スーパーマーケットでおもちを大量に買い込んで、朝も昼もおもちにしている。それとラーメンだ。ブルーセダンには会っていない。
「輪島クレンジングと輪島セッケンの通信販売がパンクしている」
「落ち着くまで出勤しています」
前川芳則からメールがきた。
「よろしくお願いします」
通信販売はお正月だからといって休むわけにはいかない。お正月の方が注文が多い。
「モノは大丈夫ですか？」

「生産は正月３日間だけ休みます」
網ノ目三郎は、こういうことをよく知らない。品川の無銭飲食事件以来、細かいことを、網ノ目三郎に言わなくなった。
網ノ目三郎は、大晦日だが、揚げ物屋が営業しているのを知っている。
「こんんちわ〜」
フツウならば、千鶴の声がするのだが、オーナーがやってきた。
「なんにしましょう」
「今日の定食でお願いします」
「承知しました」
メールがきた。
千鶴の写真である。車に乗るところだ。どういう意味なのだろう。
前川芳則から電話がきた。
「倉庫から火災です」
「すぐ来てください」
「すみません〜食べられなくなりました」
「千鶴さんはいないのですか？」
「今日は急用だと言って帰りました」
網ノ目三郎は、いきなりパニックになった。
とにかく、会社へ急がないといけない。
一瞬、何かが後からぶつかったような気がした。スローモーションを見ているようだった。空中を飛んでいるのだ。左の街路樹にぶつかる。
ながい時間が経過したような気がした。網ノ目三郎は、街路樹の下に倒れていた。
大晦日で人が多いのに、誰も来ない。倒れているのだ。街路樹にぶつかった。頭の左が痛い。触ると、腫れてきていると思った。脳内出血をしているかもしれない。
倉庫はどうなったのだろう。千鶴は誘拐されたのか。
網ノ目三郎は、立ち上がってみた。左の目に血が入ったと思う。流れている。ハンカチが赤くなる。
前川芳則のケータイは通じない。
千鶴のケータイも通じない。

網ノ目三郎は、スーパーマーケットまで急いだ。
「お母さんが危篤だって言われたけどウソだった」
「あなた大丈夫？」
網ノ目三郎は、いきなり、気を失った。
「救急車をお願いします」
前から歩いてきた人に言った。
ケータイは、気を失っても離せないと思った。
どれくらい時間が経ったかわからない。
網ノ目三郎は、すごい勢いで起き上がった。ベッドだった。火事なのだ。倉庫に行かないといけない。
「ダメだよ〜何してんの？」
千鶴だった。
「あなたのケータイ見てわたしが倉庫行った」
「消防車も来たけどそれより前にみんなで消したって」
「段ボールの倉庫」
「みんなそのまま仕事してるから平気」
「段ボールの会社から運んできた」
「あなたをやるためにみんな仕組まれた」
「わたしにも会社にも」
「あなたがパニックになる方法を知ってる」
「ブルーセダンだよね」
「あなたが12時30分に揚げ物屋に来るのを知ってる」
「私はどうなったんですか？頭は？」
「何もない平気」
「今跳び起きたけど何もないの？痛いとこないの？」
「左の頭」
「それだけ？」
「ええ」
千鶴は、自分の小さな鏡を出した。
頭に包帯がグルグル巻きにされていた。
「何時ですか？」

「９時〜夜の」
「電話がいっぱい入ってる」
「ごはん食べられるの？」
「ええ」
「コンビニ行ってくる」
網ノ目三郎は、美鈴にも、前川芳則にも、横辰八郎にも、神部五郎にも電話をした。網ノ目三郎が車に飛ばされたことを、みんな知っていた。
千鶴は、大盛りのインスタントラーメンを買ってきて、自分も食べた。２人で、病院のベッドの横で、インスタントラーメンを食べた。
「明日おまわりさんが来るから」
「ここ動くとまた危ないからね」
「わたし揚げ物屋だから」

〇勝負しないといけない
正月なのに、病院のベッドだった。
「車をゼンゼン覚えてないのですか？」
「飛ばされたところからしか覚えていません」
聞き込みをしてくれているようだが、網ノ目三郎が飛ばされるところを、見た人がいない。網ノ目三郎が、自動車に飛ばされたと言っているだけだ。
「お昼食べてる」
「揚げ物屋の賄い」
「ブルーセダンは、もうフツウではない」
「あなた殺ったところで輪島クレンジングは止まらない」
「もう殺らないとおさまらない」
「勝負するしかなくなってきてる」
短いメールだったが、意味は、よくわかる。千鶴を連れ出して倉庫に火をつければ、網ノ目三郎はパニックになる。簡単に、やれる。もう、網ノ目三郎を殺ってしまうことが、目的になっている。
「大野康子さんはこの近くですか？」
「私の車に財布を忘れたらしいのでお届けしょうと思いまして」

「以前に、ここで車検をやっていると聞きましたので」
正月なのに、半分開けていた。事故が多いのだろう。
「そこの８階建てのマンションの２階だ」
急いでいるのだろう。網ノ目三郎の顔も見ずに教えてくれた。
網ノ目三郎は、頭の包帯をとっていた。
網ノ目三郎は途中の１００円ショップで買ったサングラスに帽子をかぶった。とても合計３００円には見えない。
駐車場に行った。ブルーセダンだった。おかしな雰囲気である。昨日自分を街路樹の上まで飛ばして頭から血を流させたブルーセダンがここにある。
証拠はないが、このブルーセダンに違いない。ナンバーもこれだ。
網ノ目三郎は、２階の２０２の部屋に向かった。大野康子の部屋だ。足音がしないように、２０２号室を通った。いきなり２０２号室が開いた。網ノ目三郎は振り返らずにそのまま歩いた。
急いでいるようだった。バタバタと駆けだして駐車場に向かった。２階の影から駐車場を覗いた。サングラスの男だった。
ブルーセダンは、出て行った。
ひょっとしたら、コンビニかもしれない。
網ノ目三郎は、帽子でドアを回してみた。
カギがしてなかった。
すぐに帰るからカギをしていない。
網ノ目三郎は、中へ入った。靴を持って入った。帰ってきたらベランダから出ようと思った。カギをした。時間を稼げる。
10畳ほどのフローリングの１フロアーだった。ベッドがあって、机があって、キッチンがあって、風呂場とトイレがある。
男モノの財布があった。
財布も持って行かなかったのだ。すぐに帰ってくる。領収書に、郡司元康様とあった。サングラスのオトコは、郡司元康というオトコだ。
ガチっとドアノブをいじる音がした。早い。網ノ目三郎は、そっとベランダに出て、靴を履いた。そして、２階のベランダから芝生に飛び降りた。数秒差で、大野康子がカギを開けただろう。
芝生は、１階の住人の住み家だ。ブロック塀を登って越えた。狭い道路に出

た。

〇郡司元康
昨日は、ちょっと買い物に行ってきますと出たのだが、２時間も帰らなかった。看護師に怒られた。
頭の傷が完治していない。
「血が出るからいいんです」
年配の女性の看護師は、痛そうにしている網ノ目三郎を抑えるようにして、今日も髪の毛を切った。坊主頭にした方がいいかもしれない。
直後に、網ノ目三郎は、病院の前の道路でタクシーを拾った。大野康子のマンションである。
ブルーセダンがいた。30分待とうと思った。情報を得なければ勝負を仕掛けられない。ブルーセダンは、網ノ目三郎が病院にいる間は、何もできない。
寒いし、トイレに行きたくなった。
２人が出てきた。ゆっくり歩いて、ブルーセダンに向かっている。大通りに出て、タクシーを探した。正月だし、タクシーなどやって来ない。
「モニター終わりました」
須藤百合子からである。
「輪島セッケンのパッケージですけど、白っぽい明るいトーンにしました」
「１００ｇのセッケンの方も、同じトーンにしました」
「輪島ＢＢジェルは１週間使ってもらって、また14日に渋谷に来ることにしました」
「あのブルーセダンの後を行ってください」
「もしもし〜了解しました〜ごくろうさまです」
須藤百合子の声は明るかった。
ブルーセダンの２人は、スーパーマーケットに寄って買い物をした。網ノ目三郎は、タクシーの運転手さんに、すみませんと言って、千円渡した。
海側のキレイなマンションだった。２人は、エレベーターに乗った。２階で降りた。慌てて網ノ目三郎は、階段を昇った。２階に上がった時、２０９の部屋が締まるのが見えた。そっと通った。郡司元康の部屋だ。

長居もできず、階段を降りている時に、エレベーターが２階で止まった音がした。階段の影から、見ていた。誰かが、２０９号室の方に向かって、通り過ぎた。
網ノ目三郎は、そっと覗いた。
見覚えのある後姿だ。
２０９号室のピンポンを押している。
これはタイヘンなことだ。中には、ブルーセダンの２人がいるのだ。これはどういうことだろう。
「あなた何やってるの？」
「まだ血が出てるでしょ？」
「死んでもしりませんから」
年配の看護師は機嫌が悪かった。
網ノ目三郎は、今しかないのだ。ブルーセダンが仕掛けられない時は、網ノ目三郎が入院している時しかない。退院したら、また襲われる。

〇千鶴が撮った映像

１月３日の朝だった。千鶴がやってきた。早朝である。揚げ物屋に行く前だ。
網ノ目三郎は、大野康子のマンションにブルーセダンがあって、サングラスのオトコが郡司元康であることを話した。そして、最も大事な話しをした。見慣れた後姿だ。確信はない。
「このままではここを退院したらまた襲われるだろうから戦うしかない」
「どうやって戦ったらいいかわからない」
「あの人達と戦ったら勝てない」
「人と戦うのではないから」
「あなたが三枝さんをチェリーに入社させたことを思い出して」
「恐いのはわかるけど」
「イヤだったら。喫水とか輪島クレンジングとか輪島セッケンとかに手を出したらいけない」
網ノ目三郎は、20歳の千鶴に言われている。

「どうやったら勝ったことになるんだ？」
「輪島クレンジングと輪島セッケンがうまくいってチェリーの商品が変わったら終わる」
「時間がかかる」
「輪島クレンジングと輪島セッケンは速い」
「売場が少ないから速いんだけど」
「ブルーセダンは焦ってる」
「あなたの襲い方を見てるとフツウではない」
「いつまで入院できるの？」
「わからない」
「いまのまま退院したら危ない」
「ブルーセダンはわたしたちが戦おうとしていることを知らない」
網ノ目三郎は、千鶴が、わたしたちと言ったことに驚いている。
「戦いはじめたら驚くだろうけど、一気に勝負をつけないとブルーセダンの方が戦い慣れている」
千鶴の言っていることはよくわかるのだが、どうやって一気に勝負をつけたらいいのか、さっぱりである。
「わたしもう行かないと」
千鶴は、急いで揚げ物屋に向かった。
「真鍋真琴さんからメールもらってる」
「お正月明けたら来て」
「２人でお祝いしよう」
「お正月お祝いなのか」
「輪島クレンジングと輪島セッケンがいっぱい売れるようになったお祝い」
「ふ〜ん」
網ノ目三郎は、渋谷のファッションビルの化粧品店のバイヤーの真鍋真琴が、輪島クレンジングと輪島セッケンの、お店への貢献度が大きいことを喜んでいることを知った。
15時頃に、また千鶴がやってきた。
パソコン持ってきてあげた。朝、アパートのカギを千鶴に渡した。頼んでもいないのに、パソコンを持ってきてくれたのだ。

「カギはまだ預かっておく」
「掃除しないといけない」
「わたしがメールしてあるから見て」
「これ賄いの天丼」
「千鶴は？」
「わたしも同じの食べた」
「２つつくった」
「千鶴がつくったのか」
「黙って２つつくった」
天丼を食べながら、千鶴からのメールを開いた。
ブルーセダンの２人が、揚げ物屋に来たらしい。２人の顔をしっかり撮ってある。そして２人がブルーセダンに乗り込むところと、ナンバーをアップで撮ってある。
今朝、ここから網ノ目三郎のアパートに寄ってパソコンとカメラを持ってきたのだ。たまたまだろうが、ブルーセダンがやってきた。
写真はこれだけだった。
動画がある。
千鶴がブルーセダンを追っている。信号で止まった時だけ映像がある。ブルーセダンがずっと前にいる。千鶴は、ブルーセダンがどこに行くのか知っている。郡司元康のマンションだ。
次の映像は、ブルーセダンから振って、２人が、２０９の部屋に入るところだった。望遠だろう。はっきりしないが、大野康子も郡司元康も、着ているものが同じである。
２０９号室から、誰かが顔を出した。カギを開けて、外をうかがったのだ。網ノ目三郎は驚いてしまった。見慣れた後姿の人だった。遠くて望遠だからはっきりしない。しかし、網ノ目三郎は見慣れている。
映像はそこまでだった。
さっき、揚げ物屋にやってきたブルーセダンを追った映像である。
千鶴は、パソコンの先生でもある。お手のモノだろう。
網ノ目三郎は、こういうことは止めてほしい。
「ありがたいけど止めてほしい」

ケータイにメールした。
「わかってるけどチャンスだった」
「２人で戦わないと決着がつけられない」

○千鶴の驚くべき計画
「明日からチェリー新年なんだけど」
「お昼からでも出てこれる？」
まだ退院の許可が下りない。入院しているのだ。頭だから慎重なのだろう。毎日頭の中を調べている。出血の状況だろう。映像を見る限りでは、順調だとわかる。しかし、どこかの血管が傷ついていて、いきなり出血するかもしれない。街路樹の上の方まで飛ばされたのだ。
「あなたさえよかったら、仕掛けたいの」
「仕掛けるって？」
「明日の帰り襲われるから」
「私ですか？」
「時間がないから必ず襲う」
「マンホールがある歩道でわたし交差点の向こうでカメラ構えているから」
「あなた襲われて」
千鶴は、凄いことを言う。網ノ目三郎は、襲われて街路樹の上まで飛ばされて頭を打って出血しているのだ。まだ入院している。
「コンビニだって言って出ないといけない」
「出勤すると言ったらダメだって言われる」
「跳ねられないでよ？わたしが来たって言うから」
「この前のように２メートル跳べばいいんだからね」
「あの時映像があったら良かった」
「あなたがイヤだったらやらないけど」
「やる」
「わたしのスタンバイより前に来ないでよ？」
「ブルーセダンが来なかったら」
「明後日もやる」

「これは戦いだから」
「わかった」

○ブルーセダンがまた逆走した
１月５日だった。網ノ目三郎は、コンビニに行きますと言って、病院を出た。１月３日も４日も、網ノ目三郎は病院から一歩も出ていない。年配の看護師も、疑ってはいない。
タクシーに乗って、背広に着替えた。網ノ目三郎は、経営企画室長である。背広姿以外で、チェリー株式会社の中を歩いたことがない。
網ノ目三郎を見て、美鈴千賀子も驚いた。みんな驚いた。頭に包帯が巻かれていて、帽子のようなものをかぶっている。
社長の山上郁夫と山上一郎にあいさつに行った。
「個人的なことで迷惑をおかけして申し訳ありません」
「運転下手な人が多いから気をつけないといけない」
山上郁夫と山上一郎は、とんだ災難だったと、網ノ目三郎を慰めてくれた。命があっただけ良かったとも言った。
「車道を歩かないようにしてください」
横辰八郎は、こう言った。
「喫水勘定のことで相談がある」
「帰りはフツウどおりなの？」
「ついてないからバスと同じくらいの時間に歩いて帰ります」
前川芳則が探してやってきた。
「輪島セッケンが通信販売で毎日２０００セット出ています」
「15個入り３００円が２０００ですから毎日３００００個包装が出ていて、小売りで毎日６００万円になります」
「相談ってなんですか？」
「美鈴さんが詳しいことを話しますけど１トン釜を輪島セッケンに使わせてもらえないか」
「１トン釜はそんなに稼働していません」
「なにか難しいことがあるのですか？」

「山上郁夫社長の商品のための１トン釜ですから」
「私が社長に話します」
「後で連絡します」
網ノ目三郎にしか片づけられない仕事もあるのだと思いながら、美鈴を探した。
火災にあったパッケージ倉庫も見たが、臭いすらも残っていなかった。
あの時間に意味があったのだ。千鶴のお母さんが危篤とウソの電話をして、網ノ目三郎が揚げ物屋に行く、12時30分という時間である。
すごく巧妙に仕組まれたシナリオなのだ。すべて、網ノ目三郎をパニックにして、ブルーセダンが襲うための仕掛けなのだ。網ノ目三郎は街路樹の上まで飛ばされたが、頭に傷を負ったが、命は奪えなかった。
パッケージ倉庫を見ていると、不思議になる。ここに誰かが火をつけたのだ。火事でチェリーの工場を焼失させるものではない。網ノ目三郎に電話させればいいのだ。
ここに誰が火をつけたのか、想像できる。
「お先に〜」
バスよりも早く、網ノ目三郎は会社を出た。途中でバスに追い抜かれる。バスは左を通る。網ノ目三郎は右の車線の歩道を通る。ブルーセダンは逆走してくるはずである。今日ブルーセダンが来なかったら明日もこれをやることになる。
「今着いたけどまだここまで来ないで」
「３分待って」
３分では、マンホールのある少し広い歩道まで行けない。交差点の手前のマンホールだ。交差点の向こうには、千鶴の車が止まっていて、カメラが回っているはずである。もし失敗したら、千鶴は、網ノ目三郎の交通事故の現場映像を撮影していることになる。
あり得ないことをやっているのだ。
「右にブルーセダンがいる」
「まだ遠いけどゆっくり走ってる」
「車がいなくなるのを待ってる」
「ここの信号さっきから青だから車がいなくなる」

「来るよ？」
網ノ目三郎目は、千鶴の車が見えた。千鶴も見えた。誘うように、少し車道側に出た。
「そんなことしなくていい」
「Ｕターンのように見せかけてる」
「Ｕターンしないで逆走するよ？来るよ？」
電話だった。千鶴と電話してる。
「わたしだけど」
峠下冴子だった。
「１トン釜使わせて欲しいんだって？」
「跳んで」
一瞬に跳んだ。１秒はなかったのではないかと、跳びながら思った。ブルーセダンは、すごいスピードで千鶴の車の前で、交差点を左に曲がった。タイヤの大きな悲鳴が聞こえた。
車の通りはなかった。誰も気がつかない。
「病院に行ってください」
網ノ目三郎は千鶴の車に乗り込んだ。
ブルーセダンに、千鶴の車を気づかれたくない。
峠下冴子から電話である。
「出ないで」
千鶴もよくわかっている。
「わたしお母さんの病院に行くから」
「あとで来るから」
「これ見ておきます」
千鶴は、網ノ目三郎を病院に送って、そのまま自分のお母さんの病院に向かった。お母さんにごはんを食べさせないといけない。
網ノ目三郎は千鶴の車で、着替えていた。
「ごはん食べさせないって怒ってるわよ？」
年配の看護師がやってきて言った。
「すみません」
「北海道のコンビニまで行って来たの？」

「ジャガバター食べたくて」
「すぐ持ってこさせるから」
「すみません」
カメラの映像を見たかったのだが、ガマンした。
ペコペコだった。
千鶴が揚げ物屋の揚げ物うどんを２つテイクアウトして持ってきた。早い時間だった。
「見た？」
「今から」
「冷めないうちに食べる」
「どうぞ」
「あなたのもあるから」
ベッドの横のテーブルで揚げ物うどんを食べながらカメラの映像を見た。
網ノ目三郎も千鶴も、一瞬箸が動かなくなった。
遠くで、ブルーセダンがＵターンしようとしている。１分くらいそのままだった。ブルーセダンは、Ｕターンせずに、右のレーンを逆走しはじめた。すごいスピードである。グングン加速した。前の歩道を網ノ目三郎が歩いている。危ないと誰もが叫ぶ。網ノ目三郎は右に跳んだ。１秒もない時間だった。ブルーセダンは、フラフラっとして交差点に入って急ブレーキがかかった。ブレーキの大きな音がして、ブルーセダンは左に曲がった。そのまま走り去った。
時間にして２分くらいである。アッという間だった。
網ノ目三郎と千鶴は、顔を見合わせた。
「わたし帰って編集するから」
「明日の朝早く来る」
「明日のことは明日相談するから」
「わかった」
網ノ目三郎と千鶴は、黙って揚げ物うどんを食べた。

〇勝負

１月６日だった。金曜日である。まだ６時だった。
「これとにかく見て」
ディスクにしてあった。
ナレーションも何もなかった。いきなりブルーセダンが出てきて、ナンバーが大写しになった。郡司元康が大写しになって大野康子が大写しになって、２人がブルーセダンに乗り込む映像になった。郡司元康のマンションがあってブルーセダンがあって、２人が２０９号室に入る映像があった。少し遠い。そして、２０９号室から出て来て周りを見回した人物の映像になっていた。そして、ブルーセダンが遠くを走ってきて、網ノ目三郎を襲う２分の動画が続いていた。ブルーセダンが走り去るところで映像は終わった。
「ダビングしてあるから」
千鶴は、３枚網ノ目三郎に渡した。
「早いけどわたしいまから会社行くから」
「この１枚はあの人のパソコンに置いてくる」
「今日もあなた元気だったら狙われる」
「警察とか動かないから甘く見られてる」
「今日やらないとあなたが危ない」
「いい？」
「今日は、お昼から来てバスの時間に帰って」
「わたし昨日と同じ所にいるから」
「カメラも持ってる」
網ノ目三郎は、黙って聞いていて、ただうなづくだけだった。
この映像がネットに載ったら、すごい数の人が見てしまうだろうと思った。特に、最後の２分は、すごい迫力なのだ。正面からブルーセダンが飛んでくる。
「大丈夫ですか？」
「どうもありがとうございます」
「来週１トンでやります」
美鈴がうれしそうにお礼を言った。
夕方だった。峠下冴子から20名くらいのチェリー株式会社の社員全員にメールが来た。

「離婚してアメリカに住んでいる前の主人が危篤になりました。日本に住んでいる息子の元康も一緒に、今晩の飛行機でアメリカに行きます。山上社長には、無理を聞いていただいてありがとうございます。もう日本に帰ることはありません。ながい間お世話になりました」
全員ア然とした。ことばがないのだ。
このメールは、網ノ目三郎１人に向けられている。
網ノ目三郎は、千鶴のケータイに転送した。
網ノ目三郎と千鶴しか知らないことだ。
「明日の土曜日夕方行くから」

『ブルーセダンとの戦いー変革者』

２０１２年春

２０１９年

げんじあきら

『ブルーセダンとの戦いー変革者』の前編になる『喫水ー変革者』も読んでいただきたい、後編の『リモデリングー変革者』も読んでいただきたい
『ソウルの縄文』『ソウルのマナティ』を読んでいただきたい
『人と集団を滅ぼすもの』を読んでいただきたい
『よろいってなんだ』『壊れるよろい』『脱げないよろい』『ルイハシのよろい』『ちかのよろい』『朗人のよろい』を読んでいただきたい
『ヒット商品』『売上を目指すと滅びる』『魅力ある商品が溢れる』を読んでいただきたい
『魅力が溢れる』を読んでいただきたい

ブルーセダンとの戦いー変革者

著者　　　げんじあきら